佐賀県文化財調査報告書第60集

押川遺跡

座主遺跡・前田原遺跡

1981年3月

佐賀県教育委員会

佐賀県文化財調査報告書第60集

押川遺跡

座主遺跡・前田原遺跡

1981年3月

佐賀県教育委員会

序

この調査報告書は農業基盤整備事業の施工に先がけて、国庫補助金を得て実施した埋蔵文化財発掘調査のうち、東松浦郡肥前町納所に所在する押川遺跡と、北波多村山彦に所在する座主遺跡・前田原遺跡の報告であります。

押川遺跡は縄文時代より弥生時代にかけての住居跡・貯蔵穴・甕棺墓が検出され、多数の土器・石器が出土し、座主遺跡からは縄文時代より室町時代にかけての遺構と遺物が検出されました。押川遺跡の多数の遺構と遺物・座主遺跡出土の石帯・墨書土器など、この時代の生活文化を解明する上で重要な意味をもつものと考えられます。

ここに発掘調査報告書を刊行し、学術資料として、また重要な文化財を、県民の共有財産として大切に保存していくための資料として役立てていただければ幸いです。

この調査にあたって文化庁、県唐津農林事務所、肥前町教育委員会、同開発課、北波多村教育委員会、同建設課、並びに地元の関係者各位の深いご理解とご協力に対し、心からお礼申し上げます。

昭和56年３月31日

佐賀県教育委員会
教育長　古　藤　　浩

例　　言

1．本書は昭和55年度に発掘調査を実施した押川遺跡、座主遺跡、前田原遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は国庫補助を受け佐賀県教育委員会がこれにあたった。

3．遺構の実測は調査員、調査補助員があたり、遺構写真撮影は森田孝志がおこなった。

4．遺物の整理は、佐賀県文化財資料室、唐津市鏡公民館でおこなった。

遺物の接合、復元は宮崎礼子、新井久美、千住順子、高畠澄子、平野澄子、広滝敏子、古川万鶴代がおこなった。

遺物の実測には池田覚子、中島成子、西村信子、藤原倫子、福田京子、森田孝志があたった。

製図は山本タカ子、山崎美紀子、馬場悦子、高瀬久美子、本田京子がおこなった。

遺物写真撮影には、森田孝志、原口定があたり、西田和己が協力した。

5．本書の執筆、編集は森田孝志が担当した。

凡　　例

1．遺構番号は、ＳＢ：住居跡、ＳＫ：貯蔵穴・土壙、ＳＪ：甕棺墓、SD：溝状遺構、P：柱穴・小土壙である。

2．押川遺跡出土の土器は遺物実測図の個々の番号の下に出土遺構番号を記した。

3．挿図、本文中に用いた方位は、押川遺跡については真北、座主遺跡・前田原遺跡については磁北である。

本　文　目　次

Ⅰ．押川遺跡
1．発掘調査の経過 …… 2
(1)調査に至る経過 …… 2
(2)調査の組織 …… 2
(3)調査日誌 …… 3
2．遺跡の概要 …… 5
3．遺　　構 …… 6
(1)住　居　跡 …… 6
(2)貯　蔵　穴 …… 13
(3)甕　棺　墓 …… 20
4．遺　　物 …… 22
(1)土　　器 …… 22
(2)埋葬に用いられた土器 …… 29
(3)管玉・土製品 …… 29
(4)石　　器 …… 39
5．総　　括 …… 54

Ⅱ．座主遺跡・前田原遺跡
1．発掘調査の経過 …… 59
(1)調査に至る経過 …… 59
(2)調査の組織 …… 59
(3)調査日誌 …… 60
2．遺跡の概要 …… 60
3．遺　　構 …… 62
(1)座主遺跡２区の遺構 …… 62
(2)座主遺跡６区の遺構 …… 64
(3)座主遺跡４区・５区の遺物包含層 …… 64
(4)前田原遺跡の遺構 …… 65
4．遺　　物 …… 66
A．座主遺跡出土の遺物 …… 66
(1)土　　器 …… 66
(2)陶　磁　器 …… 74
(3)石　　器 …… 76
(4)石製品、土製品、その他の遺物 …… 76
B．前田原遺跡出土の遺物 …… 78
5．総　　括 …… 83

挿　図　目　次

Fig. 1　押川遺跡周辺の地形と主な遺跡 …… 4
Fig. 2　押川遺跡地形図 …… 7
Fig. 3　ＳＢ081住居跡実測図 …… 8
Fig. 4　ＳＢ082住居跡実測図 …… 8
Fig. 5　ＳＢ083住居跡実測図 …… 9
Fig. 6　ＳＢ084住居跡実測図 …… 10
Fig. 7　ＳＢ085住居跡実測図 …… 11
Fig. 8　ＳＢ086住居跡実測図 …… 11
Fig. 9　ＳＢ087・088住居跡実測図 …… 12
Fig. 10　ＳＫ011貯蔵穴実測図 …… 13
Fig. 11　ＳＫ015貯蔵穴実測図 …… 13
Fig. 12　ＳＫ016貯蔵穴実測図 …… 14
Fig. 13　ＳＫ017貯蔵穴実測図 …… 14
Fig. 14　ＳＫ026貯蔵穴実測図 …… 14
Fig. 15　ＳＫ033貯蔵穴実測図 …… 15
Fig. 16　ＳＫ035貯蔵穴実測図 …… 15
Fig. 17　ＳＫ041貯蔵穴実測図 …… 15
Fig. 18　ＳＫ045貯蔵穴実測図 …… 16
Fig. 19　ＳＫ064貯蔵穴実測図 …… 16
Fig. 20　ＳＫ068貯蔵穴実測図 …… 16
Fig. 21　ＳＪ001・002・003・004・005甕棺墓実測図 …… 20
Fig. 22　ＳＪ006・007甕棺墓実測図 …… 21
Fig. 23　押川遺跡出土土器実測図(1) …… 24
Fig. 24　押川遺跡出土土器実測図(2) …… 25
Fig. 25　押川遺跡出土土器実測図(3) …… 26
Fig. 26　押川遺跡出土土器実測図(4) …… 28
Fig. 27　押川遺跡出土土器実測図(5) …… 30
Fig. 28　押川遺跡出土土器実測図(6) …… 31
Fig. 29　押川遺跡出土土器実測図(7) …… 32
Fig. 30　押川遺跡出土甕棺実測図(1) …… 33
Fig. 31　押川遺跡出土甕棺実測図(2) …… 34

Fig.32　押川遺跡出土管玉・土製品実測図、写真 …… 34
Fig.33　押川遺跡出土石器実測図(1) …… 40
Fig.34　押川遺跡出土石器実測図(2) …… 42
Fig.35　押川遺跡出土石器実測図(3) …… 44
Fig.36　押川遺跡出土石器実測図(4) …… 45
Fig.37　押川遺跡出土石器実測図(5) …… 46
Fig.38　押川遺跡出土石器実測図(6) …… 47
Fig.39　押川遺跡出土石器実測図(7) …… 48
Fig.40　押川遺跡出土旧石器実測図 …… 49
Fig.41　座主遺跡・前田原遺跡周辺の地形と主な遺跡 …… 58
Fig.42　座主遺跡地形図 …… 61
Fig.43　２区ＳＫ002土壙実測図 …… 62
Fig.44　２区ＳＫ003土壙実測図 …… 62
Fig.45　２区柱根のある柱穴実測図 …… 63
Fig.46　座主遺跡６区遺構配置図 …… 64
Fig.47　座主遺跡４区東壁土層図 …… 64
Fig.48　前田原遺跡地形図 …… 65
Fig.49　座主遺跡出土縄文・弥生土器実測図 …… 67
Fig.50　座主遺跡出土弥生土器実測図 …… 68
Fig.51　座主遺跡出土弥生土器実測図 …… 69
Fig.52　座主遺跡出土弥生土器・木製品実測図 …… 70
Fig.53　座主遺跡出土土師器実測図 …… 71
Fig.54　座主遺跡出土須恵器実測図 …… 73
Fig.55　座主遺跡出土須恵器・磁器実測図 …… 75
Fig.56　座主遺跡・前田原遺跡出土遺物実測図 …… 77
Fig.57　座主遺跡出土石器実測図 …… 78
Fig.58　前田原遺跡出土須恵器実測図 …… 79

表　目　次

Tab 1　押川遺跡住居跡一覧表 …… 12
Tab 2　押川遺跡貯蔵穴一覧表 …… 17～19
Tab 3　押川遺跡甕棺墓一覧表 …… 22

Tab 4　押川遺跡出土土器一覧表 …… 35～38
Tab 5　押川遺跡出土石器一覧表 …… 47
Tab 6　押川遺跡出土石器（磨石・敲石）一覧表 …… 47・48
Tab 7　押川遺跡出土石鏃計測表 …… 49・50
Tab 8　座主遺跡出土弥生土器一覧表 …… 79
Tab 9　座主遺跡出土土師器一覧表 …… 76
Tab 10　座主遺跡出土須恵器一覧表 …… 76

図　版　目　次

ＰＬ1　①押川遺跡遠景　②押川遺跡調査区全景　③押川遺跡調査区北東部遺構（ＳＢ087・088）
ＰＬ2　①ＳＢ081住居跡　②ＳＢ082住居跡　③ＳＢ083住居跡
ＰＬ3　①ＳＢ084住居跡　②ＳＢ085住居跡　③ＳＢ086住居跡
ＰＬ4　①ＳＫ011貯蔵穴　②ＳＫ015貯蔵穴　③ＳＫ016貯蔵穴　④ＳＫ017貯蔵穴　⑤ＳＫ026貯蔵穴　⑥ＳＫ033貯蔵穴　⑦ＳＫ035貯蔵穴　⑧Ｐ250柱穴石包丁出土状況
ＰＬ5　①押川遺跡甕棺墓群全景　②ＳＪ001・002甕棺墓　③ＳＪ003甕棺墓　④ＳＪ004甕棺墓
ＰＬ6　①ＳＪ005甕棺墓　②ＳＪ006甕棺墓　③ＳＪ007甕棺墓
ＰＬ7　押川遺跡出土甕棺
ＰＬ8　押川遺跡出土土器
ＰＬ9　押川遺跡出土土器
ＰＬ10　押川遺跡出土土器
ＰＬ11　押川遺跡出土石器
ＰＬ12　押川遺跡出土石器
ＰＬ13　①座主遺跡全景　②座主遺跡全景　③座主遺跡２区北側遺構
ＰＬ14　①座主遺跡２区南側遺構　②２区ＳＫ002土壙　③２区ＳＫ003土壙
ＰＬ15　①２区Ｐ25・Ｐ29柱穴　②２区Ｐ26柱穴　③座主遺跡６区遺構　④座主遺跡６区南壁土層
ＰＬ16　①座主遺跡４区全景(推積層堀り上げ後)　②座主遺跡４区東壁土層　③４区第４層木製高杯出土状況　④４区第４層弥生土器出土状況　⑤⑥４区第３層墨書土器(須恵器)出土状況
ＰＬ17　①前田原遺跡全景　②前田原遺跡調査区全景　③前田原遺跡調査区全景
ＰＬ18　座主遺跡出土弥生土器・土師器
ＰＬ19　座主遺跡・前田原遺跡出土土器（須恵器）
ＰＬ20　座主遺跡出土墨書土器・合子
ＰＬ21　座主遺跡・前田原遺跡出土土器・磁器・土製品・石製品・木製品

折　り　込　み

折り込み１　押川遺跡遺構配置図
折り込み２　座主遺跡２区遺構配置図
　　前田原遺跡遺構配置図

Ⅰ．押川（おしごう）遺跡

遺　跡　名：押　川　遺　跡(略号ＯＳＧ)

遺跡所在地：東松浦郡肥前町大字納（のうき）所字押川

1．発掘調査の経過

(1) 調査に至る経過

押川遺跡は、古くから旧石器時代～弥生時代の遺跡として知られていた。昭和55年度上場地区農業基盤整備事業の工事施工区域に、この押川遺跡が含まれることになり、工事に先立って佐賀県教育委員会文化課は、昭和55年10月に、遺跡の範囲確認のため予備調査を実施した。その結果、工事区域内で、約12,000㎡の遺跡の範囲を確認した。県教育委員会が県唐津農林事務所、肥前町開発課と協議した結果、盛土になる部分は保存し、沈砂地として削平をうける部分の約1,700㎡を発掘調査することになった。

調査は10月13日に始まり12月26日に終了した。調査期間中肥前町議会、肥前町教育長、肥前町文化財保護審議委員会の視察を受けた。調査と併行して、出土遺物の水洗・選別作業を唐津市鏡公民館で行ない、調査終了後、一部の水洗・選別・復元・遺物実測図作成などを佐賀県文化財資料室において行なった。

(2) 調査の組織

調査主体　佐賀県教育委員会

調査担当

事務局　佐賀県教育庁文化課

調査責任者　木下　巧　文化課文化財調査第二係係長

調査員　堀川　義英　〃　〃　指導主事

（担当）　森田　孝志　〃　〃　嘱託

調査補助　石崎　俊治　北波多村文化財保護審議委員
北波多村郷土史研究会

寺田　和正　文化課文化財調査第二係調査準補助員

発掘作業員　井上アキノ・井上ミヤキ・井上トミ子・井上セツヨ・井上トミノ・井上　フデ
井上テル子・井上ツルヨ・井上ミツヨ・井上アイコ・井上ナミコ・井上ユクエ
井上ハルミ・中山ハツエ・中山ヨシノ・中山　ヤヨ・中山ミツエ・山口　弘子
山口　益恵・山口マキヨ・山口　キノ・小崎　サイ・隈本　鍈・渡辺　幸子
山口　一秋

協力　佐賀県唐津農林事務所・肥前町教育委員会・同開発課・㈱岸本組

(3) 調査日誌

10月13日　本日より調査を開始する。予備調査の結果、縄文時代晩期～弥生時代の遺構の存在が予想される。

10月17日　調査区北側より遺構検出作業を始める。調査区北東部から甕棺墓を検出。

10月18日～10月28日　調査区中央部から多数の貯蔵穴・柱穴を検出する。

10月30日　調査区中央部より４基の住居跡を検出し、本遺跡は、生活遺構と墓地群からなる遺跡と判明した。柱穴を掘り始める。

10月31日　肥前町教育長視察

11月１日　調査区南側の遺構検出を始める。２基の住居跡と貯蔵穴約70基を検出する。

11月４日　調査区全域の遺構検出を終了する。住居跡６基、貯蔵穴約70基、甕棺墓７基、多数の柱穴群、焼土面を検出。貯蔵穴を掘り始める。

11月11日～11月14日　北波多村確認調査のため、発掘作業を中断する。

11月13日　現場おはらい式（肥前町教委主催）

11月17日　調査区北側の貯蔵穴・柱穴の掘り下げ。

11月25日　調査区中央部の貯蔵穴掘り下げ。

11月27日　甕棺墓を掘り始める。肥前町文化財保護審議委員会視察。

12月４日　住居跡を掘り始める。

12月８日～12月10日　遺構の写真撮影。

12月12日　甕棺墓の実測を始める。

12月17日　遺構実測を始める。甕棺の取り上げ。

12月20日　肥前町町議会視察。

12月25日　遺構実測を終了する。

12月26日　器材を撤収し、本日で調査をすべて終了する。

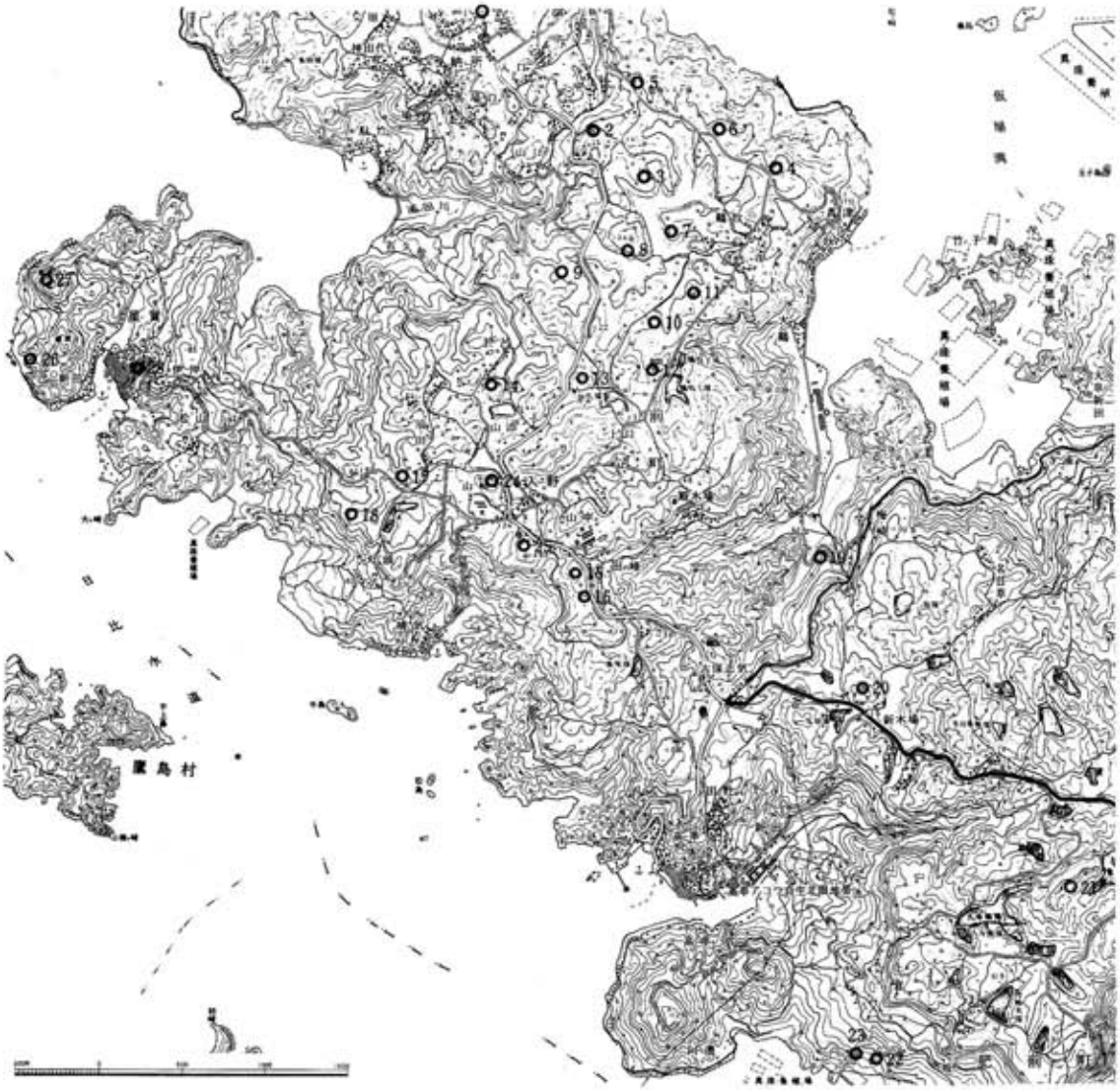


Fig. 1　押川遺跡周辺の地形と主な遺跡

1．松の木遺跡	8．**押川遺跡**	15．磯道遺跡	22．百田洞穴遺跡
2．山中遺跡	9．深田遺跡	16．田尾遺跡	23．玄藩ヶ岩洞穴遺跡
3．西七ッ江遺跡	10．コッポ遺跡	17．宇の山遺跡	24．深田古墳群
4．山ノ上遺跡	11．尾山遺跡	18．大野遺跡	25．音元古墳
5．龍田遺跡	12．鶴牧遺跡	19．鶴の岩屋岩陰遺跡	26．向江山古墳
6．七津江遺跡	13．ニッチ遺跡	20．友田溜周辺遺跡	27．岩森山列石遺構
7．田平遺跡	14．於呂溜周辺遺跡	21．川原田遺跡	28．星賀中世墓地

2．遺跡の概要

押川遺跡は東松浦郡肥前町大字納所字押川に所在している。肥前町は佐賀県の北西部、東松浦半島の南西端にある。東松浦半島の南西部に仮屋湾が入り込み、半島状に突き出た部分が肥前町である。町は東西に長く、海峡（日比水道）を隔てて、西側に長崎県鷹島村、南側に福島町と対峙し、南東が伊万里市、東が唐津市と接している。

肥前町のある東松浦半島は、第三紀層の上部を噴出した溶岩（玄武岩）が覆った溶岩台地で、別名、上場台地と呼ばれる。この上場台地は全体に高原状をなしており、高い山は少なく、丘陵が多い。また、海岸は、沈降海岸で、複雑に入り込んでいる。丘陵が多いため畑地が多く、水田は少なくて、低地の湿地帯や、湧水近くの丘陵斜面に棚田として営まれている程度である。

遺跡は、丘陵の斜面や、鞍部に多く存在する。なかでも押川遺跡のある肥前町納所付近は、ゆるやかな起伏の丘陵が多く、遺跡の密集した地域である。遺跡は旧石器時代・縄文時代のものが多く、弥生時代以降のものは少ない。

旧石器時代の遺跡は、磯道遺跡[1)]・生石遺跡[2)]・川原田遺跡[3)]・ニッチ遺跡[4)]など、多数の遺跡が知られている。なかでも磯道遺跡からは良好な包含層が確認され、多数の接合資料が出土しており注目される。

縄文時代の遺跡は、縄文前期の土器・石器が出土した百田洞穴遺跡[5)]や、縄文晩期の土壙と炉跡が検出され、布痕土器や打製石斧が出土したコッポ遺跡[6)]をはじめ、遺物散布地が各所に点在する。また肥前町の南側の海岸地帯には、海蝕洞穴が多く、岩陰遺跡の存在する可能性が強い。

弥生時代の遺跡は、あまり見つかっておらず、押川遺跡の他、ニッチ遺跡[7)]から住居跡と柱穴が検出されている程度である。

古墳時代の遺跡としては、古墳が3ヶ所知られている。みな、海岸近くの丘陵頂部に営なまれた小型の円墳で、内部主体は破壊されており明らかでない。そのひとつ、向江山古墳から耳環や、須恵器が出土している。

歴史時代の遺跡は、五輪塔や宝篋印塔が点在する程度で他に、星賀の岩森山に列石遺構があるが性格は明らかでない。

押川遺跡は肥前町の中心部から北へ約1.8kmの距離にある。標高114.17ｍの丘陵の南部から南東部の斜面にかけて遺跡は存在する。丘陵はなだらかで、中央部はゆるい鞍部になっている。丘陵の両側に湧水があり、遺跡は非常に良い立地条件にある。

(註)

(1) 昭和55年度調査　同年度報告書刊行予定

(2) 昭和53年度調査　佐賀県教育委員会　「生石遺跡」1979年

(3) 昭和53年度調査　昭和55年度報告書刊行予定

(4) 昭和55年度調査　同年度報告書刊行予定

(5) 佐賀県立博物館が調査を行ない、昭和55年度報告書刊行予定

(6) 昭和55年度調査　同年度報告刊行予定

(7) 註4

3．遺　構

検出した遺構は、住居跡、貯蔵穴、甕棺墓、柱穴である。遺構は調査区の北東部、中央部、南東部に密集している。北東部に2基の住居跡と貯蔵穴があり、北東部隅に甕棺墓がある。中央部には1基の住居跡と柱穴群・貯蔵穴群がある。南東部は丘陵の鞍部にあたり、最も遺構が密集していて、5基の住居跡と多数の貯蔵穴・柱穴群がある。また中央部から南東部にかけて、表土と地山の間に厚さ10cm～20cmの暗褐色の堆積土がみられ、この堆積土中から10cm～15cmの礫とともに多数の土器片・石器が出土した。土器は縄文晩期から弥生中期初頭のもので、小破片が多く、しかも全体に磨滅していた。これら遺物は北側から流れて堆積したものと考えられる。

(1) 住 居 跡

検出した住居跡は合計8基で、6基は竪穴が残っており、2基は削平により床面のみ残ったものである。この他にもSK091貯蔵穴南側の焼土面（S－6・S－7）周辺や、SK054貯蔵穴南側、SK040貯蔵穴南側および東側の柱穴が密集した地域に、さらに数基の住居跡が存在した可能性が強い。

SB081住居跡（Fig. 3、PL. 2）

調査区中央部南側に位置する。平面が楕円形の竪穴住居跡で、長さ3.5m、幅3m、深さ0.1mである。上部は削平されており、特に東側がひどい。柱穴は14ヶ所確認され、中央の2ケ所が大きく、それを囲むように他の柱穴がある。本遺跡の住居跡の中で、柱穴の配置関係はこの住居跡が最も明確である。遺物は少なく、埋土から土器の小破片、石鏃、掻器が、柱穴内から壺底部Bが出土した。

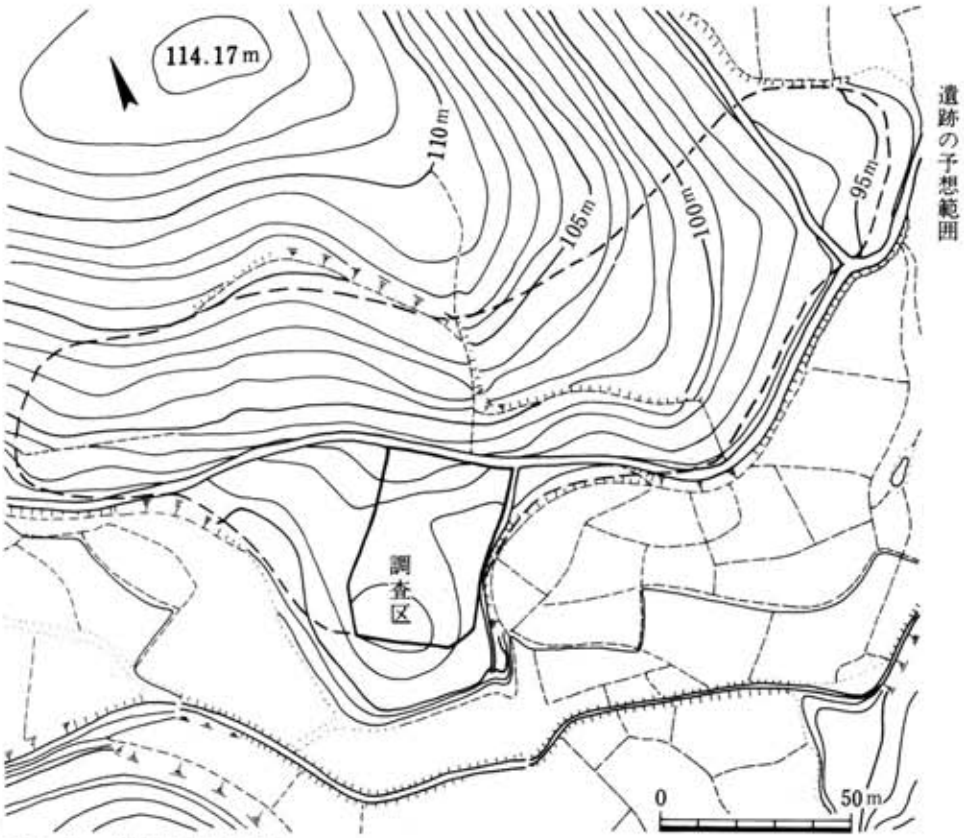


Fig 2　押川遺跡地形図

ＳＢ082住居跡（Fig. 4、PL. 2）

調査区の南東部、ＳＢ085住居跡の北側に位置している。平面がほぼ円形の竪穴住居跡で、長さ3.6m、幅3.5m、深さ0.2mである。上部は削平され、北西部はＳＫ066貯蔵穴が切っている。柱穴は中央部と壁の周囲から合計11ヶ所確認された。南西部壁近くには、長さ0.48m、幅0.46mの方形の穴がある。遺物は埋土から甕ＢII、壺Ｂ、石鏃、磨石、敲石が出土した。

ＳＢ083住居跡（Fig. 5、PL. 2）

調査区の南東部、ＳＢ082住居跡の西側に位置している。平面が不整楕円形の竪穴住居跡で、長さ3.6m、幅3.1m、深さ0.1m～0.2mである。上部は削平されている。床面は南側が一段低くなっている。南西部の床面上に土器片とともに焼土塊が長さ0.6m、幅0.5m、厚さ0.1m範囲にかたまっていた。この焼土は、住居跡の廃絶直後、投げこまれたものと推定される。柱穴は11ヶ所確認され、不規則に配列している。遺物は南西の床面から甕ＢＩ・ＢII、埋土から壺Ｃ、石鏃、敲石、石核が出土した。

ＳＢ084住居跡（Fig. 6、PL. 3）

調査区の南東部、住居跡の中では最も南に位置する。平面は不整楕円形で、長さ4.2m、幅4m、深さ0.1m～0.2mと本遺跡では最も大きい竪穴住居跡である。上部は削平され、特に東側が

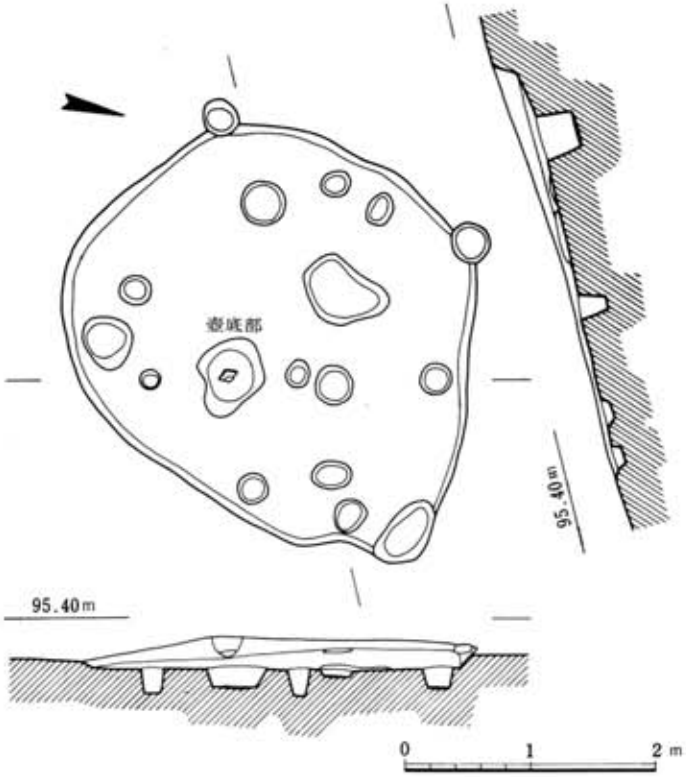


Fig. 3　SB081住居跡実測図

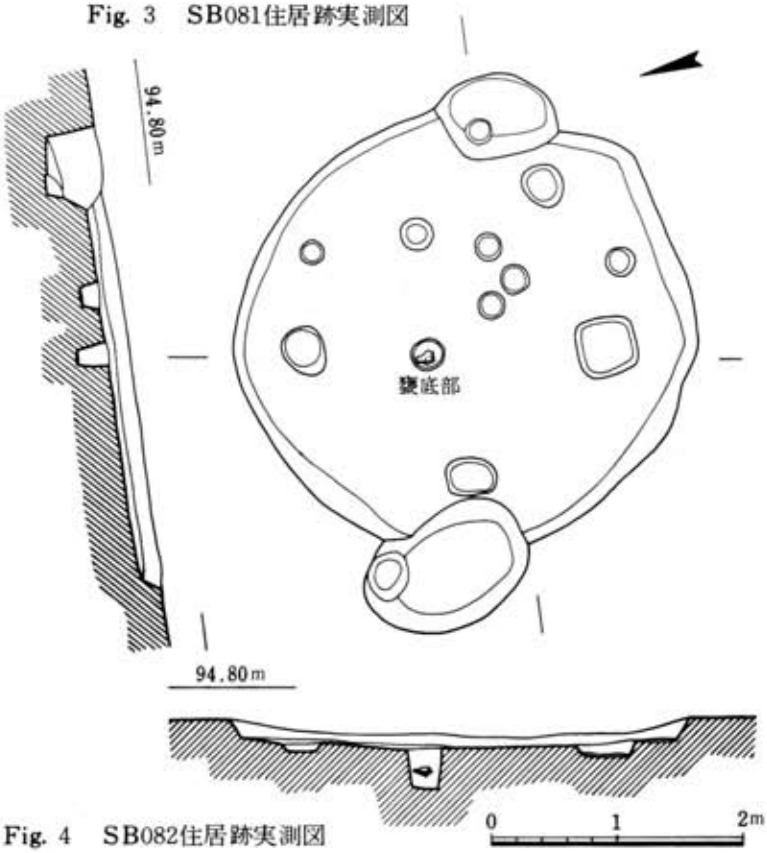


Fig. 4　SB082住居跡実測図

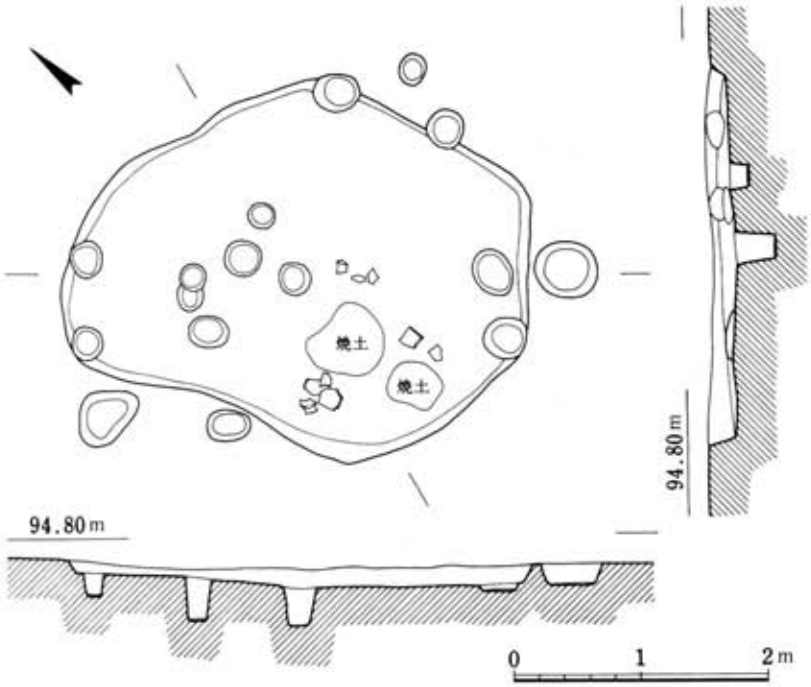


Fig. 5　SB083住居跡実測図

ひどく、残りが悪い。住居跡の南側は性格不明の遺構と切り合っているが、前後関係は明らかにできなかった。床面の北側に、平面が楕円形で長さ1.5m、幅0.75m、深さ0.45mの土壙がありこの住居跡にともなう貯蔵穴と考えられる。柱穴は、中央部および壁の周辺から合計16ヶ所確認された。埋土には、拳大の礫を多く含んでいた。遺物は東側床面にへばりついた状態で甕AⅢ、中央部床面直上から石皿、磨石、埋土から甕BⅠ・BⅡ・壺C・片刃石斧・石鏃・掻器・石核が出土した。

ＳＢ085住居跡（Fig. 7，PL. 3）

調査区南東部、ＳＢ083住居跡とＳＢ086住居跡の間に位置する。平面が楕円形の竪穴住居跡で、長さ3.8m、幅3.2m、深さ0.2mである。上部は削平され住居跡の南東部をＳＫ076貯蔵穴が、北東部を柱穴が切っている。床面の北側に平面が隅丸方形で長さ0.74m、幅0.1mの土壙がある。北東壁面には直径約35cm程の真赤に焼けた部分が見られる。柱穴は、中央部および壁ぎわに11ヶ所確認された。遺物は埋土から甕BⅡ・甕C・石鏃・磨石・掻器・石核が出土した。

ＳＢ086住居跡（Fig. 8，PL. 3）

調査区南東部、SB085住居跡の南に位置する。東半分は農道の下のため調査できなかった。竪穴住居跡で、平面は円形もしくは楕円形になると推定する。長さ3.8m、深さ0.1m～0.3mである。上部は削平され、北側をSK068貯蔵穴が切っている。柱穴は11ヶ所確認され、その配置は不規則である。遺物は埋土から甕BⅠ・甕BⅢ・壺C・石鏃・掻器・石皿・磨石・石核が出土した。石核が出土した。

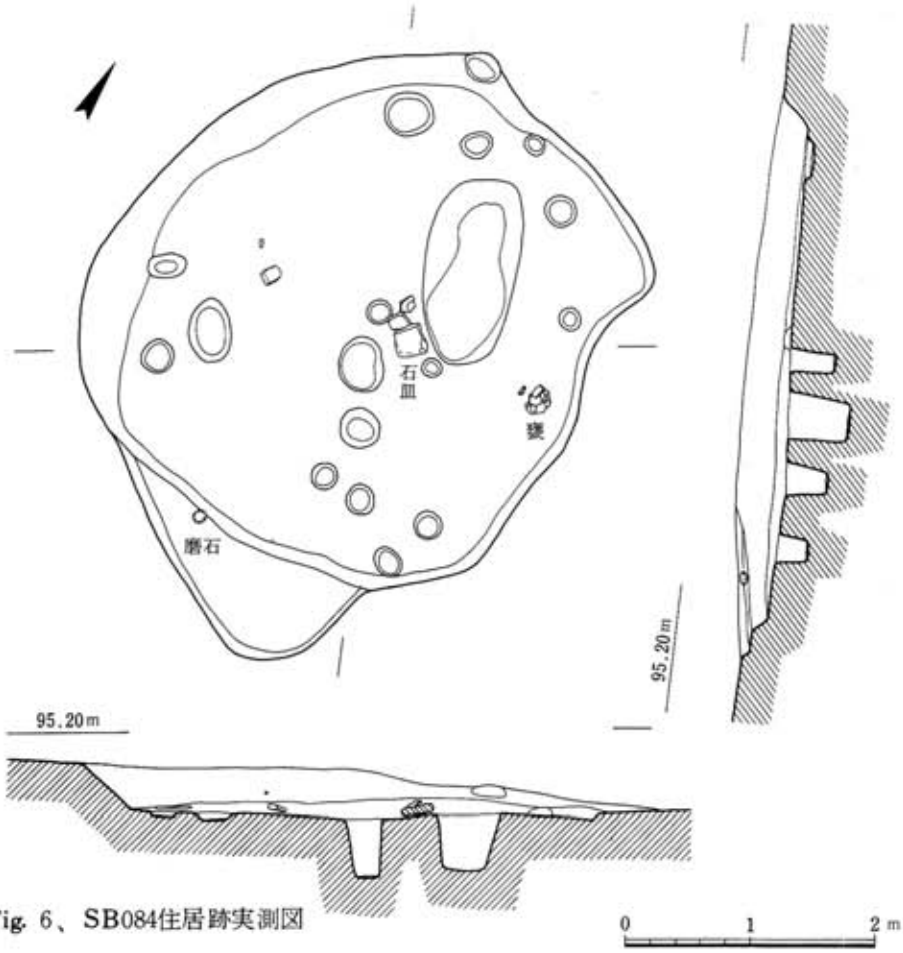


Fig. 6、SB084住居跡実測図

ＳＢ087・088住居跡（Fig 9　PL 1）

調査区の北東部に位置する。この部分に多数の柱穴群が密集しており、地山を整形して斜面を平らにした痕跡がみられた。また地山が真赤に焼けた焼土面が３ヶ所確認され、土器がまとまって出土した。以上のことから、この部分に、上部が削平され、床面のみ残った住居跡の存在が考えられ、西側をＳＢ087住居跡、東側をＳＢ088住居跡とした。

SB087住居跡は、床に炉跡らしき１ヶ所（S－3）の焼土面がみられ、焼土面は、長さ1.2m、幅0.6m、厚さ0.05mである。遺物は床面直上より甕底部C・壺底部Dが出土した。

SB088住居跡は、床に２ヶ所の焼土面がみられる。１ヶ所（S－1）は、長さ1.0m、幅0.8m、厚さ0.05m、もう１ヶ所（S－2）は直径0.8m、厚さ0.05mである。遺物は住居内のP181 柱穴から、ほぼ完形品になる甕BⅣが直立した状態で出土した。他にP171柱穴から甕C・抉入石斧未製品、床面から磨製石斧・磨製石鏃が出土した。

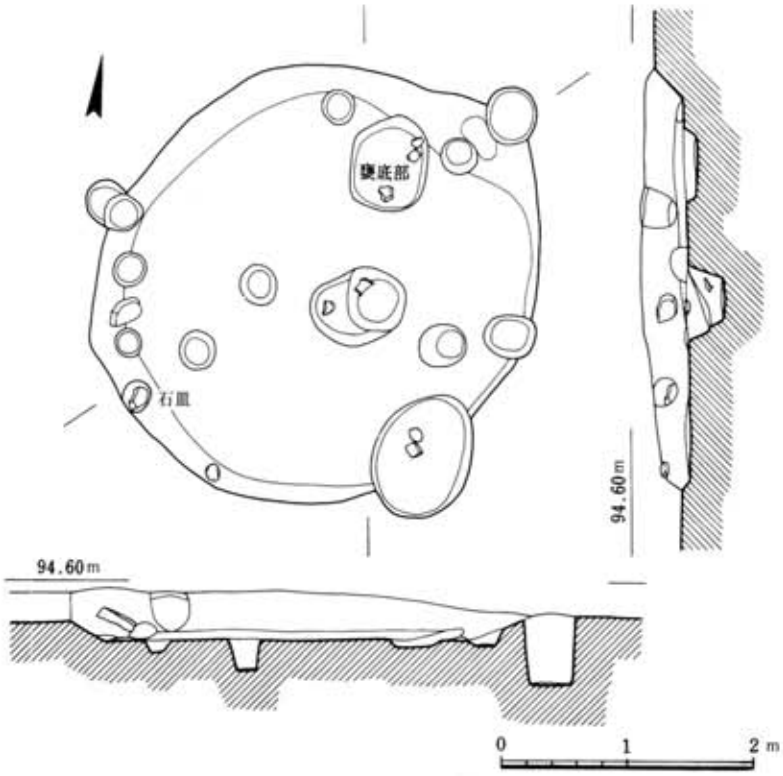


Fig. 7　SB085住居跡実測図

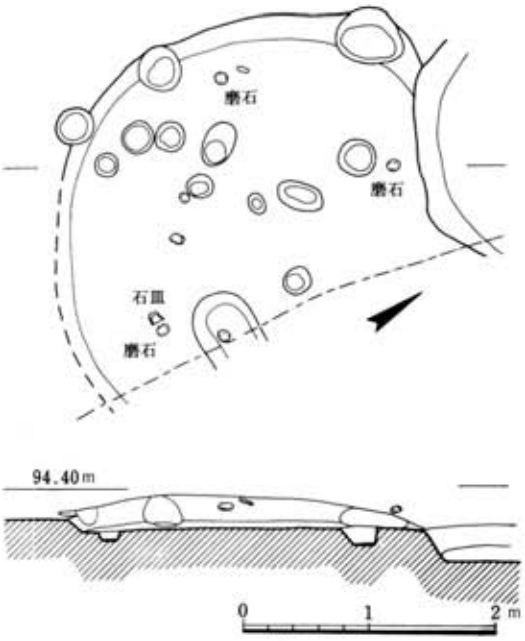


Fig. 8　SB086住居跡実測図

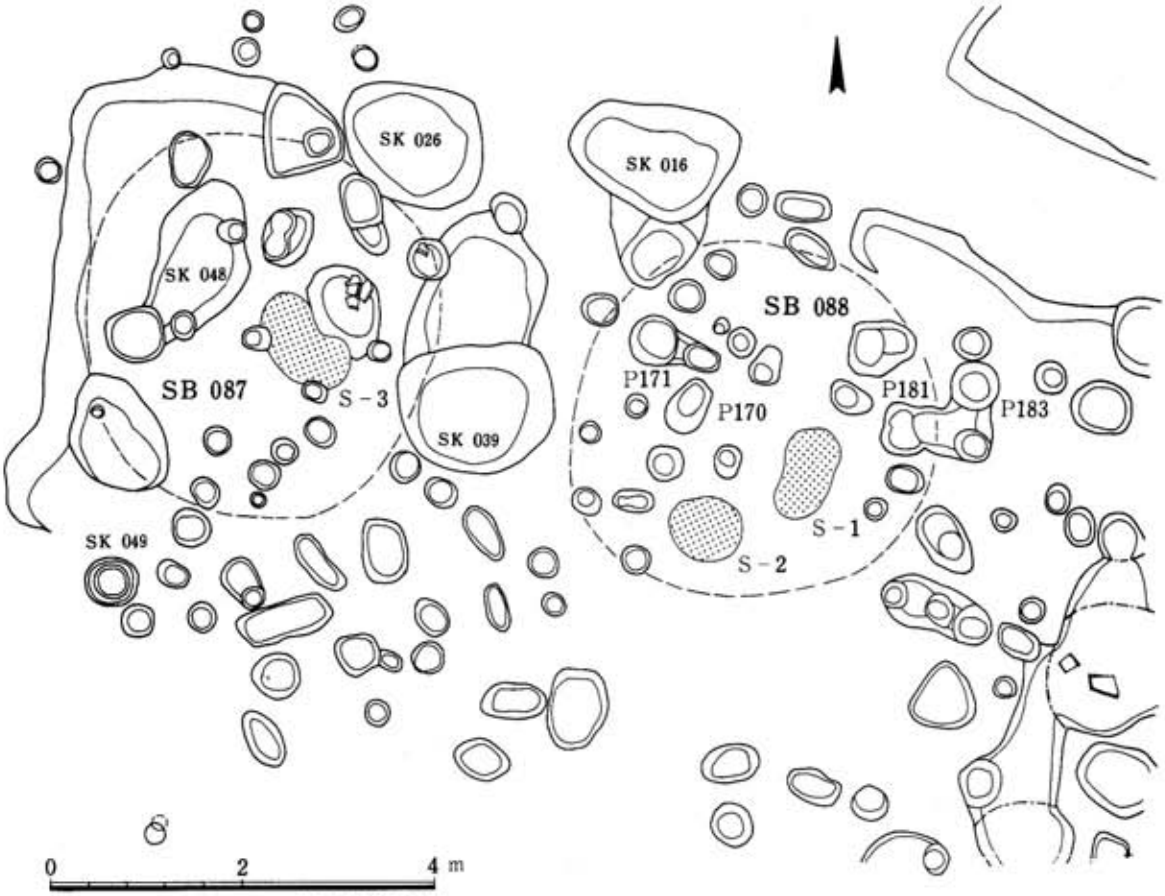


Fig. 9　SB087・088住居跡実測図

Tab 1　押川遺跡住居跡一覧表　（カッコ内は推定値、ゴチックは床面出土）

遺構番号	平面形	長(m)	幅(m)	深(m)	出土遺物 土器	出土遺物 石器	時期	備考
SB 081	楕円形	3.5	3	0.1	壺C、壺底部C	石鏃、掻器、石核	前期末～中期初頭	竪穴式住居跡
SB 082	ほぼ円形	3.6	3.5	0.1～0.2	壺B、甕BII 甕底部B	磨石、叩石、石鏃、掻器、石核、ナイフ形石器	前期	〃
SB 083	不整楕円形	3.6	3.1	0.1～0.2	**甕BI・BII 甕底部B**、壺B	磨石、叩石、石鏃、掻器、石核	前期	〃
SB 084	不整楕円形	4.2	4	0.1～0.2	**甕AIII**、甕BI・BII、甕底部、壺	磨石、石皿、片刃、石斧、石鏃、掻器、石核、ナイフ形石器	晩期末～前期	〃
SB 085	楕円形	3.8	3	0.2	壺A・B、甕BII D・甕底部B	磨石、叩石、石鏃、掻器、石核、ナイフ形石器	前期	〃
SB 086	円形	(3.8)		0.1～0.3	壺C、甕BIB III甕底部C・D	磨石、石皿、石鏃、掻器、石核、サイドブレイド	前期末～中期初頭	〃
SB 087	不明				甕、甕底部D 壺底部C		〃	竪穴式住居跡が床面まで削平されたもの
SB 088	不明				**甕BIII、甕底部B** 甕D、高杯	磨製石鏃、磨製石斧	〃	〃

(2) 貯 蔵 穴

検出した貯蔵穴は、合計74基で、調査区の北東部、中央部、南東部に集中しており、特に南東部のＳＢ082・ＳＢ083・ＳＢ084・ＳＢ085・ＳＢ086住居跡周辺に密集している。みな上部を削平されており、原形をとどめるものはない。平面形は、円形のものと、楕円形のものがある。深さは残存部で0.1ｍ～0.5ｍである。ほとんどの貯蔵穴が埋土に炭の小片、細片を含んでおり、焼土を多量に含むものもみられた。遺物は、床面から出土したものは少なく、多くは埋土からの出土であり、貯蔵穴が廃絶された後、投げこまれたり、埋没する際に流れこんだものである。個々の貯蔵穴は一覧表に記載し、比較的、残存状態の良いものについて記述する。

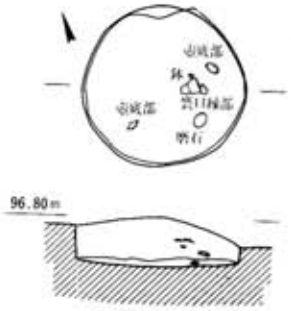


Fig.10 ＳＫ011 貯蔵穴実測図

ＳＫ011貯蔵穴（Fig10　PL４）

調査区中央部の北側に位置する。周囲に他の貯蔵穴はない。平面は円形で、直径1.3ｍ、深さ0.4ｍである。壁の断面は、ほぼ垂直で、一部袋状になっている。床面は、ほぼ水平である。埋土は黒褐色土で炭の小片を多く含んでいる。遺物は埋土下部から、甕ＡⅡ・甕ＡⅢ・壺底部Ａ・鉢Ｂ・磨石が、埋土上部から石鏃・掻器・石核が出土した。

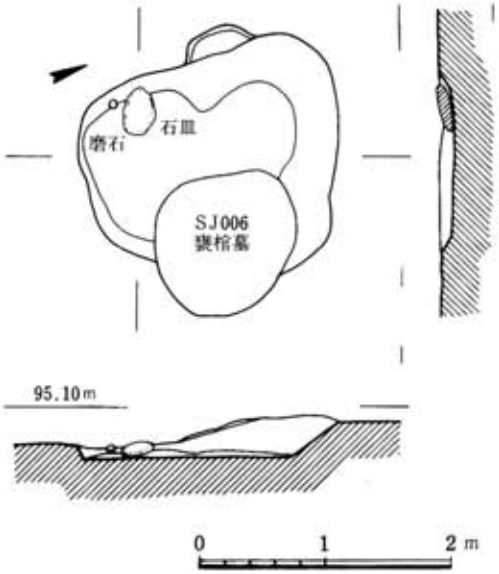


Fig. 11　SK015 貯蔵穴実測図

ＳＫ015貯蔵穴（Fig11　PL４）

調査区北東部に位置する。東側をＳＪ 006甕棺墓が切っている。平面形は隅丸方形に近く、長さ2.1ｍ、幅1.8ｍ、深さ0.2ｍ～0.3ｍである。壁はゆるく傾斜し、床面は、ほぼ水平である。埋土は暗褐色土で、遺物は南西の床面から石皿と磨石が置かれたような状態で出土し、他に埋土から石鏃・石核・土器小片が出土した。この遺構は、他の貯蔵穴に比べて大型であり、壁の立ちあがりから、貯蔵穴ではなく、別の遺構の可能性がある。

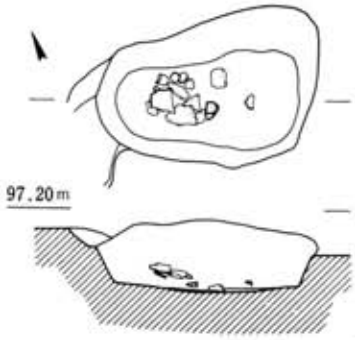


Fig.12　SK016 貯蔵穴実測図

ＳＫ016貯蔵穴（Fig12　PL４）

調査区北東部、ＳＢ088住居跡北側に位置する。平面は不整楕円形で、東側が幅広く、長さ1.7m、幅1.1m、深さ0.35mである。壁は傾斜し、床面は中央がやや低くなっている。埋土は暗褐色で、10cm～20cm程の礫を多く含む。遺物は、床面近くから甕BⅡ・甕D・磨石が、埋土上部から甕Cが出土した。これらの遺物は出土状態から、この貯蔵穴の廃絶後に多数の礫とともに投げこまれたか、流れこんだものと考えられる。

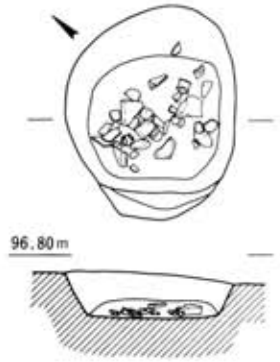


Fig.13　SK017 貯蔵穴実測図

SK017貯蔵穴（Fig13　PL４）

調査区の中央部東側、ＳＢ082住居跡の北側に位置する。平面形が隅丸長方形に近い楕円形で、長さ1.5m、幅1.3m、深さ0.35mである。壁は傾斜し、床面はほぼ水平である。埋土は黒褐色土で、焼土と炭の細片を含んでいた。床面のほぼ全体にわたって、5cm～20cm程の礫が散らばっていた。遺物は床面直上から礫に混じって甕C・甕底部C・甕底部D・甕蓋・石皿・砥石・磨石が、埋土から石錐・掻器が出土した。遺物は出土状態から多数の礫とともに投げこまれたものと考えられる。

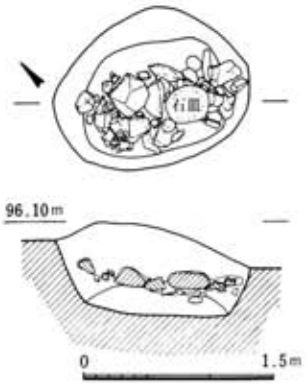


Fig.14　SK026 貯蔵穴実測図

SK026貯蔵穴（Fig14　PL４）

調査区の北東部、ＳＫ016貯蔵穴の西に位置する。平面は楕円形で、長さ1.5m、幅1.2m、深さ0.5m～0.6mである。壁は傾斜し、床面は東側が低くなっている。埋土は暗褐色土で、埋土中部から上部に5cm～30cmの礫を多く含んでいた。遺物は床面から埋土下部には全くなく、埋土中部から上部にかけて、甕B・甕D・甕底部C・抉入片刃石斧・磨製石斧・石皿・磨石・石鏃・石核が出土した。土器は、みな小破片である。遺物は出土状況から、この貯蔵穴がある程度埋没したときに礫とともに投げこまれたか流れこんだものである。

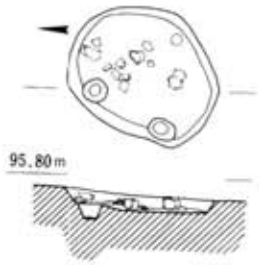


Fig.15　SK033 貯蔵穴実測図

ＳＫ033貯蔵穴（Fig15　PL４）

調査区の中央部に位置する。平面は楕円形で、長さ1.2m、幅１ｍで上部はほとんど削平され、深さ0.1m～0.15mである。壁は傾斜しており、床面はほぼ水平である。貯蔵穴内の西側床面から２ヶ所の柱穴が確認された。この柱穴は、この貯蔵穴より古いか、もしくは同時期のものである。埋土は暗褐色土で遺物は床面から甕B・甕底部B・甕底部C・壺の小破片・磨石が出土した。

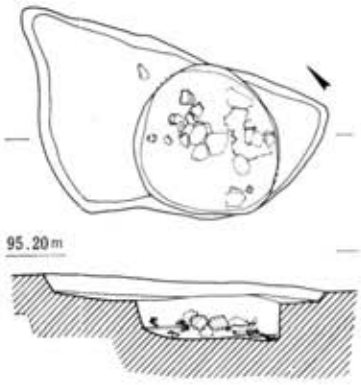


Fig.16　SK035 貯蔵穴実測図

ＳＫ035貯蔵穴（Fig16　PL４）

調査区のほぼ中央部、ＳＫ063貯蔵穴とＳＫ022貯蔵穴の間に位置している。上部を不整形の土壙が切っている。平面は楕円形で、長さ1.3m、幅1.1m、深さ0.4mである。壁は東側がほぼ垂直に立ち上がり、西側は傾斜している。床面は東側が低くなっている。埋土は黒褐色土で炭の小片と礫を含んでいた。遺物は床面から甕BⅣ・甕C・甕D・甕底部C・甕底部D・磨石が、埋土から甕底部A・石鏃・掻器・石核が出土した。遺物は出土状態から、この貯蔵穴の北側から投げこまれたか流れこんだものである。

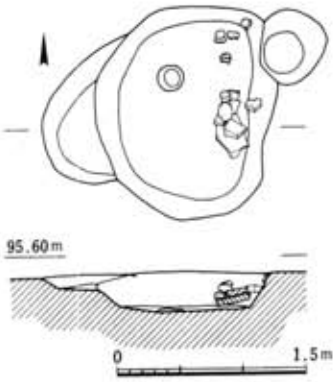


Fig.17　SK041 貯蔵穴実測図

ＳＫ041貯蔵穴（Fig17）

調査区中央部西側、ＳＫ040貯蔵穴とＳＫ042貯蔵穴の中間に位置する。西側にある土壙を切っており、また北東部は柱穴が切っている。平面は、隅丸長方形に近い楕円形で、長さ1.8m、幅1.4m、深さ0.35mである。壁は傾斜しており、床面は中央がやや低くなっている。埋土は暗褐色土で、炭の細片を含んでいた。遺物は、東側の床面近くから埋土下部より、甕B・甕底部D・石皿・磨石が、埋土上部から壺D・片刃石斧・石鏃・掻器が出土した。

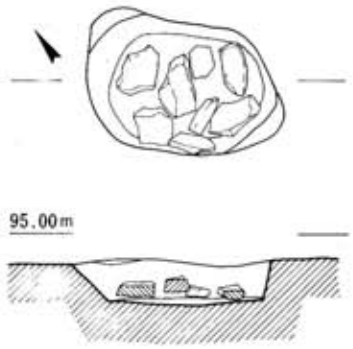


Fig.18　SK045 貯蔵穴実測図

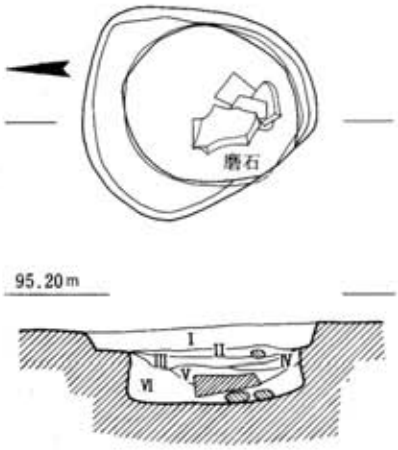


Fig.19　SK064 貯蔵穴実測図

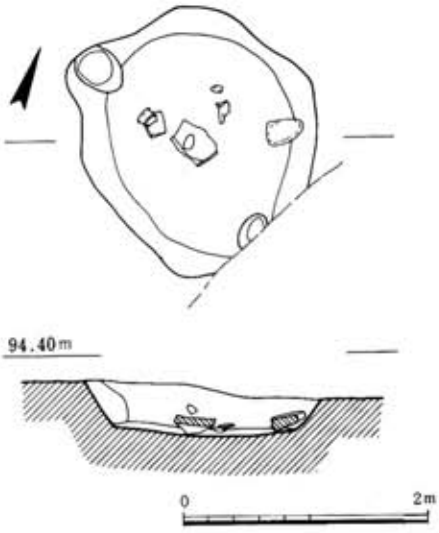


Fig.20　SK068 貯蔵穴実測図

ＳＫ045貯蔵穴（Fig18）

調査区の中央部に位置しＳＫ044貯蔵穴に隣接する。平面は楕円形で、長さ1.5m、幅1m、深さ0.35mである。壁は、東側は、ほぼ垂直に立ち上がるが、西側は傾斜している。埋土は暗褐色土で、下部に30cm～40cm程の礫を多く含んでいた。遺物は少なく、床面直上から甕C・石皿が、埋土から石鏃・石核が出土した。

ＳＫ064貯蔵穴（Fig19）

調査区の南東部西側、ＳＢ083住居跡の西側に位置する。上部は削平されているが、本遺跡で検出した貯蔵穴の中では最も残存状態が良い。平面形は不整楕円形で、二段堀りになっており、上段が、長さ1.85m、幅1.6m、下段が長さ1.4m、幅1.2mで、深さ0.6mである。壁は断面が袋状になっており、床面はほぼ水平である。上段の埋土（第１層）を取り除くと下段の上面の全面にわたって焼土混じりの赤色土がみられた。この下段の埋土は５つの層（第２層～第６層）からなり、第２層は焼土が多量に混じった赤色土で遺物は含まない。第３層は炭の細片が多量に混じった黒褐色土で、甕C・石鏃・掻器が出土した。第４層は暗褐色土で遺物は含まない。第５層は焼土の細片を多量に含む赤褐色土で、レンズ状に堆積していた。土器小破片と、拳大の焼けた礫数個が出土した。第６層は炭の小片が多く混じった灰黒色土で、甕BⅠ・磨石が出土した。

ＳＫ068貯蔵穴（Fig20）

調査区南東部、ＳＢ085住居跡の南側に隣接して位置する。ＳＢ086住居跡の北側を切っている。平面は不整円形で、直径２m、深さ0.5mである。壁は傾斜し、床面は中央がやや低い。埋土は暗褐色土で、遺物は、床面近くから甕B・石皿が、埋土から甕C・甕底部D・石斧・石鏃・掻器が出土した。

Tab 2　押川遺跡貯蔵穴一覧表　（カッコ内は推定値、ゴチックは床面出土）

遺構番号	平面形	長(m)	幅(m)	深(m)	出土遺物（※） 土器	石器	時期	備考
SK011	ほぼ円形	1.4	1.2	0.4	甕A Ⅱ・A Ⅲ、鉢B	磨石、石鏃、掻器 石核	晩期末	
SK012	隅丸方形に近い楕円形	1.4	1.2	0.1	甕底部B		前期	
SK013	円形	1.2	1.1	0.2～0.3	甕B Ⅳ、甕底部B		前期	
SK014	円形	1.0	1.0	0.2	小破片	磨石		
SK015	隅丸方形	2.1	(1.8)	0.5～0.1	※	**磨石、石皿**、石鏃 石核		
SK016	不整楕円形	1.7	1.1	0.5～0.3	**甕D、甕底部C、**	**磨石**、石鏃、石核	中期初頭	
SK017	楕円形	1.5	1.3	0.35	**甕C、甕底部C・D**、甕蓋	**磨石、石皿、砥石** 石錐、掻器	中期初頭	
SK018	楕円形	1.1	0.9	0.25～0.2	蓋B Ⅲ・甕D	掻器	前期～中期初頭	
SK019	円形	1.1	1.1	0.2	小破片	石鏃、掻器、石核		
SK020	円形	1.1	1.1	0.3	甕D、甕底部B・C	石鏃、掻器、石核	前期～中期初頭	
SK021・A	不整楕円形	1.8	1.3	0.3	甕D、甕底部B・C	磨石、磨製石斧	前期～中期初頭	中央を小土壙（SK021・B）が切る
SK022	楕円形	1.7	1.4	0.2	甕B Ⅲ、甕底部B 壺C	砥石、磨製石斧 石鏃	前期～中期初頭	SK044を切る
SK023	楕円形	1.1	0.9	0.25	甕B Ⅲ・D、甕底部C	石鏃、石核	前期～中期初頭	
SK026	楕円形	1.5	1.2	0.5～0.6	甕B Ⅲ・C・D、甕底部C	石皿、抉入片刃石斧、石斧	前期～中期初頭	
SK027	円形	1.1	1.1	0.2	壺C、壺底部C、甕C、甕底部B・C	石鏃、石核	前期～中期初頭	SK036を切る
SK028	楕円形	1.1	0.8	0.25	小破片	石鏃		
SK029	円形	0.9	0.9	0.3	甕D		中期初頭	
SK030	円形	0.9	0.9	0.2	小破片	石核		
SK031	楕円形	0.9	0.9	0.2	※			
SK032	円形	1.3	1.3	0.15	甕B Ⅱ		前期	
SK033	楕円用形	1.2	1.0	0.1～0.2	**壺破片、甕B Ⅱ、甕底部B・C**	磨石	※	
SK034	隅丸方形に近い楕円形	1.7	1.4	0.35	**壺A**	石鏃、掻器、石核	※	
SK035	楕円形	1.3	1.1	0.35	**甕B Ⅵ・C・D 甕底部A・C・D**	**磨石、石皿**、石鏃 掻器、石核	中期初頭	
SK036	不整楕円形	2.4	1.6	0.35～0.3	壺底部C、甕B Ⅱ・C 甕底部D	石鏃、石核	前期～中期初頭	北側に大きな焼土塊が混入

遺構番号	平面形	長(m)	幅(m)	深(m)	出土遺物 土器	出土遺物 石器	時期	備考
SK037	円形	(1.4)	(1.4)	0.1/0.3	甕D、甕底部C	**磨鏃、石皿**、敲石 石鏃、石核	中期初頭	
SK038	円形	1.0	(0.8)	0.1/0.15	壺C、甕BⅣ	石鏃、石核	前期/中期初頭	
SK039	隅丸方形に近い楕円形	1.6	1.4	0.25	甕C	磨石、敲石、石鏃 掻器、石核	中期初頭	
SK040	楕円形	1.3	1.2	0.25	甕AⅠ・AⅢ、甕底部A、鉢B	石鏃、掻器、石核	晩期末	
SK041	楕円形	1.8	1.4	0.35	壺C、甕BⅡ、甕底部D	**磨石、石皿**、片刃石斧石鏃、掻器	前期/中期初頭	
SK042	〃	1.6	1.1	0.3	小破片	石鏃、掻器※石核		※旧石器
SK043	〃				〃	磨石、石皿		
SK044	円形	1.3	1.3	0.35	〃	磨石、石皿、石鏃 鏃、※刃器状剥片		SK022が切る ※旧石器
SK045	楕円形	1.5	1.0	0.35	**甕D**	**石皿**、石鏃、石核	中期初頭	
SK047	不整形	1.0	0.9	0.3	甕D、甕底部B C	磨石	前期/中期初頭	
SK048	不整形	(1.8)	1.0	0.2	甕BⅢ、甕底部B	磨石、敲石、石鏃 掻器		
SK049	楕円形	1.3	0.9	0.1	壺C、甕D	磨石	中期初頭	
SK050	楕円形	1.2	1.0	0.2	**甕AⅠ**	磨石、石鏃	晩期末	
SK051	円形	1.0	1.0		甕AⅠ、甕底部B	※石皿、石錘、石鏃、掻器	晩期末	※5つに割れて出土
SK052	楕円形	1.7	1.3	0.35	壺破片(丹塗り)、**壺底部B**、**甕BⅡ** 甕BⅠ	※石斧破片、石鏃 掻器、石核、石核	前期	大きな焼土塊が床面近くに混入※SK055出土のものと接合
SK053	円形	1.4	1.4	0.3	壺D、甕BⅠ・BⅡ・BⅣ・C、甕底部B	**砥石**、石鏃、掻器 石核	前期/中期初頭	SK054を切る
SK054	楕円形	1.4	(1.8+α)	0.1 0.2/0.2	甕AⅠ、鉢B	**磨石、石皿**、石鏃	晩期末	
SK055	楕円形	1.3	(1.0+α)	0.2	壺B・C、**甕AⅠ** BⅠ、**鉢B**	**石皿**、石斧破片	晩期末	
SK056	円形	1.4	(1.4)	0.2	小破片	磨製石斧、石鏃 石核		
SK057	円形	1.1	1.1	0.2/0.3	甕D、甕底部B C・D	磨石、敲石、砥石 石鏃※刃器状剥片	前期/中期初頭	※旧石器
SK058	不整円形	1.3	1.2	0.2	甕底部小破片	石鏃、掻器、石核 ※ナイフ型石器		※チャート製
SK059	不整楕円形	1.9	1.2	0.1/0.2	甕BⅡ	石鏃、掻器、石核	前期	
SK060	〃	1.4	1.	0.2	甕AⅠ	石皿、石鏃、石核	晩期末	
SK061	楕円形	1.6	1.4	0.2	甕BⅢ、甕底部B・C	磨石、敲石、片刃石斧、磨製石斧、石鏃、掻器、石核	前期/中期初頭	

遺構番号	平面形	長(m)	幅(m)	深(m)	出土遺物		時期	備考
					土器	石器		
SK 062	楕円形	1.8	1.6	0.1 / 0.25	壺B、甕BI、甕底部	磨製石斧、石鏃、掻器、石核	前期	
SK 063	楕円形	1	1.1	0.3	**壺底部C**、甕AⅠ甕底部B	※抉入片刃石斧、石鏃、掻器、石核	前期 / 中期初頭	※未製品
SK 064	楕円形	1.4 / 1.85	1.2 / 1.6	0.4 / 0.6	壺底部C、**甕BⅠ・C・D**	**磨石、石皿**、石鏃掻器	前期	
SK 065	楕円形	1.6	1	0.4	甕D、甕底部D	石皿、石鏃、石核	中期初頭	
SK 066	楕円形	1.3	(1)	0.3	壺C、甕BⅡ、甕底部B	石鏃、石核	前期 / 中期初頭	SB 082を切る
SK 067	〃	1.3	(1.8)	0.25	**壺底部B、甕底部D**	石鏃、掻器、石核	前期 / 中期初頭	
SK 068	円形	2	1.9	0.5	**甕B**、甕C、甕底部D	磨石、石皿、磨製石斧、石鏃、掻器石核	中期初頭	SB 086を切る 炭化種子（ドングリ類）・獣骨出土
SK 069	円形	1.1	1	0.2	小破片	敲石、磨製石斧、石鏃、掻器、石核細石刃	前期 / 中期初頭	
SK 070	不整楕円形	1.5	1	0.3 / 0.2	甕BⅢ・C	**磨石**、石鏃、石核	前期 / 中期初頭	
SK 071	楕円形	2	1.4	0.2	**壺C**、甕BⅡ		前期 / 中期初頭	
SK 072	楕円形	1	0.9	0.15	壺破片	石鏃		
SK 073	〃	1.7	1.5	0.1	甕BⅠ・BⅡ・C・D、甕底部BC・D	石鏃	前期 / 中期初頭	
SK 074	〃	1	1	0.4				
SK 075	(楕円形)	1.7	(0.9+α)	0.35	壺B、甕D、甕底部B	石鏃、掻器、石核	前期 / 中期初頭	
SK 076	〃	1	0.8	0.1	小破片	磨石、**石皿**		SB 085を切る
SK 077	隅丸方形に近い円形	1	0.8	0.31	〃			
SK 078	不整円形	0.9 / 1.2	0.8 / 1.2	0.1	〃			
SK 079	隅丸方形	1.3	1.3	0.4	〃			
SK 091	円形	1.6	1.6	0.1	〃			
SK 092 (P 165)	円形	0.7	0.7	0.5	〃			
SK 093 (P 2)	楕円形	0.9	0.8	0.1	〃			
SK 094 (P 108)	円形	0.95	0.85	0.3	甕底部B			
SK 095 (P 186)	円形	0.8	0.8	0.1	小破片			

(3) 甕 棺 墓

甕棺墓は、調査区の北東端から合計７基が検出された。この部分は、墓域の西端にあたり、墓域は東へ広がるものと予想される。墓壙および棺上部は削平により破壊されている。甕棺に使用された土器は甕が２個体、壺が８個体で、弥生時代前期後葉から中期初頭にかけてのものである。

ＳＪ001甕棺墓（Fig. 21　PL. 5）

調査区の北東端、最も北側に位置する。墓壙および､棺のほとんどを削平により失っている。墓壙は残存部で、長さ0.35ｍ、幅0.3ｍ、深さ0.1ｍである。棺は壺を用いているが底部しか残っていない、東側に傾けて埋置している。

ＳＪ002甕棺墓（Fig. 21　PL. 5）

調査区の北東端に位置し、SJ001甕棺墓の南西に隣接する複式甕棺墓である。墓壙は平面が円形で、残存部は直径0.85ｍ、深さ0.2ｍである。棺は覆口式で上甕に甕､下甕に口縁部を打ち欠いた壺を用いている。削平により上甕は口縁部の一部、下甕は全体の⅓程しか残ってない。下甕は穿孔部を下にして、ほぼ水平に埋置し､その上から甕を東に傾けて覆せ､礫で支えていた。副葬品は棺底より管玉４個が出土した。

ＳＪ003甕棺墓（Fig21　PL５）

調査区の北東端、ＳＪ007甕棺墓西側に位置する。墓壙および棺の大半を削平されていた。墓

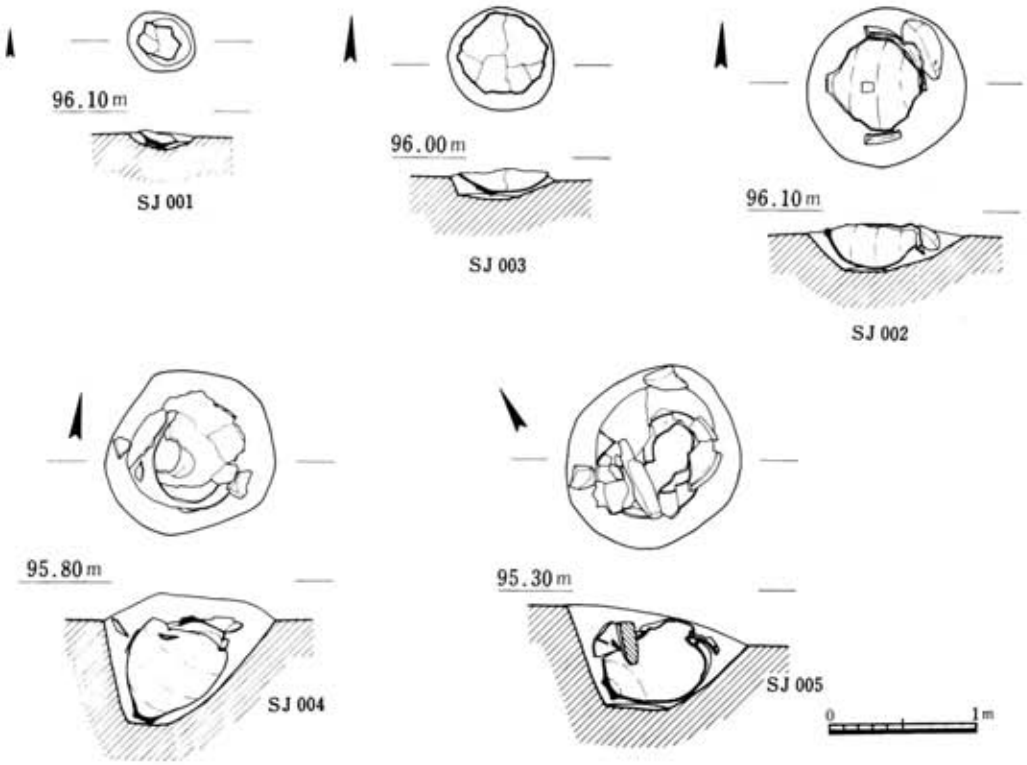


Fig.21　SJ001・002・003・004・005甕棺墓実測図

壙は平面がほぼ円形で、残存部で直径0.55m、深さ0.15mである。棺は壺を用いており、底部と胴部下半のみ残っている。棺は東側に傾けて埋置していた。

ＳＪ004甕棺墓（Fig21　PL６）

調査区北東端、ＳＪ007甕棺墓の西側に位置する複式甕棺墓である。墓壙は平面が円形に近く、直径0.9m、深さ0.6mで、西側を斜め下方に掘り下げている。棺は上甕・下甕ともに口縁部を打ち欠いた壺を用いた覆口式である。下甕はほぼ完存していたが、上甕は削平され、胴部上半と底部付近が残っていた。下甕の胴部下半に穿孔があり、棺は、この穿孔部を下にして東側に傾けていた。棺と墓壙の隙間に10cm～15cm程の礫を入れていた。また下甕の底部と墓壙との間に筵様の織物の圧痕がわずかに認められた。

ＳＪ005甕棺墓（Fig. 21　PL. 6）

調査区北東端、SJ 006甕棺墓の北側に位置する単式甕棺墓で、墓壙の上部は削平されていたが棺は、ほぼ完存していた。墓壙は平面形が、楕円形で、長さ0.95m、幅0.9m、深さ0.55mである。棺は壺を用いており、東側に傾けて埋置していた。棺と墓壙の隙間に10cm～25cm程の礫を入れていた。また棺の肩部に板石が落ちこんでいた。

ＳＪ006甕棺墓（Fig 22　ＰＬ６）

調査区北端に位置し、甕棺では最も南にある。単式甕棺墓で、西側のＳＫ015貯蔵穴を切っている。墓壙の上部は削平されていたが、棺は、ほぼ完存する。墓壙は平面形が楕円形で、長さ1.15m、幅1.05m、深さ0.35mである。壁は傾斜し、西側の傾斜は急であるが、東側はゆるやかである。棺は壺を用いており、口縁を東側にして水平に近い状態で埋置していた。

ＳＪ007甕棺墓（Fig22　PL６）

調査区北東端、SJ 004甕棺墓の東側に位置する複式甕棺墓である。墓壙は平面形が、楕円形で、長さ0.9m、幅0.8m、深さ0.3mである。棺は、上甕に甕、下甕に口縁部を打ち欠き胴部に穿孔した壺を用いた覆口式である。下甕は完存するが、上甕は削平により破壊され、下甕の上部や下甕内から、バラバラの状態で出土した。棺は、穿孔部を下にしてやや東に傾けて埋置し

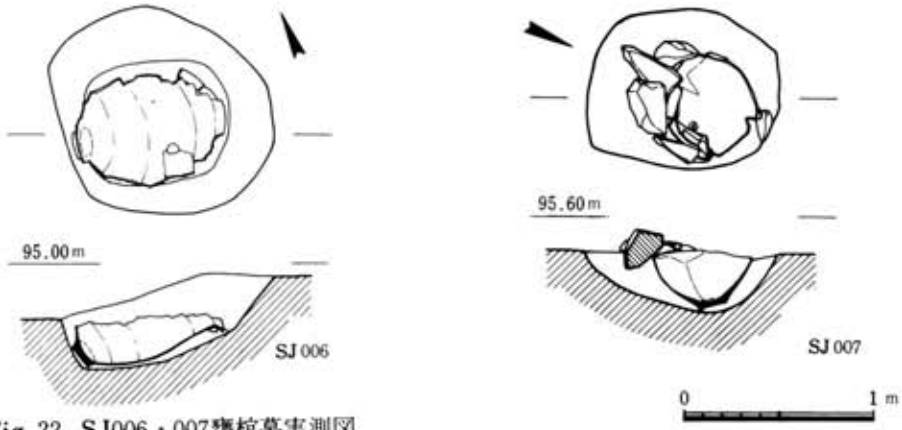


Fig. 22　SJ006・007甕棺墓実測図

ていた。また上甕の上部に20cm～30cmの礫が置かれてあり、この礫で上甕を支えていたと考えられる。副葬品は棺底から管玉３個が出土した。また石鏃が１点棺底近くから出土したが、副葬品ではなく流れこんだものである。

Tab 3　押川遺跡出土甕棺墓一覧表

遺構番号	甕棺型式	器形 上下	墓壙(m) 長	幅	深	方位	傾斜	時期	備考
ＳＪ 001		壺	0.35	0.3	0.07	?	19°	中期初頭	削平をうけ底部のみ残存。
ＳＪ 002	複式棺・覆口式	甕 壺	0.85	0.85	0. 2	Ｎ－Ｅ86°	－5°	前期末	上甕口縁の一部分、下甕、底部～頸部の約½残存。
ＳＪ 003		壺	0.55	0.55	0.15	Ｓ－Ｅ78°	23°	中期初頭	底部～胴部下半残存。
ＳＪ 004	複式棺・覆口式	壺 壺	0.9	0.85	0.6	Ｎ－Ｅ84°	29°	〃	上甕、下甕とも口縁部打欠き。
ＳＪ 005	単棺	壺				Ｓ－Ｅ55°	56°	前期末	棺と墓壙の隙間に礫を入れている。
ＳＪ 006	単棺	〃	1.15	1.05	0.35	Ｓ－Ｅ79°	52°	前期後葉	ＳＫ015を切る。
ＳＪ 007	複式棺・覆口式	甕 壺	0.9	0.85	0.3	Ｎ－Ｅ63°	11°	中期初頭	下甕口縁部打欠き、上甕はバラバラで出土。

４．遺　物

(1)土　器

土器は、住居跡・貯蔵穴・表土層から出土したものと、埋葬に用いられたものがある。後者については次の項で述べる。住居跡・貯蔵穴出土の土器は、多くは埋土から出土したもので、しかも小破片が多い。器形は甕・壺・鉢・高杯がある。これらを甕Ａ・甕Ｂ・甕Ｃ・甕Ｄ・甕Ｅ・甕底部、壺Ａ・壺Ｂ・壺Ｃ・壺底部、鉢Ａ・鉢Ｂ、高杯の器種に分類して、各器種ごとにまとめて述べる。なお個々の土器については一覧表に記載した。

甕Ａ（Fig 23　PL9 ）

肩部が「く」の字状に屈曲する甕で、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲに細分できる。甕ＡⅠは口縁部と肩部の外面に突帯を貼りつけ、これに刻目を施すもので、肩部の屈曲が強い。甕ＡⅡは口縁部がゆるく外反し、口縁端部に刻目を施すもので、他の特徴は甕ＡⅠと同じである。甕ＡⅢは口縁部がほぼ直立するか、わずかに外反し、口縁端部外面に刻目を施す。肩部は細い突帯を貼りつけ刻目を施すが、肩部の屈曲はゆるい。底部は円盤貼付状で裾の広がる甕底部Ｂになる。器面調整は、甕ＡⅠ・ＡⅡが貝殻条痕調整で、その後、ナデ調整しているものもみられる。甕ＡⅢは丁寧なナデ調整が行なわれている。⑤は甕ＡⅢに分類したが底部が平底で口縁端部外面を肥厚させ、

刻目を施こしており、特異な形をしている。調整も横方向の粗いハケ目状で、他と異なる。

甕B（Fig. 24・26　PL. 8・9）

口縁部がゆるく外反するものでⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳに細分できる。甕BⅠは口縁端部全面に刻目を施すもので、肩が張らない。㊵は口縁部下に段がつき、この部分にも刻目を施している。甕BⅡは口縁端部下半に刻目が施されるもので、口縁部の外反は甕BⅠより強い。口縁部下に一条ないし数条の沈線をめぐらすものもみられる。㊾は大型の甕で口縁端部が肥厚し二列の刻目が施されている。甕BⅢは口縁部に刻目が施されないもので、口縁端部がわずかに肥厚する。肩がやや張り、口縁部下に沈線をめぐらすものや断面三角形の突帯をめぐらすものもみられる。また㊼は口縁部内側に粘土を貼りつけて肥厚させている。甕BⅣは口縁部がほぼ直角に外反するものである。

底部は甕底部Bになるが、㊶のように厚手で裾が開く上げ底の底部（甕底部C）をもつ。のもある。器面調整は、口縁部付近がヨコナデ、外面がハケ目で、ハケ目調整後ナデ消したものもみられる。

甕C（Fig 28　PL 9）

逆L字状に近い口縁部をもち、口縁部下に一条の断面三角形の突帯をめぐらす。口縁部と突帯には刻目を施すものが多い。口縁部上面はほぼ水平だが、㊺のようにわずかに凹むものもみられる。肩がやや張る。底部は甕底部Cや甕底部Dになる。器面調整は、口縁部および突帯付近がヨコナデ、胴部はハケ目である。

甕D（Fig 28　PL 8・9）

断面三角形に近い口縁部をもつもので、外反する口縁部の内側に粘土帯を貼りつけたものや、口縁部外側に粘土帯を貼りつけたものがある。口縁部上面はほぼ水平で肩が張る。口縁部の下に一条の沈線をめぐらすものや、断面三角形の突帯を貼りつけたものがみられる。底部は甕底部Cや甕底部Dの厚い上げ底になる。器面調整は外面がハケ目で、内面はナデである。

甕E（Fig 28　PL 9）

大型の甕で、数点出土した。口縁部は逆L字状で、粘土を貼りつけ肥厚させている。口縁端部に2列の刻目が施されている。甕棺の破片の可能性がある。

甕底部（Fig. 29　PL.8）

甕底部は形態により甕底部A・甕底部B・甕底部C・甕底部Dに分類できる。甕底部Aは円盤貼付状の底部で裾が広がる。器面調整はナデである。甕Aの底部になる。

甕底部Bは平底か、ゆるい上げ底で、底部からそのまま開き胴部へ立ち上がる。器面はハケ目調整が行なわれ、内面には指頭圧痕が残る。甕Bの底部になる。甕底部Cは厚い上げ底で、裾がやや開き角ばる。底部からくびれて胴部へ立ち上がる。器面はハケ目調整が行なわれ内面は指頭圧痕が残っている。甕C・甕Dの底部になる。甕底部Dは厚い上げ底で、裾が強く開き角は丸い。底部からくびれて胴部へ立ち上がる。器面はハケ目調整が行なわれ内面は指頭圧痕

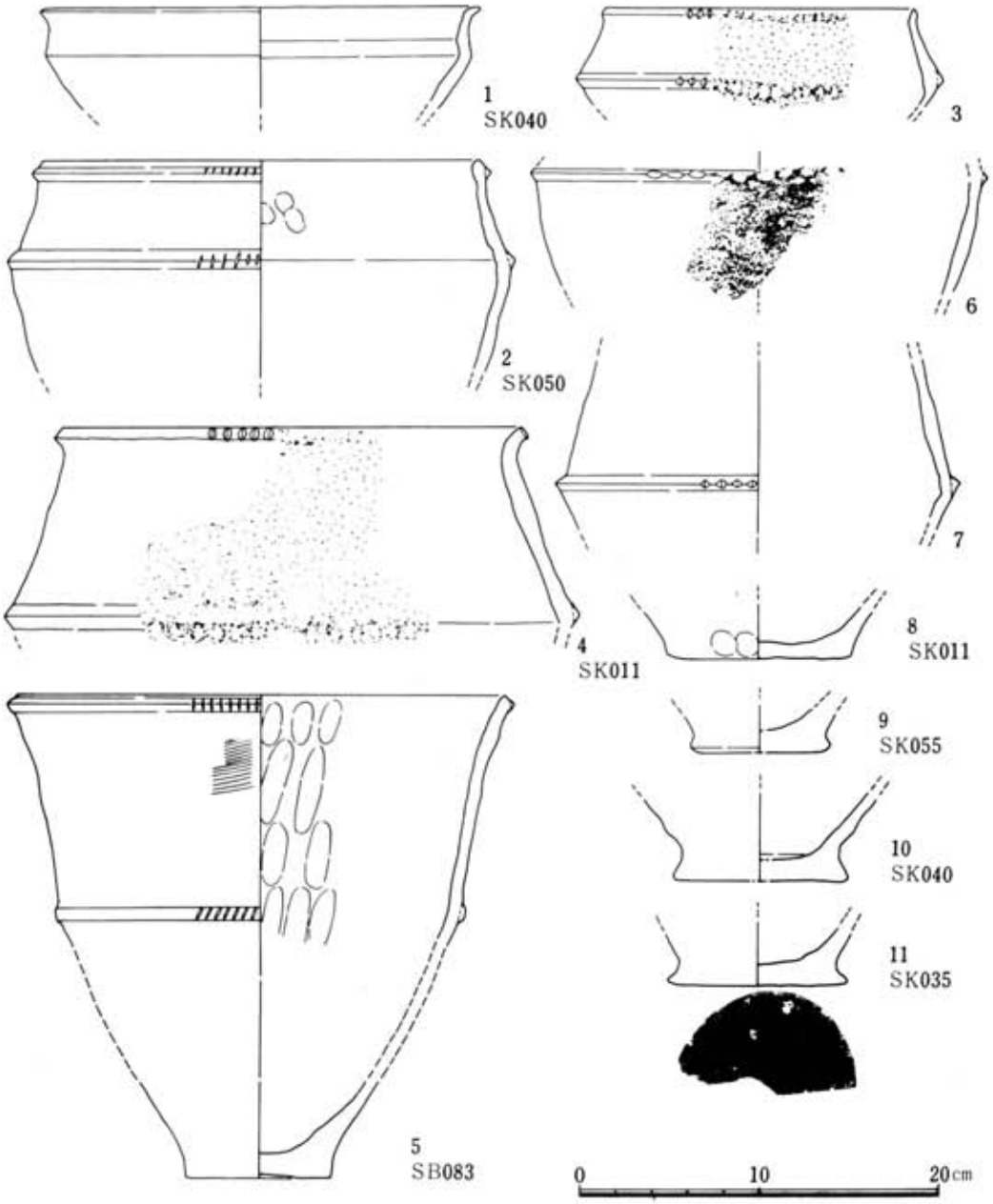


Fig. 23　押川遺跡出土土器実測図(1)

が残っている。甕C・甕Dの底部になる。

壺A（Fig 25　PL8・9）

口縁部が端部近くで強く外反し、口縁端部が外側に肥厚するもので、頸部から肩部にかけて、ゆるく傾斜し肩が張る。㊼は頸部と肩部との境に二条の沈線をめぐらし、その下に沈線で複線山形文を施している。底部は壺底部Aになると思われる。器面は外面を研磨している。

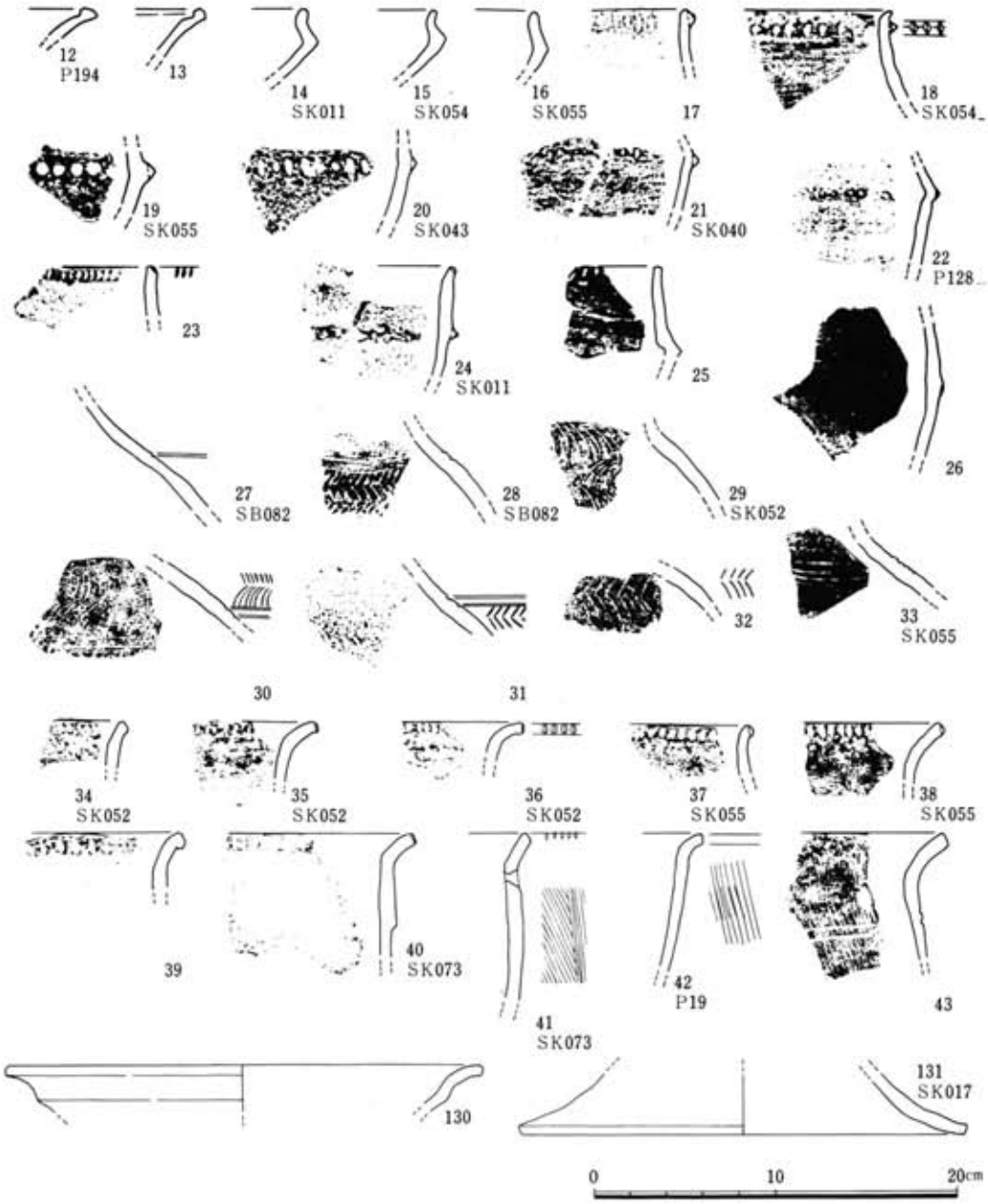


Fig. 24　押川遺跡出土土器実測図(2)

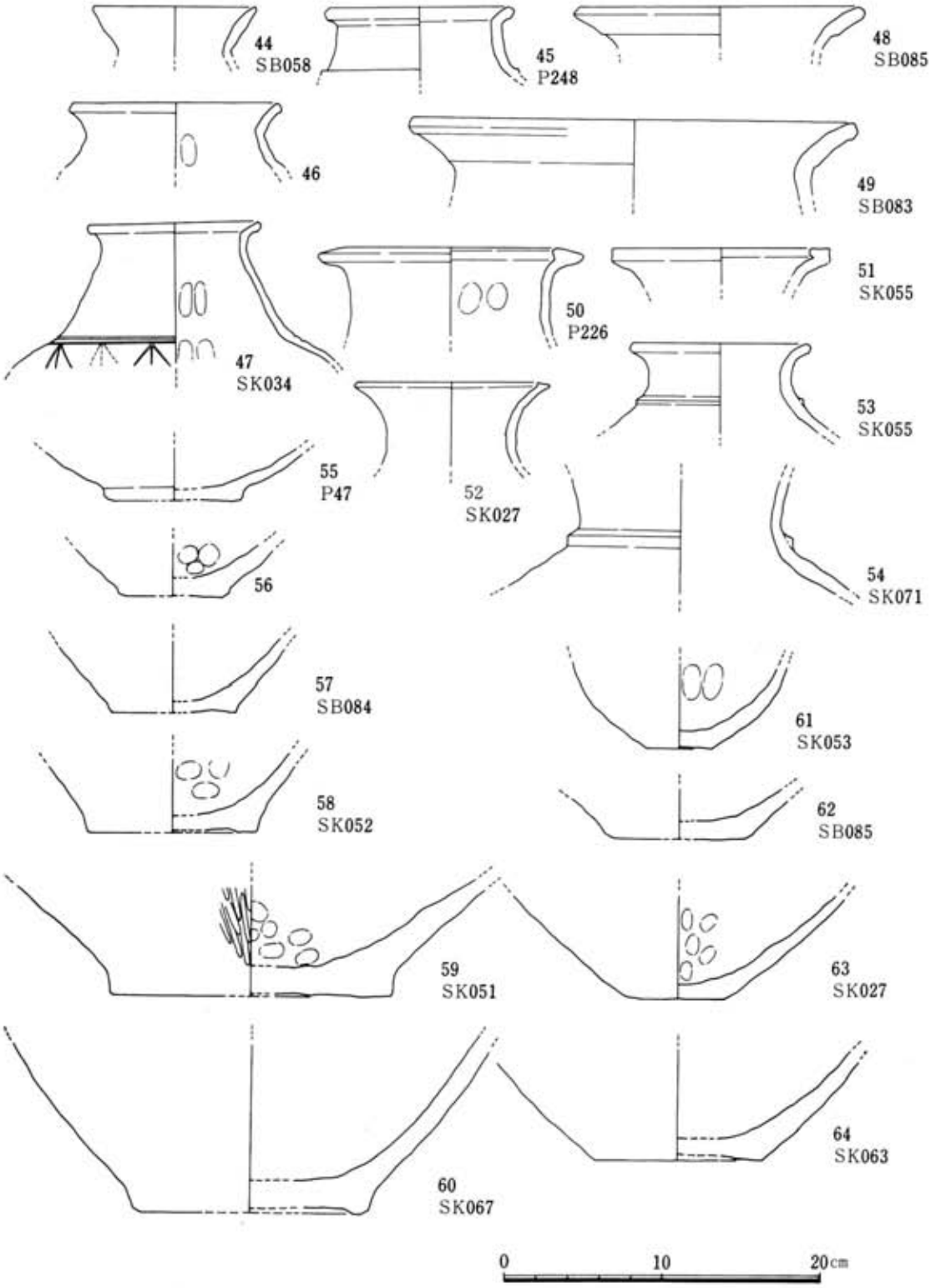


Fig. 25 押川遺跡出土土器実測図(3)

壺B（Fig 25　PL 9）

口縁部がゆるく外反し、口縁部外側が肥厚するもので壺ＢＩ・壺ＢⅡに細分できる。壺ＢＩ(㊹)は小型の壺で、口縁部と頸部の境が屈曲し、口縁端部がやや尖る。壺ＢⅡは外反する口縁部の外側に粘土を薄く貼り、肥厚させており、口縁部と頸部の境には明瞭な段がつく。口縁端部は丸味をおびている。㊾は口縁端部下端に刻目がみられる。肩部に、ヘラや貝殻腹縁による羽状文が施されている。底部は壺底部Ｂになる。

壺C（Fig 25　PL 9）

口縁部が強く外反し、胴部は球形に近く、最大径がほぼ中位にある。頸部と肩部の境には、断面三角形の貼付突帯をめぐらしている。口縁部の形態により２つに分類できる。壺ＣＩは口縁部を肥厚させないもので口縁端部は丸く仕上げている。壺ＣⅡは口縁部内側に粘土を貼りつけ肥厚させたものである。器面はヘラ磨きやナデ調整が行なわれている。底部は壺底部Ｃになる。

壺底部（Fig 25　PL 9）

壺底部は、Ａ・Ｂ・Ｃに分類できる。壺底部Ａは平底で、底部と胴部下半との境が明瞭につくもので形態によりＡＩとＡⅡに細分できる。ＡＩは厚い平底で底面のつくりが雑なもの(⑧、㊿)、ＡⅡはやや上げ底で薄手のもの(㊺、㊻)で、後者は裾が丸味をおびている。器面は縦方向のヘラ磨きやナデ調整が行なわれている。壺底部Ｂは、わずかに上げ底で、底部と胴部下半との境がわずかにつくものである。壺底部ＡⅡ、壺底部Ｂは、壺Ａ、壺Ｂの底部である。壺底部Ｃは薄手で、平底か、ゆるい上げ底で、底部と胴部下半との境がはっきりしないものである。器面はヘラ磨きやナデ調整が行なわれている。壺Ｃの底部である。

高杯（Fig 24）

高杯は合計４点で、みな小破片である。⑬は杯部で杯体部の途中で屈曲して、口縁部が強く外反する。⑱は杯部で内側を肥厚させている。図示してないが、他に脚部の破片がみられる。

蓋（Fig 24）

１点出土した。甕の蓋で裾が強く外反し、端部がやや角ばる。

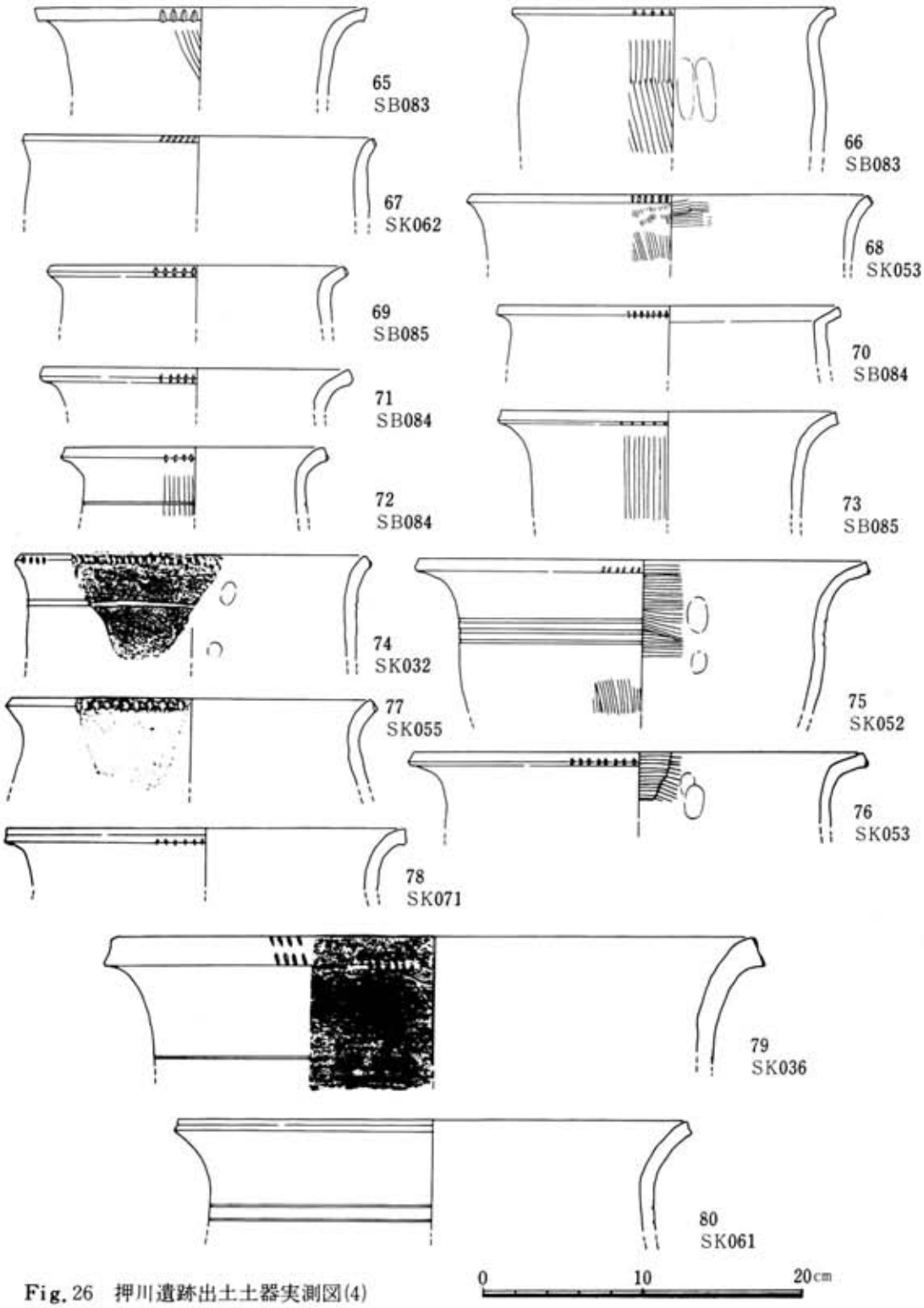


Fig. 26　押川遺跡出土土器実測図(4)

(2) 埋葬に用いられた土器（Fig 30・31　PL 7）

検出した7基の甕棺墓の棺に用いられた土器は10個体分あり、そのうち甕が2個体で、他は壺である。

甕はＳＪ002甕棺墓上甕とＳＪ007甕棺墓下甕である。前者は、壺の発達したもので口縁部の内側に粘土を貼りつけ肥厚させ、外面に2列の刻目を施す。口縁下に3条の沈線をめぐらしている。器面は研磨されている。後者は先述の甕Ｃにあたり、口縁部に小さな刻目を施し、胴が張る。口縁部下に2条の沈線をめぐらしている。器面はナデ調整が行なわれている。

壺は、ＳＪ001・ＳＪ002下甕・ＳＪ003・ＳＪ004・ＳＪ005・ＳＪ006・ＳＪ007下甕である。ＳＪ001は残存状態が悪く器形は明らかでない。ＳＪ002下甕は肩が張り、頸部と肩部の境に1条の断面三角形の貼付突帯をめぐらしている。胴部に焼成後、外から内に向っての穿孔がみられる。ＳＪ003は底部が、やや上げ底である。ＳＪ004は上・下甕とも口縁部を打ち欠いている。下甕は胴が長く底部は上げ底である。底部近くに焼成後、内側から外側に向かっての穿孔がみられる。外面に細かいハケ目調整がみられ、内面は下半部がナデあげ、上部はナデ調整が行なわれている。ＳＪ005は完形品で、口縁部が外反し、口縁部外側と内側に薄い粘土を貼りつけ肥厚させている。頸部から肩部にかけて、ゆるくくびれ、その境に小さな断面三角形の貼付突帯をめぐらし、これに小さな刻目を施している。胴部がやや張り、底部は厚手の上げ底で、胴部との境が明瞭につく。器面は口縁部付近がヨコナデ、外面へラミガキで内面はナデ調整が行なわれている。頸部内面と外面の口縁下に、わずかにハケ目が残っている。ＳＪ006は完形品で、外反する口縁部の外側に薄い粘土を貼りつけ肥厚させている。頸部は広く、この壺は棺用に作られたものである。胴部は長く、底部は平底である。全体に薄手で、器面は外面を、入念にへラミガキしており、内面はナデ調整が行なわれている。底部外面近くと、頸部内面に細いハケ目が残っている。ＳＪ007下甕は、口縁部を打ち欠いている。頸部と肩部の境に小さな断面三角形の貼付突帯を2条めぐらせ、これに細かい刻目を施している。肩部は張らず、底部は平底で、胴部との境は、はっきりしない。器面はナデ調整である。胴下半部に焼成後、外側から内側に向っての穿孔がみられる。

(3) 管玉・土製品（Fig 32）

管玉は合計7個出土した。①～②がＳＪ002、③～⑤がＳＪ007甕棺墓からである。長さ0.75cm～0.9cm、直径0.3cmと、みな小型である。色調は淡青色で、風化がはげしい。⑥は有孔の土製品で、ほぼ中央に孔がある。ＳＢ088住居跡近くから出土した。直径1.9 cm、厚さ0.7cm、色調は暗褐色である。⑦は土器片を利用した有孔円盤で表土層出土である。復元径5.4cm、厚さ0.5cmで外面に2条の沈線がみられる。

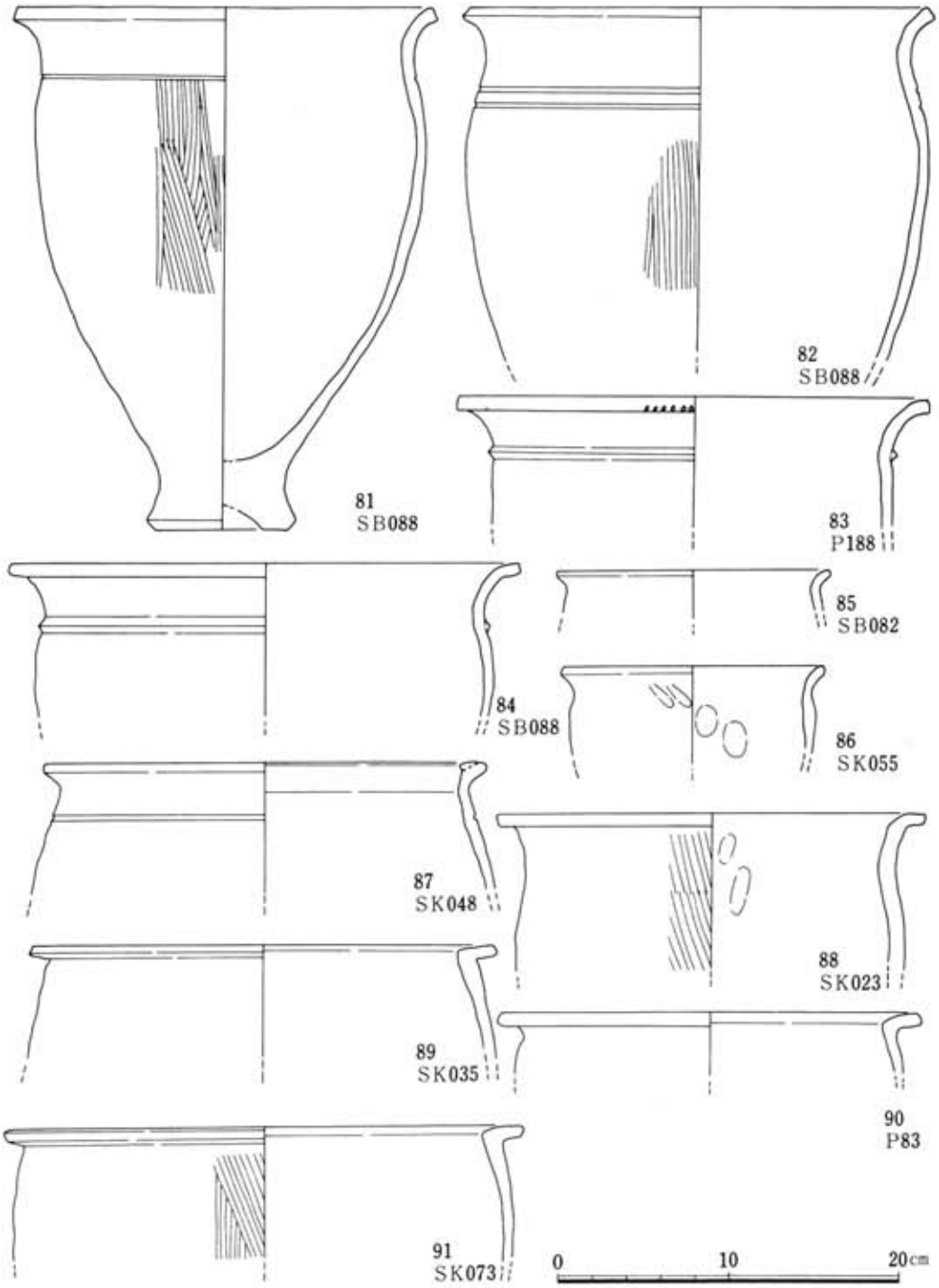


Fig. 27　押川遺跡出土土器実測図(5)

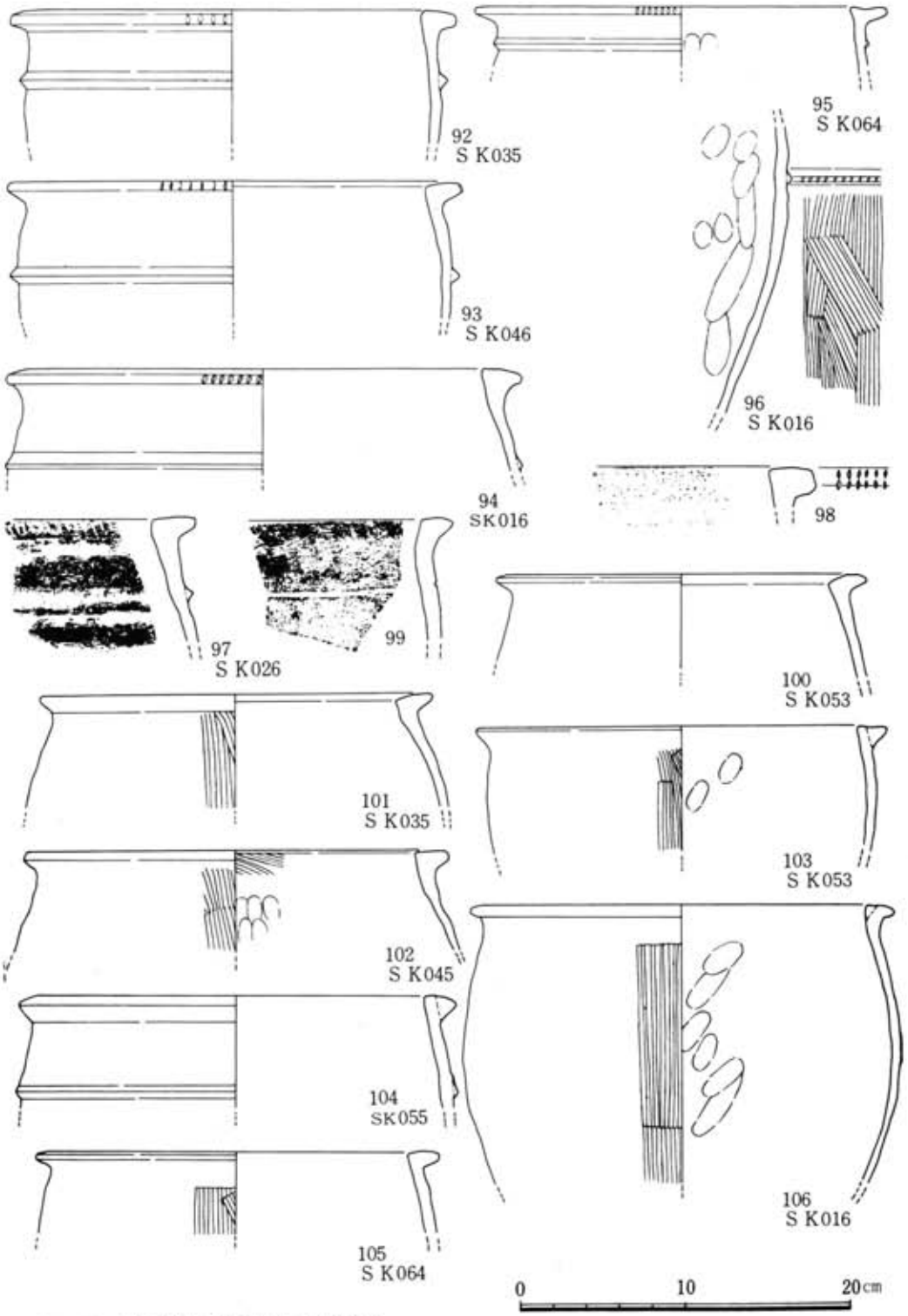


Fig. 28　押川遺跡出土土器実測図(6)

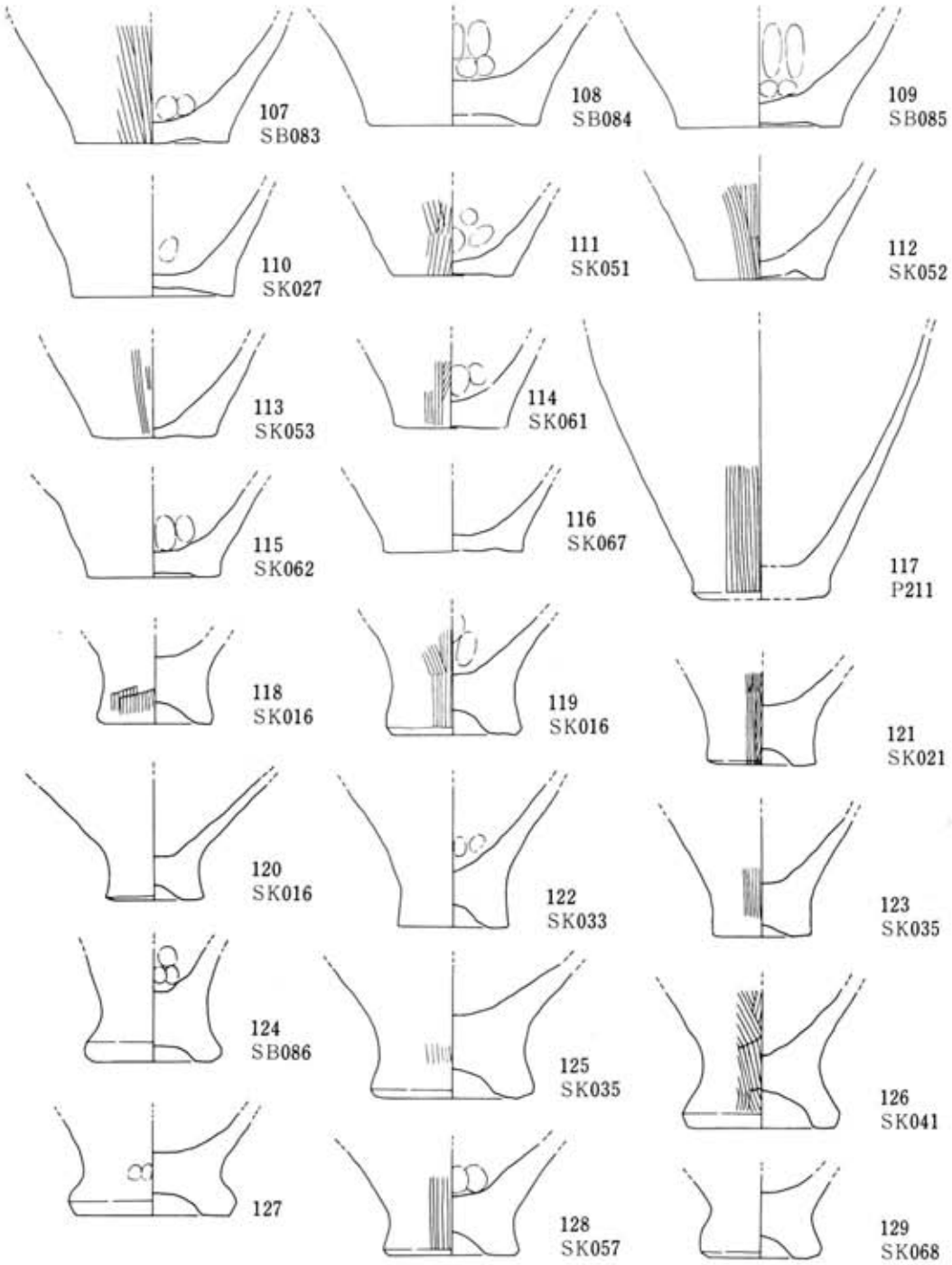


Fig. 29　押川遺跡出土土器実測図(7)

0　10　20cm

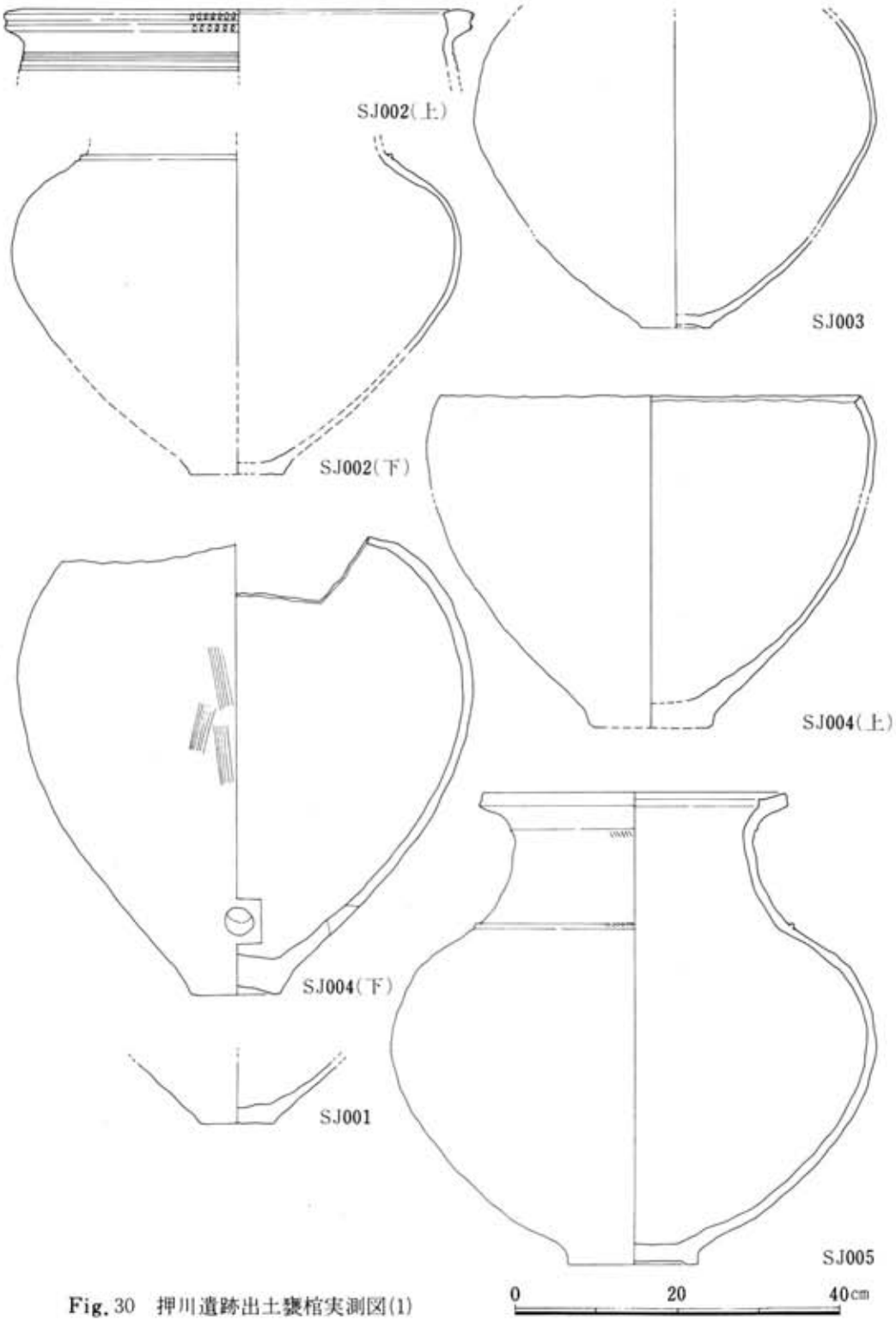


Fig. 30　押川遺跡出土甕棺実測図(1)

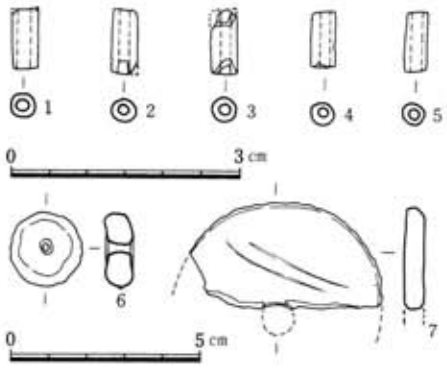
SJ006

SJ007(上)

SJ007(下)

0 10 20cm

Fig. 31　押川遺跡出土甕棺実測図(2)



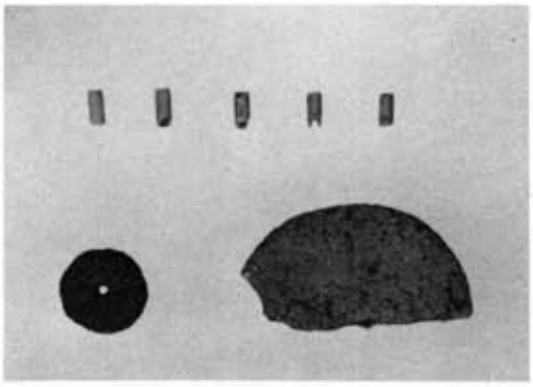


Fig. 32　押川遺跡出土管玉・土製品実測図写真

Tab 4　押川遺跡出土土器一覧表　　註）法量の単位はcm　①口　径　②器　高　③胴部最大径　④底部径

番号	図版番号	器　種	出土地	色　調	法　量	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴
1	PL・9①	鉢B	SK040	暗黄褐色	①24.4	口縁がゆるく外反、肩部が屈曲	外面ナデ、内面横方向のヘラ磨き
2	〃	甕A 1	SK050	黒　色	①24.3	肩部が屈曲し、口縁部と肩部に刻目突帯をもつ	内・外面ナデ、突帯部ヨコナデ
3	〃	甕A Ⅱ	表土層	暗 褐 色	①17.6	肩部が屈曲し、口縁ゆるく外反、口縁と肩部に刻目を施す	外面ナデ、内面ナデ、口縁部、突帯部ナデ
4	〃	〃	SK011	暗黄褐色	①25.3	〃 〃	内・外面ヨコナデ、内面に指頭圧痕が残る
5	PL・8②	甕A Ⅲ	SP084	褐色～黒褐色	②　26 ①　28 ④　8	口縁部肥厚し、肩部がわずかに屈曲し突帯をめぐらす口縁部と肩部に刻目を施こす	口縁部突帯ヨコナデ、外面ハケ目後ナデ、内面指頭圧調整後ナデ
6		甕A	表土層	暗褐色～黒褐色	③25.2	肩部に刻目突帯をもつ	内外面ナデ
7		〃	表土層	暗 褐 色	③22.3	〃	内面ナデ
8	PL・9②	壺・底部A	SK011	赤 褐 色	④10.2	平底、粗雑なつくりである	外面ヘラ磨き、後丹ぬり指頭圧痕が残る
9	〃	甕・底部A	SK055		④ 7.6	円盤貼付状の底部	外面ナデ、内面指頭圧調整後ナデ
10	〃		SK040	赤 褐 色	④ 9.7	〃	内外面ナデ
11	〃	〃	SK035	褐　色	④10.2	〃	外面ハケ目のあとナデ、内面ナデ
12		鉢A	P194	暗褐色～黒褐色		口縁部が強く外反し端部が肥厚する	口縁部ヨコナデ
13	PL・9①	〃	表土層	褐　色		〃	外面ヘラ磨き、内面ナデ
14		鉢B	SK011	黄 褐 色		肩部が屈曲し、口縁部はゆるく外反する	内・外面ヨコナデ
15	PL・9①	〃	SK054	暗 黄 色			外面にナデ、下部内面条痕後ナデ
16		〃	SK054	〃		〃	外面横方向の条痕調整、突帯ヨコナデ
17	〃	甕A Ⅰ	表土層	暗 褐 色		口縁部外面に刻目突帯をもつ	内外面ナデ
18	〃	〃	SK054	黒 褐 色		〃	外面横方向の条痕調整、突帯ヨコナデ、内面丹塗り
19	〃	〃	SK055	黒　色		肩部に刻目突帯をもつ	内外面ナデ、突帯横ナデ
20	〃	〃	SK043	暗黄褐色		〃	内外面ナデ、突帯横ナデ
21		〃	SK040	黄 褐 色		〃	内外面ナデ
22		〃	P128	黒 褐 色		〃	外面横方向のハケ目調整後ヨコナデ
23		甕A Ⅲ	表土層	暗 褐 色		口縁部がわずかに反外し刻目を施す肩部に刻目突帯をもつ	外面横方向の条痕後ナデ内面ナデ
24	PL・9①	甕A Ⅲ	SK011	黒 褐 色		口縁部がわずかに外反し刻目を施す肩部に刻目突帯をもつ	外面横方向の条痕後ナデ 内面ナデ
25		〃	SK040	暗黄褐色		肩部がわずかに屈曲し刻目を施す	内外面ナデ
26	PL・9①	〃	表土層	褐　色		〃	内外面ナデ
27		壺B	SB081	淡 褐 色		肩部に1条の沈線をめぐらす	磨めっしており調整不明
28	PL・9③	壺B Ⅱ	SB082	黄 褐 色		肩部に2条の沈線とヘラによる羽状文をめぐらす	外面ヘラ磨き、内面指頭圧調整後ナデ
29	〃	〃	SK052	褐　色		肩部に貝殻腹縁による羽状文をめぐらす	外面ヘラ磨き、内面ナデ
30		〃	表土層	黄 褐 色		〃	外面ヘラ磨き
31		〃	表土層	赤 褐 色		肩部に2条の沈線とヘラによる羽状文をめぐらす	外面ヘラ磨き
32		〃	表土層	黄 褐 色		肩部に貝殻腹縁による羽状文めぐらす	外面ヘラ磨き、内面ナデ
33		〃	SK055	褐　色		肩部に5条の沈線をめぐらす	外面、横方向のヘラ磨き内面ナデ
34		甕B Ⅰ	SK052	暗黄褐色		口縁端部外側に刻目を施す	内外面ナデ
35		甕B Ⅰ	SK052	黒 褐 色		口縁がゆるく外反、口縁端部全面に刻目を施す	外面ハケ目、内面横方向のハケ目
36		〃	SK052	褐　色		〃	内・外面ナデ
37	PL・9⑤	〃　〃	SK055	暗 褐 色		〃	内・外面ナデ
38	〃	〃	SL055	暗黄褐色		〃	内・外面ナデ、内面に指頭圧痕が残る

番号	図版番号	器種	出土地	色調	法量	形態の特徴	手法の特調
39	PL・8⑤	甕BⅠ	暗褐色	表土層		口縁部外面が肥厚し刻目を施す	口縁部ヨコナデ、外面ハケ目、内面ナデ
40	〃	〃	暗褐色	SK073		口縁部がゆるく外反、口縁端部全面に刻目を施す。口縁下に段がつき刻目を施す	口縁部ヨコナデ
41		甕BⅡ	〃	〃		口縁部がゆるく外反、口縁端部下半に刻目を施す	口縁部ヨコナデ、外面ハケ目
42		〃	P19	褐色		口縁部がゆるく外反	口縁部ヨコナデ、外面ハケ目、内面ナデ
43		〃	表土層	暗褐色		口縁部がゆるく外反、口縁部下に2条の沈線をめぐらす	外面ハケ目
44	PL・9	壺BⅠ	SB085	黄褐色	①10.4	口縁部が外側に開き、口縁部と頸部の境がはっきりつく	内外面研磨している 内面丹塗り
45	〃	壺A	P248	黒褐色	① 12	口縁部が外反し、端部が肥厚する	口縁部ヨコナデ、内面ナデ
46	〃	〃	表土層	褐色	①13.6	〃	調整不明
47	PL・8①	〃	SB043	黒褐色	① 11	口縁部が外反、肩部に2条の沈線と複合線山形をめぐらす	外面なでている。 内面ナデ、内面に指頭圧痕が残る。
48		壺BⅡ	SB085	黄褐色	①18.6	口縁部外側が肥厚し段がつく	口縁部ヨコナデ
49	PL・9③	〃	SB083	赤褐色	①28.2	口縁部外側が肥口縁端部下半に刻目を施す	口縁部ヨコナデ
50	〃	壺CⅠ	P226	暗赤褐色	①16.8	口縁部内側が肥厚する	口縁部ヨコナデ、外面研磨
51		〃	SK055	淡褐色	① 14	〃	口縁部ヨコナデ、内外面ナデ
52		〃	SK027	黄褐色	①12.4	〃	まめつのため調整不明、丹ぬりの痕跡がある
53	PL・9③	壺CⅡ	SK055	明黄褐色	①11.6	口縁部が外反、頸部に断面の三角形の突帯をめぐらす	口縁部ヨコナデ
54	PL・9④	壺C	SK017	黄褐色		頸部に断面三角形の突帯をめぐらす	外面頸部ヨコナデ、外面丹塗り
55	〃	壺・底部A	P47	赤褐色～黒色	④ 7	底部は円盤貼付状で胴部下半との境が明瞭、わずかに上げ底	
56		〃	PB084	灰黄色～褐色	④ 7.8	底部は厚くわずかに上げ底	外面研磨、内面指頭圧調整後ナデ
57	PL・9④	壺・底部B	SB081	淡褐色	④ 7.8	〃	外面研磨、底部ヨコナデ、内面底面ナデ
58		〃	SK052	褐色	④10.6	〃	外面ハケ目後ナデ、内面・底面ナデ
59		壺・底部A	SK051	赤褐色	④ 18	底部は大きく平底で粗雑なつくり	外面ヘラ磨き、底面、内面ナデ、外面丹塗り
60		壺・底部B	SK067	黄褐色～灰褐色		底部は大きく上げ底	外面研磨、内面ナデ
61	PL・9④	壺・底部C	SK053	黄褐色	④ 4.3	底部は小さく薄くわずかに上げ底、胴部下半との境がはっきりしない	外面斜方向のヘラ磨き、丹塗り
62		〃	SB085	褐色	④ 8.4	底部は平底	内・外面ナデ
63	PL・10⑨	〃	SK027	黄褐色	④ 4.8	底部は小さくわずかに上げ底、胴部下半との境がはっきりしない	外面ナデ、内面指頭圧調整後ナデ
64		〃	SK063	灰褐色	④10.6	〃	まめつのため調整不明
65		甕BⅠ	SB083	褐色	①20.8	口縁部がゆるく外反、口縁端部に刻目を施す	口縁部ヨコナデ、外面ハケ目後ナデ
66	PL・9⑤	〃	〃	暗褐色	①20.4	〃	口縁部ヨコナデ、外面ハケ目、内面ナデで磨いている
67		〃	SK062	灰褐色	①22.2	〃	内・外面ナデで磨いている
68		〃	SK053	黒褐色	①25.6	〃	外面ハケ目、内面ハケ目
69		甕BⅠ	SB085	褐色～黒色	①18.8	口縁部がゆるく外反、口縁端部に刻目を施す	口縁部ヨコナデ
70	PL・9⑤	甕BⅡ	SB084	黄褐色～黒褐色	①21.7	口縁部がゆるく外反、口縁部端下半に刻目を施す	外面ヨコナデ
71		〃	〃	暗褐色	①19.6	〃	口縁部ヨコナデ
72	PL・9⑤	〃	〃	暗褐色～黒褐色	①16.2	〃	口縁部ヨコナデ、外面ハケ目後ナデ
73		〃	SB085	褐色～黒褐色		〃	口縁部ヨコナデ、外面ハケ目、内面ナデ
74	PL・9⑤	〃	SK032	暗黄褐色	①22.4	口縁部がわずかに外反、口縁部下半に刻目、口縁部下に1条の沈線施す	口縁部ヨコナデ、内・外面ナデ

番号	図版番号	器種	出土地	色調	法量	形態の特徴	手法の特徴
75		甕BⅡ	SK052	黄褐色	①28.6	口縁部がゆるく外反、口縁部下半に刻目、口縁部下に3条の沈線施す	口縁一部ヨコナデ、外面、ハケ目、内面、指頭圧調整後、ハケ目
76		〃	SK053	〃	①29.1		口縁部ヨコナデ、外面ナデ、指頭圧調整後、ハケ目
77	PL・9⑤	〃	SK055	暗黄褐色	①23.6	口縁がゆるく外反、肩がややはる。口縁部下半に刻目を施す	口縁部ヨコナデ、内外面ナデ
78		〃	S K071	黒褐色	① 25	口縁がゆるく外反、口縁端部下端に刻目を施す	口縁部ヨコナデ
79	PL・9⑦	〃	SK036	暗黄褐色	①41.4	口縁部がゆるく外反、口縁部が肥厚し、刻目を施す。口縁部下に1条の沈線をめぐらす	口縁部ヨコナデ、内・外面ナデ
80	PL・9⑧	甕BⅢ	SK061	暗黄褐色	①32.6	口縁部がゆるく外反、口縁部下に2条の沈線をめぐらす	口縁部ヨコナデ
81	PL・8④	〃	SB088 (P181)	赤褐色～褐色	①24.4 ②30.3	口縁部がゆるく外反、肩がやや張る。口縁部下に1条の沈線をめぐらす。底部は厚く上げ底で裾がゆるく広い	口縁部・底部ヨコナデ 外面ハケ目、内面ナデ
82	PL・8③	〃	〃 (P183)	黄褐色～褐色	① 29	口縁部がゆるく外反、肩がやや張る。口縁部下に2条の沈線めぐらす	口縁部ヨコナデ、外面ハケ目、内面ナデ
83		〃	P188	黄褐色～褐色	① 28	口縁部がゆるく外反、口縁端部下半に刻目を施す口縁部下に1条の突帯をめぐらす	口縁部突帯ヨコナデ、内面上部ハケ目、下部ナデ
84	〃	〃	SB088 (P183)	暗褐色	① 30	口縁部がゆるく外反、口縁部下に1条の突帯をめぐらす	口縁部ヨコナデ、外面ハケ目、内部上部ハケ目、下部ナデ
85		〃	SB082	黒褐色	①16.2	小型の甕、口縁がゆるく外反する	口縁部ヨコナデ
86		〃	SK055	暗黄褐色		〃	外面ナデ、内面指頭圧調整後ナデ
87		〃	SK048	黄褐色	① 26	口縁部がゆるく外反し、内側が肥厚、口縁部下に	外面ハケ目、まめつ
88	PL・9⑧	〃	SK023	暗黄褐	①25.3	1条の突帯、口縁部が強く外反	口縁内外ヨコナデ、外面ハケ目、内面ナデ
89	〃	〃	SK035	〃	①27.6	口縁部がほぼ直角に外反、胴がやや張る	口縁内外ヨコナデ、外面・内面ナデ
90		〃	P83	赤褐色	①25.2	〃	口縁部ヨコナデ
91		〃	SK073	黒褐色	①30.3	〃	口縁部ヨコナデ、外面ハケ目後ナデ、内面ナデ
92	PL・9⑥	甕C	SK035	褐色	①27.3	口縁部が逆L字状で外側に刻目を施す。口縁部下に突帯をめぐらす	外面上半ヨコナデ、下半ナデ、内面ナデ
93		〃	SK046	暗黄褐色	① 28	〃	口縁部・外面ヨコナデ、内面ナデ
94		〃	SK016	暗褐色	①31.6	〃	外面ヨコナデ、内面ナデ
95		〃	SK064	暗赤褐色	① 25	〃	内・外面ヨコナデ
96	PL・9⑦	〃	〃	褐色～暗褐色	①27.6	口縁部下に突帯をめぐらし、刻目を施す	突帯ヨコナデ、外面ハケ目、内面指頭圧調整後ナデ
97	〃	〃	SK026	黄褐色		口縁部が逆L字状で外側に刻目を施す。口縁部下に突帯をめぐらす	口縁部、突帯ヨコナデ、内面ナデ
98		〃	SK064	暗褐色		大形甕、口縁が肥厚し、二重の刻目を施す	
99	PL・9⑥	甕D	SB 85	淡灰褐色	① 29	口縁が強く外反し、口縁部下に1条の沈線をもつ	口縁部ヨコナデ、外面ハケ目後ナデ
100	〃		SK017	黒褐色	①22.4	口縁が強く外反し、内側に粘土を貼りつけ、肥厚させている。胴が張る。	内・外面ヨコナデ
101	〃	甕D	SK018	黒褐色	①22.2	〃	口縁部ヨコナデ、外面ハケ目、内面ナデ
102		〃	SK045	淡褐色	① 26	〃	口縁部ヨコナデ、外面ハケ目、内面ハケ目後ナデ

番号	図版番号	器種	出土地	色調	法量	形態の特徴	手法の特徴
103	PL・9⑥	甕D	SK053	灰黄色	① 25	粘土帯貼りつけによる断面三角形の口縁部をもつ	口縁部ヨコナデ、外面ハケ目、内面ナデ
104		〃	〃	褐色	① 27	粘土貼りつけによる断面。口縁部下に突帯をもつ	口縁部、突帯ヨコナデ、内面ナデ
105		〃	SK064	淡褐色	④11.6	口縁部が強く外反し、内側に粘土を貼りつけ、肥厚させている	内・外面、研磨している
106		〃	SK016	褐色	①25.8	口縁部が強く外反し、内側に粘土を貼りつけ、肩が張る	口縁部付近ヨコナデ。外面ハケ目、内面ナデ
107	PL・10①	甕底部B	SB083	暗褐色	④ 9	底部はわずかに上げ底	外面ハケ目、内面・底部ナデ
108		〃	SB084	淡褐色	④10.2	底部は厚く上げ底	内面、指頭圧調整後ナデ、底面ナデ
109		〃	SB085	黄褐色～淡褐色	④ 9.5	〃	外面ハケ目、内面・底面面ナデ
110		〃	SK027	暗黄褐色	④ 9.6	底部はうすく上げ底	外面ハケ目後ナデ、内面ナデ
111		〃	SK051	黄褐色	④ 7.2	底部はうすく、わずかに上げ底	外面ハケ目、内面ナデ
112		〃	SK052	暗褐色	④ 7	底部は厚く上げ底	外面ハケ目、底面ナデ、内面指頭圧調整後ナデ
113		〃	SK053	褐色	④ 7.4	薄い平底	外面ハケ目、底面ナデ
114	PL・10②	〃	SK061	明黄褐色	④ 6.7	底部は薄く平底	外面ハケ目、内面指頭圧調整後ナデ
115	PL・10④	〃	SK062	淡褐色	④ 7.8	底部は厚くわずかに上げ底	外面・底面ナデ、内面指頭圧調整後ナデ
116		〃	SK067	〃	④ 8.2	底部は薄くわずかに上げ底	調整不明
117	PL・8⑥	〃	P211	赤褐色	④ 8	底部は厚い平底	外面ハケ目、内面、底面ナデ
118		甕底部C	SK016	赤褐色	④ 6.7	部厚い底部で裾がわずかに広がり上げ底	外面ハケ目、底部ハケ目後ナデ、内面・底面ナデ
119		〃	〃	赤褐色	~~④ 6.7~~	〃	
120		〃	〃	褐色	④ 5.7	〃	外面ハケ目後ナデ、内面ナデ
121		〃	SK021	明黄褐色	④ 6.4	〃	外面ハケ目、内面指頭圧調整後ナデ
122	PL・10⑤	〃	SK033	黄褐色	④ 6.5	〃	外面ハケ目後ナデ、内面指頭圧調整後ナデ
123	PL・10⑥	〃	SK035	赤褐色	④ 6	〃	外面ハケ目、内面ナデ
124		〃	SK024	黄褐色	④ 7.5	部厚い底部で裾が強く広がり上げ底	外面ハケ目後ナデ、内面・底面ナデ
125	PL・10③	〃	SK035	赤褐色～黄褐色	④ 9.6	〃	外面ハケ目、内面ナデ
126	PL・10⑦	〃	SK041	赤褐色	④ 9.2	〃	内面・底面ナデ、外面に指頭圧痕が残る
127	PL・10⑥	〃	〃	黄褐色	④ 9.8	〃	外面ハケ目、底面ナデ、内面指頭圧調整後ナデ
128		〃	SK057	黄褐色	④ 8.0	〃	外面ハケ目、内面指頭圧調整後ナデ、底面ナデ
129		〃	SK068	淡褐色	④ 7.2	〃	外面ヨコナデ
130		高杯	表土層	淡褐色	① 27	口縁が強く外反し、肩が屈曲する	口縁部ヨコナデ、内面ヨコナゼ
131		蓋	SK017	黒褐色	①24.4	裾部が強く外反	内・外面ヨコナデ

(4) 石　器

石器は、住居跡・貯蔵穴・表土層から出土した。弥生時代のものと縄文時代から弥生時代にかけてのものがほとんどである。種類は磨製石鏃・片刃石斧・打製石斧・抉入片刃石斧・磨製石斧・石包丁・石錘・磨石・砥石・石皿・敲石・石鏃・掻器・石錐・石核などがある。他に旧石器として、ナイフ形石器・台形様石器・細石器・削器・剥片尖頭器などがあるが、遺構に伴うものではない。

磨製石鏃（Fig 33　PL11）

合計３点あり、みな茎をもっている。鏃身は小型で三角形のものと柳葉形のものがあり、断面は菱形である。茎は長く、断面は柱状のものと楕円形に近いものがある。石質は頁岩である。

片刃石斧（Fig 33　PL11）

20点ある。平面は長方形で、刃部の幅が広く扁平なものと、刃部の幅が狭く厚手のものがある。刃部は約45度の角度をもつ。刃部が両刃に近いものもある。刃部には刃こぼれがみられる。また⑥は基部近くが紐ずれにより凹んでいる。石質は頁岩である。

抉入片刃石斧（Fig 3　PL11）

４点あり、うち２点は未製品である。断面が四角形で、刃部は約60度の角度をもつ。⑮は刃部および体部の一部を磨いている。体部に敲打面が多く残っている。⑯⑰は未製品で、⑯は敲打まで終了した完形品である。石質は玄武岩である。

石包丁（Fig33　PL11）

１点ある。大型の石包丁で形は半円形に近い。未製品で、２ヶ所に穿孔があり、一方の孔の部分で折れている。周囲を打ち欠いて形を整えている。上部は平坦で、刃部は両面から剥離を行っている。石質は粘板岩である。

打製石斧（Fig 34　PL 11）

１点ある。扁平な打製石斧で基部を欠損し、また全体に磨滅している。石質は玄武岩である。

磨製石斧（Fig 34　PL11）

合計20点ある。㉔は小型で、やや薄手だが㉑～㉖は太型蛤刃のものである。みな欠損品で、刃部を欠くものが多い。刃部付近のみ磨いており、他は敲打のまま残されている。石質は玄武岩で、今山産のものが９点みられた。

⑱は扁平な石斧で、薄手である。全体に剥落がはげしく、刃部を欠損している。表の一部にのみ磨製面が残っている。

石　錘（Fig 33　PL 11）

１点ある。円礫の両端を打ち欠いた。いわゆる礫石錘とよばれるもので、石質は安山岩である。

磨　石（Fig 35　PL12）

合計107点あり、うち71個がほぼ完形品で、一覧表に記載した。形はほとんどが円形・楕円形である。大きさは、長さ７cm程の小型のものから長さ20cm以上の大型のものまである。概して10cm～15cmのものが多い。ほとんどが両面を使用しており、周囲は叩いて使用している。また中央部も使用して凹んだものが多い。

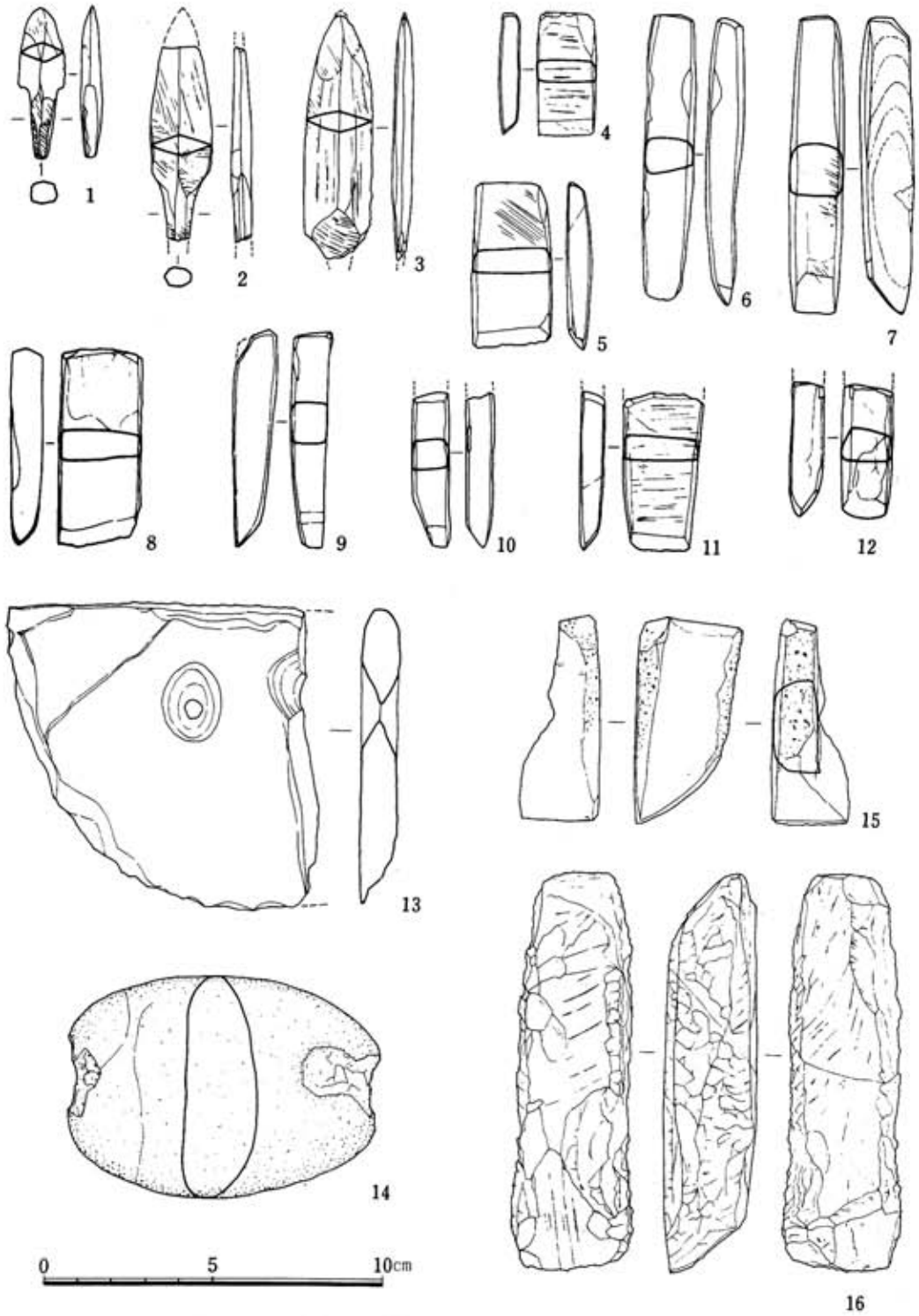


Fig. 33　押川遺跡出土石器実測図(1)

敲　石（Fig 36　PL12）

玄武岩や安山岩の円礫や縦長の礫を利用しており、先端部およびその周辺に敲打痕がよく残っている。

砥　石（Fig 36　PL12）

5点ある。砂岩製で、㊹は両面を、㊺は周辺をすべて利用している。㊹は使用面に溝状の痕がついている。

石　皿（Fig 36・37　PL12）

36点ある。ほとんどが砂岩製で、安山岩製のものもある。小型品と大型品に分けられる。小型品は長さ20cm前後で片面のみ使用している。大型品は、長さ30cm～38cmで片面のみ使用したものと両面使用したものがみられる。使用面は凹むものが多い。

石　鏃（Fig 38　PL11）

遺構内から約300点、表土層、その他から約400点の合計約700点出土した。ほとんどが黒曜石製で、サヌカイト製は12点である。完形品もしくはそれに近いもの245点について計測表を載せた。形態によりA・B・C・D・E・F・Gに分類できる。

Aは2点ある。基部の抉りが深いもので、①は側辺がジグザグで、②は鍬型鏃である。

Bは基部に浅い抉りのあるもので54点ある。形は整った正三角形か二等辺三角形で、剥離は丁寧で、脚の先端が尖る。

Cは基部の抉りがないか、あってもごくわずかのもので、203点ある。形は正三角形、二等辺三角形、五角形のものがみられる。剥離はBに比べると雑である。

Dは235点ある。基部の抉りが全くないもので、基部が丸味をおびるものもある。形は不整三角形・五角形で剥離は雑である。

Eは局部磨製の石鏃で、15点ある。研磨は剥離後行なっている。形はB・Cに近いが、全体に小型品が多い。

Fは3cm以上の大型の石鏃で、22点ある。形は不整三角形で、厚手である。粗雑な剥離がなされている。石銛としての用途も考えられる。

Gは形が柳葉形のもので、黒曜石製が5点とサヌカイト製が13点ある。大型品は石銛としての用途が考えられる。

掻器・石匙（Fig 39　PL11）

210点あり、うち黒曜石製130点、サヌカイト製81点である。黒曜石製のものは小型で、サヌカイト製のものは大型である。縦長剥片・横長剥片・不定形剥片を素材とし、これに剥離を施こし刃部を形成している。

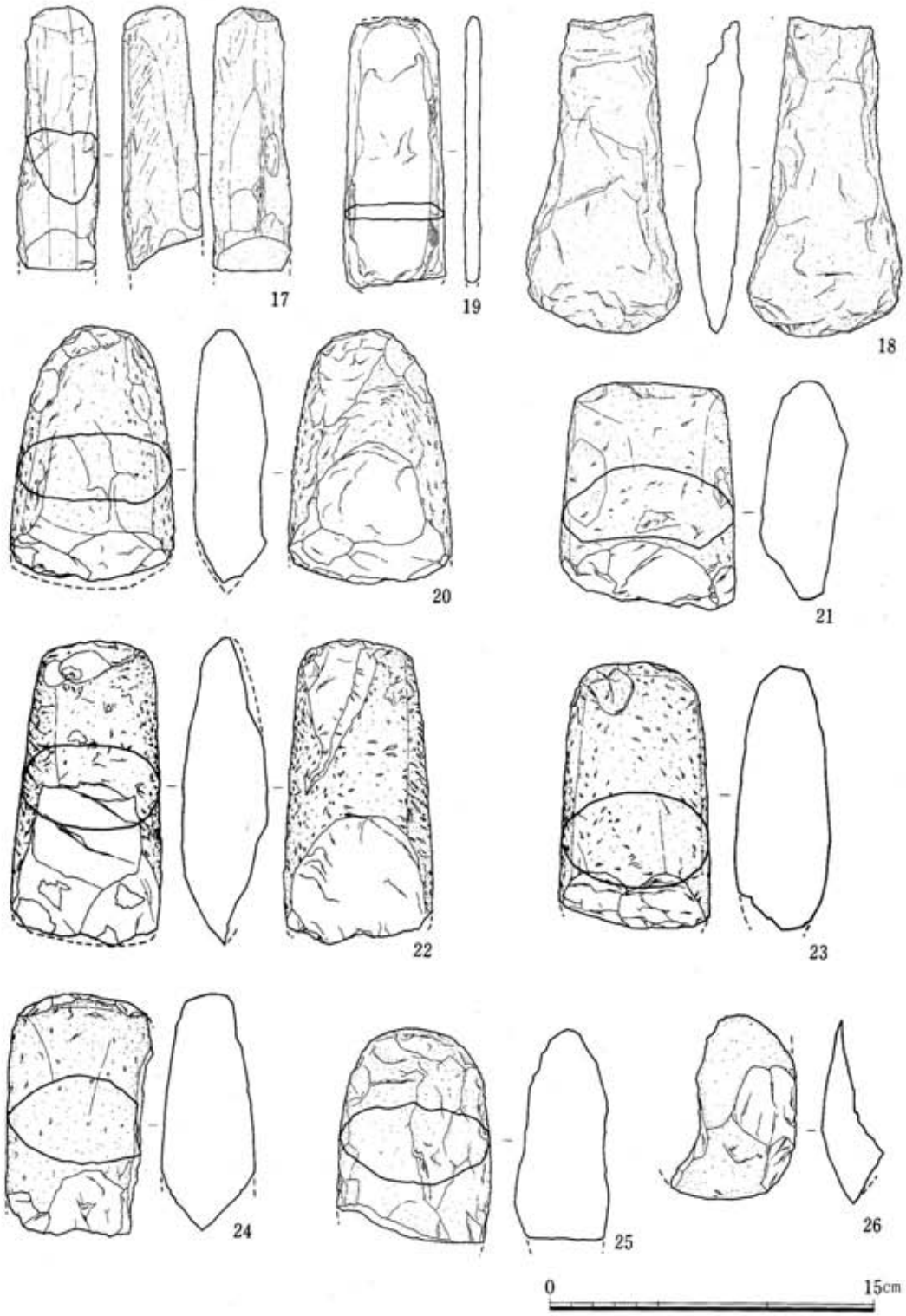


Fig. 34　押川遺跡出土石器実測図(2)

石　錐（Fig38　PL11）

黒曜石製のもの３点とサヌカイト製のものが２点ある。形は三角形で、先端が長くて尖る。㊻は先端部のみに加工を加えている。

つまみ形石器（Fig38 PL11）

１点ある。黒曜石の剥片に抉りを入れて折った基部側ではあるが両面から剥離がおこなわれ、これ自体、掻器として利用している。

サイドブレイド（Fig38　PL11）

１点ある。黒曜石の縦長の剥片を素材とし両面から入念な剥離を行なっている。

異形石器（Fig38　PL11）

打面の残った黒曜石の剥片を利用し、５ヶ所を突出させた特異な形をしている。用途不明の石器である。

石　核（Fig38　PL11）

約450点ある。みな、剥片を取った残りで小型である。円礫・角礫を利用し、不規則に剥片を取っている。主に石鏃を作るために利用したと思われる。すべて黒曜石である。

旧 石 器（Fig 40　PL12）

ナイフ形石器

14点ある。１点のみチャート製で他は黒曜石製。縦長の剥片を素材とし、刃潰しは、周囲の½程にみられるものと、¾程にみられるものがあり、㊻は基部の主要剥離面側にも加工を施こしている。㊾は非常に小型で、また㊿は石刃状の剥片の一部分にのみ刃潰をおこなっている。刃部には刃こぼれがみられる。

台形様石器

１点あり（㉘）、黒曜石製である。不定形な剥片を素材とし側辺に刃潰しがみられる。

細石刃・細石核

細石刃は３点あり、（㉘～㉚）みな黒曜石製である。長方形で表面に１条～２条の稜が縦に走る。㉑は完形品で打面を取り去っている。細石核は１点ある。黒曜石製の舟底形の石核で、打面と剥離面との角度は約60度である。

彫　器

１点あり、黒曜石の厚手の縦長剥片を素材としている。上端に彫器面を作成するための打面調整がみられる。また側辺の角も利用しており、使用痕が残る。

剥片尖頭器

１点あり、（㉜）サヌカイト製の未製品である。先端に自然面を残す。縦長の剥片を素材とし、打点側に両側から剥離を行ない茎部を作成している。

刃器状剥片

10点あり、みな黒曜石である。㉟は縦長の剥片で側辺に使用による刃こぼれがみられる。

掻器

㉝は石核の残りを利用したもので１側辺に剥離を行ない刃部を形成している。㊱はやや扁平な円礫の上部を剥ぎ取り、ここを打面とし、下方に向って剥離を行ない、厚い刃部を形成している。

石　核

㊲は縦長の剥片を取る石核で、サヌカイト製。打面には打面調整がみられ、打面と剥離面の角度は約60度である。㊳は打面を再生する際取り去った剥片である。黒曜石製。

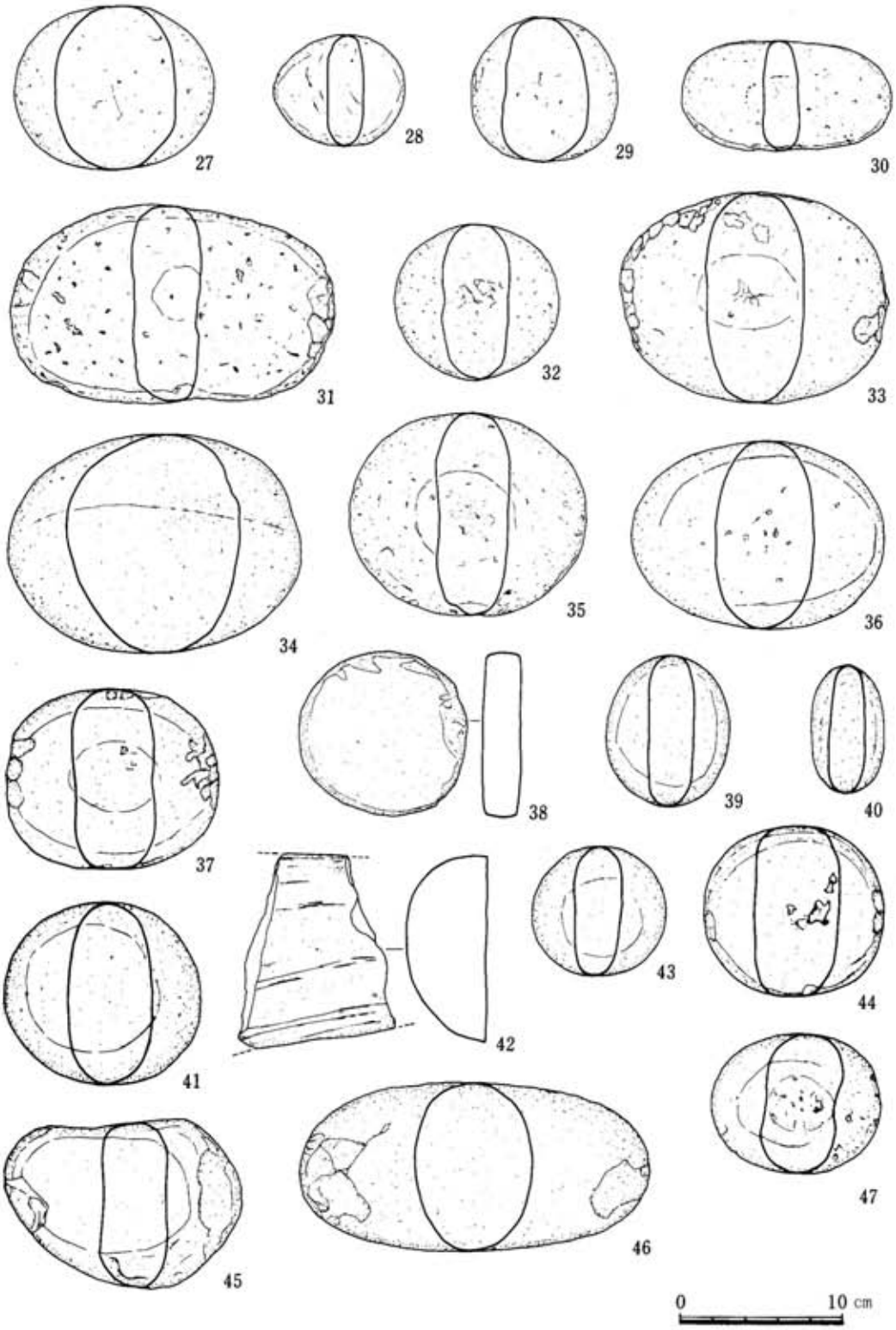


Fig. 35　押川遺跡出土石器実測図(3)

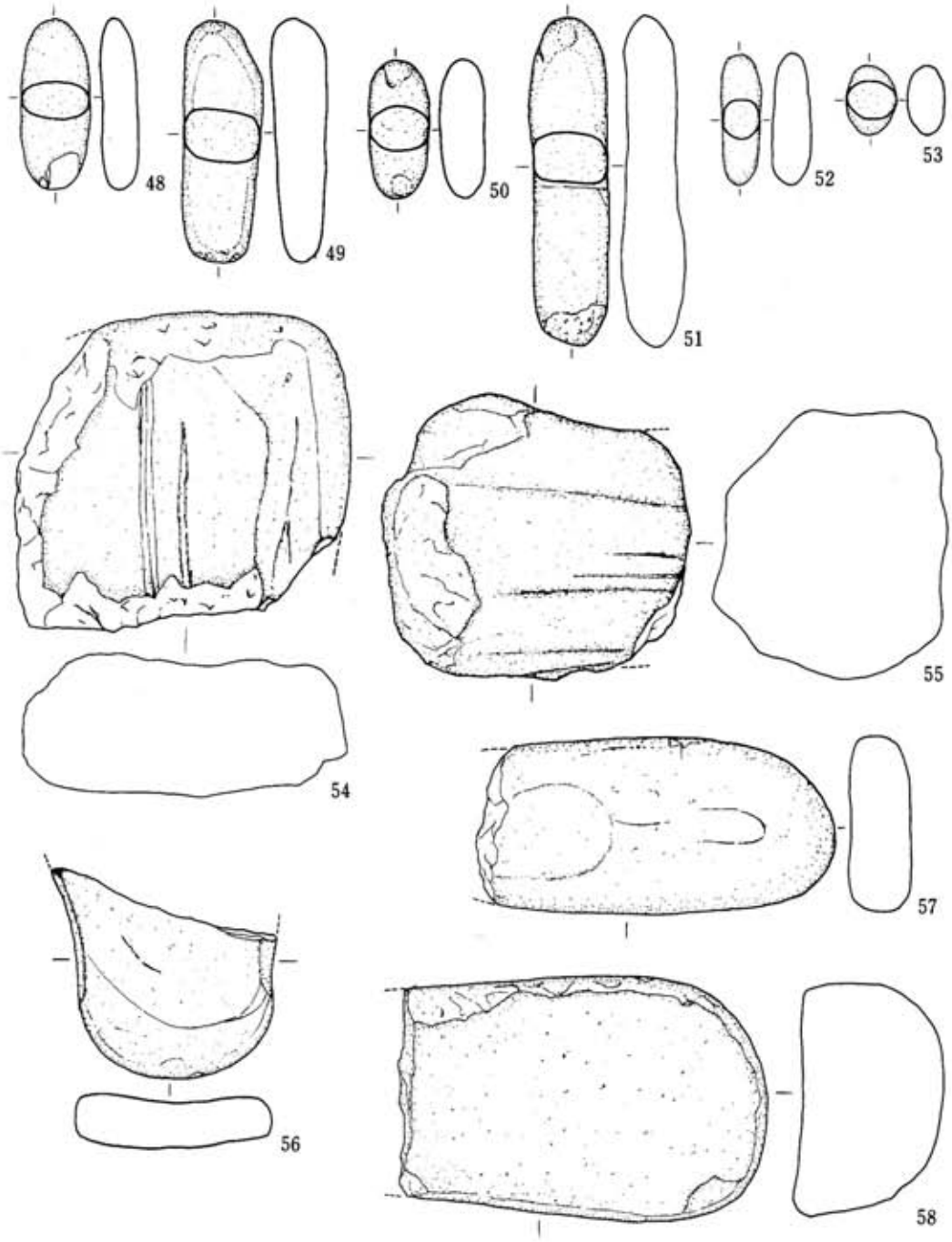


Fig. 36　押川遺跡出土石器実測図(4)

0　10　20 cm

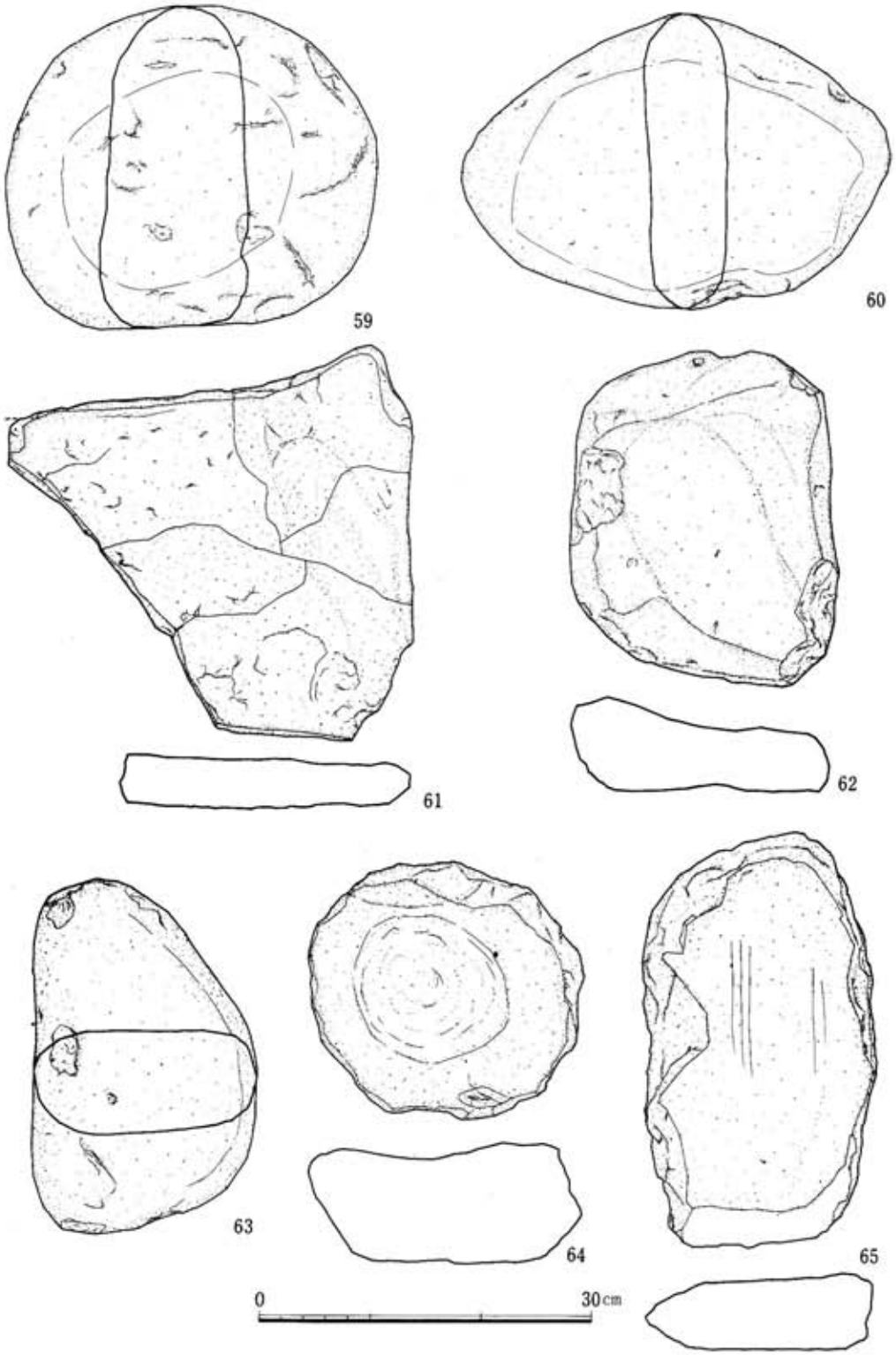


Fig. 37　押川遺跡出土石器実測図(5)

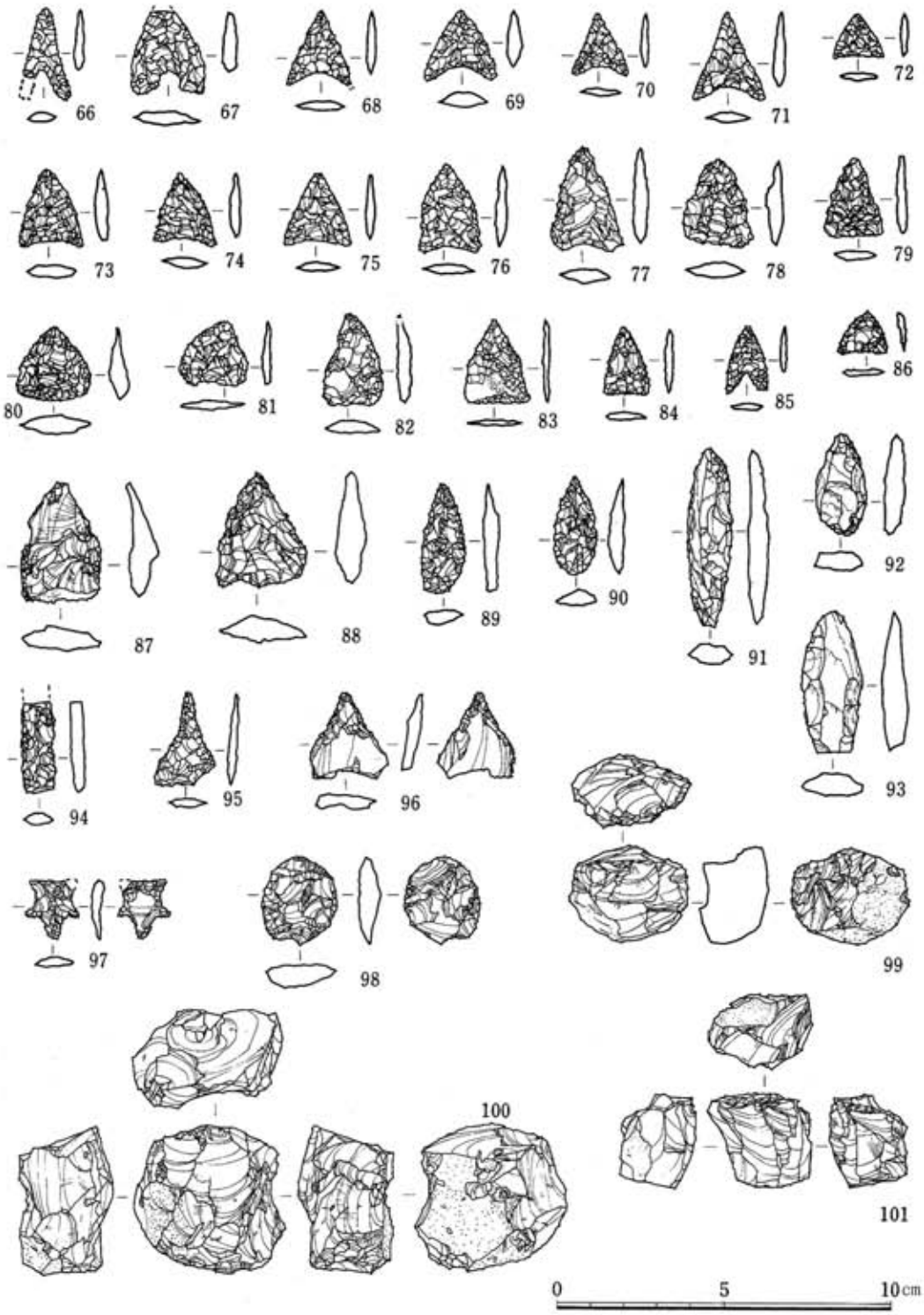


Fig. 38　押川遺跡出土石器実測図(6)

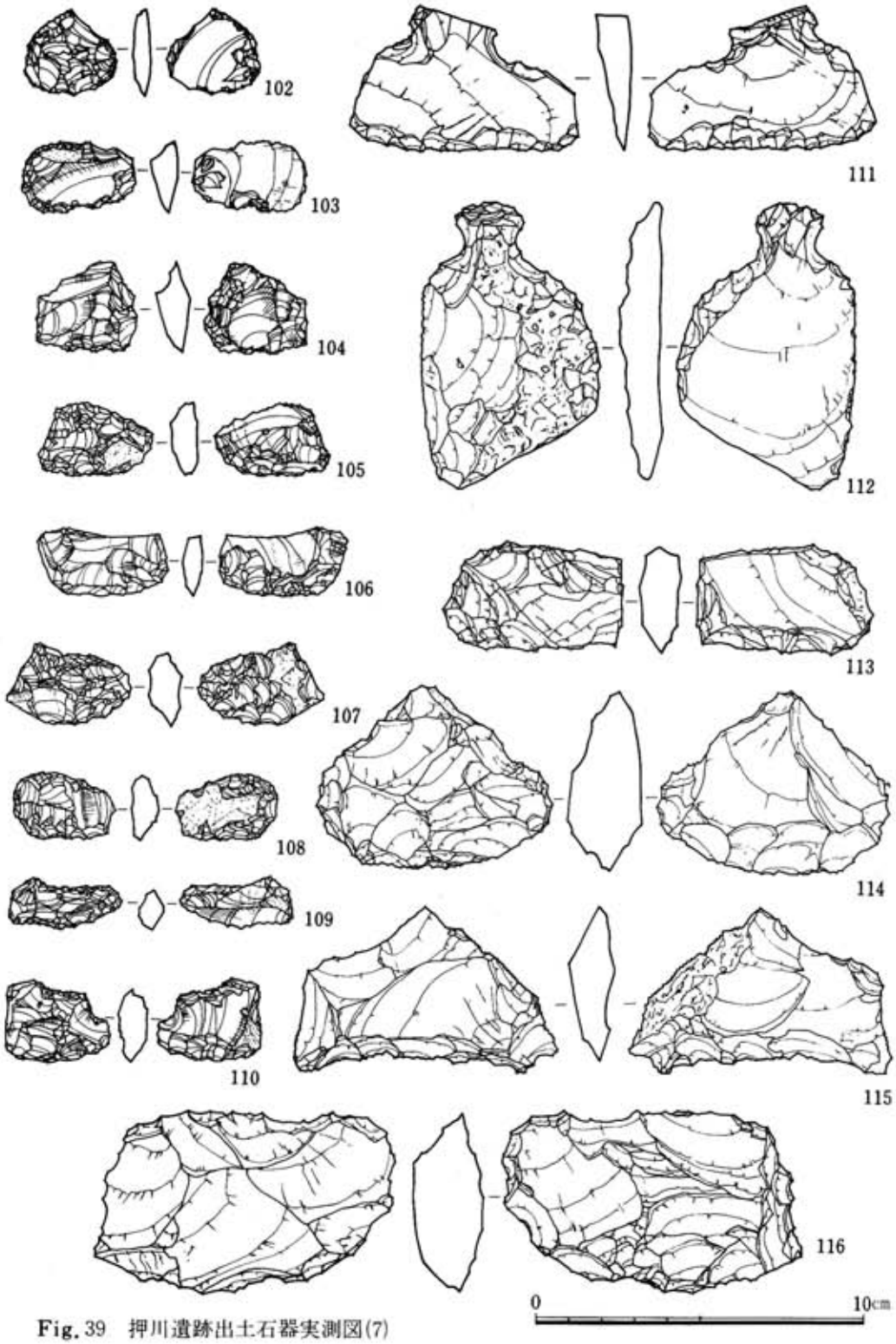


Fig. 39　押川遺跡出土石器実測図(7)

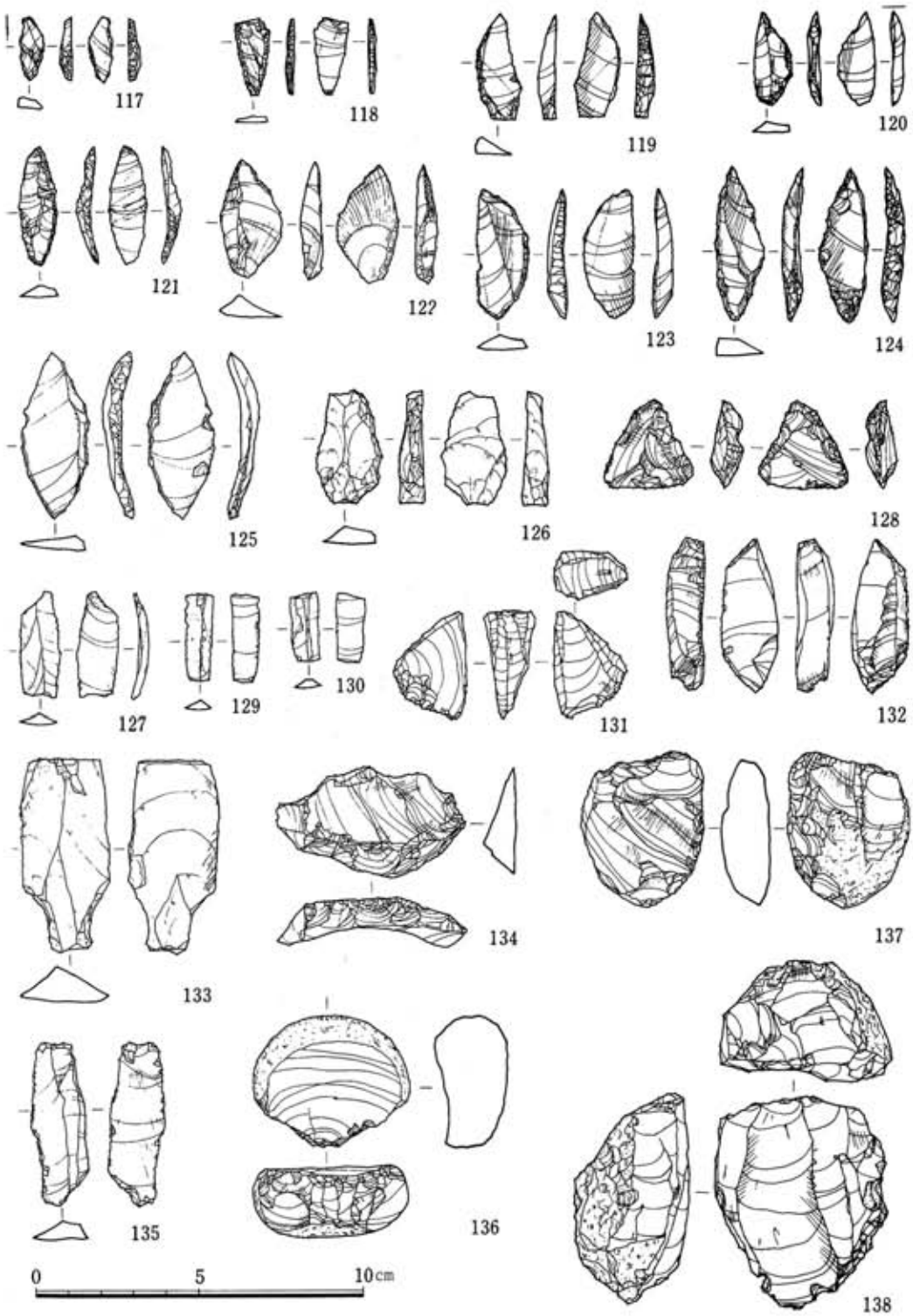


Fig. 40　押川遺跡出土旧石器実測図

Tab 5 押川遺跡出土石器一覧表

番号	図版番号	種類	出土地	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	特徴
1	PL・11	磨製石鏃	SK059	頁岩	4.5	1.4	0.6	5.0	鏃身は小さく断面ひし形茎の先端をわずかに欠損
2	〃	〃	SB088	〃	5.8	1.8	0.6	7.5	柳葉形鏃身の断面は菱形、鏃身の先端と基部を欠損
3	〃	〃	表土層	〃	7.3+α	2.0	0.6	10	〃 茎欠損
4	〃	片刃石斧	〃	〃	3.7	1.8	0.6	10	短冊形
5	〃	〃	SK052	〃	5.0	2.4	0.75	16	短冊形刃部に刃こぼれあり
6	〃	〃	表土層	〃	8.6	1.5	1.1	22	基部近くに縦ずれにくぼみがみられる。
7	〃	〃		〃	8.9	1.6	1.6		完形、刃部に刃こぼれあり
8	〃	〃	SK041	〃	5.9	2.5	0.95	26	完形、刃部に刃こぼれあり
9	〃	〃		〃	6.5	1.1	1.2	15	ほぼ完形
10	〃	〃		〃	4.6+α	1.1	0.8	9.0	基部を欠損
11	〃	〃	表土層	〃	4.75+α	2.4	0.7	15.0	〃
12	〃	〃	表土層	〃	4.0+α	1.6	1.0	12.5	〃
13	〃	石包丁	P250	粘板岩	8.8+α	9.1	1.1	15.4	未製品、大型石包丁
14	〃	石錘	P27	安山岩	6.6	9.2	2.1	230	両端を打ち欠いた礫石錘である
15	〃	扶入片刃石斧	SB081	玄武岩	6.1+2	2.35	3.15		体部に搗打面を残す。刃部に刃こぼれがみられる
16	〃	〃	P71	〃	12.5	3.6	2.8	200	未製品、敲打まで終了している
17		〃	P185	〃	12.1+α	3.6	3.6	250	未製品、刃部に欠損している
18	〃	打製石斧	表土層	〃	14.6+α	7.1	2.4	240	バチ形の扁平な石斧、基部を欠損している。
19	〃	磨製石斧	SK077	玄武岩	12.1+α	4.6	0.7	82	扁平な石斧、体部に研磨面がみられる。刃部を欠損している。
20	〃	〃	表土層	〃	11.7	7.5	3.2	440	小型の石斧、刃部を欠損している
21	〃	〃	表土層	〃	10.4+2	8	3.6	500	太型蛤刃石斧、刃部を欠損
22	〃	〃	表土層	〃	13.8	6.8	3.8	530	〃
23	〃	〃	〃	〃	12+2	6.9	4.8	650	〃
24	〃	〃	〃	〃	11	6.5	8	480	〃
25	〃	〃	〃	〃	9.6+α	7	4.3	440	〃
26	〃	〃	〃	〃	8.4+2	5+2		120	〃

Tab 6 押川遺跡出土石器(磨石・敲石)一覧表 (1～72磨石、73～77叩石)

注) 長さ幅、厚さは最大長
( )内は欠損品の数値

番号	遺構番号	図版番号	出土地	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(kg)	特徴
1	27	PL・12	SK011	安山岩	13.8	11.6	9.0	1.46	
2			SK014	〃	10.4	7.9	6.7	0.42	
3	29		SK015床面	〃	10.6	10.3	6.9	0.68	片面中央凹む。周囲叩いている。
4			SK016床面	〃	10.5	10.3	7.6	0.58	
5			〃	〃	12.4	11.0	7.9	0.94	
6			〃	砂岩	12.5	10.0	6.0	0.42	
7	30	〃	SK017	安山岩	14.5	8.2	3.9	0.36	片面中央わずかに凹む。周囲叩いている。
8	28	〃	SK021	安山岩	9.6	8.3	3.7	0.18	
9			〃	砂岩	15.8	14.0	7.5	1.92	周囲叩いており両端に一部欠損
10	31	〃	〃	安山岩	21.3	13.7	5.7	1.52	両面中央わずかに凹む。磨めつしている
11	32	〃	SK033床面	砂岩	11.7	11.0	5.7	0.62	周囲叩いている。
12	33	〃	SK035床面	〃	18.0	14.3	7.7	2.14	両面中央わずかに凹む。両端叩いており一部欠損
13	34	〃	〃	〃	19.2	14.9	12.2	3.78	
14			〃	〃	15.8	14.0	6.1	1.24	周囲叩いており両端の一部欠損
15	35	〃	SK039	〃	16.0	13.9	6.2	1.36	両面の中央凹む。周囲叩いている
16			SK041床面	〃	16.7	14.1	7.0	1.62	両面の中央凹む。周囲叩いている。
17			SK043	〃	11.8	11.7	7.0	0.88	片面中央部わずかに凹む。
18			SK044	〃	7.5	7.4	6.6	0.26	
19	36		SK047	玄武岩?	17.2	12.9	7.8	1.74	
20			SK048	砂岩	12.1	10.7	6.0	0.48	両端叩いている。
21	37	〃	SK049床面	安山岩	14.5	12.4	6.6	1.34	両面中央凹む。周囲叩いている。
22	38	〃	SK050	安山岩?	11.8	11.4	6.1	0.40	周囲も磨っている。

番号	挿図番号	図版番号	出土地	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(kg)	特徴
23			SK053床面	砂岩	14.9	12.3	5.3	0.76	両面中央凹む。周囲叩いている。
24	39	PL・12	SK061床面	安山岩	10.7	9.1	4.3	0.33	
25			〃	〃	14.8	12.7	6.8	1.20	片面中央部凹む。両端叩いており一部欠損
26			SK064	〃	7.6	6.8	5.4	0.19	
27	40	〃	〃	〃	9.2	6.1	3.8	0.12	
28	41	〃	SK071床面	〃	13.5	12.7	6.7	1.10	
29			SK076床面	〃	15.1	11.9	7.0	1.22	両面中央凹む。両端叩いている。
30			SB082	安山岩？	7.4	6.7	6.5	0.14	周囲叩いている。
31			〃	安山岩	11.3	8.8	4.7	0.34	片面中央凹む。
32			SB083	〃	12.3	9.3	5.1	0.45	
33			〃	砂岩	11.5	7.8	4.3	0.22	
34	42	〃	〃	砂岩	11.3	12.8	6.5	0.69	
35			SB084床面	玄武岩？	16.4	14.6	5.7	1.04	
36			〃	安山岩	(8)	11.0	7.8	0.70	欠損品。火をうけて焼けている。
37			〃	〃	10.9	10.0	5.1	0.42	
38	43	〃	SB086	〃	9.8	9.5	4.6	0.31	
39			〃	〃	10.0	9.4	6.0	0.44	
40			〃	〃	11.8	10.3	4.8	0.42	
41			〃	〃	11.4	11.0	7.3	0.74	
42			〃	〃	11.6	10.4	7.3	0.75	
43		〃	〃	〃	13.3	9.0	5.6	0.58	両面中央叩いている。
44			P40	〃	11.4	11.0	4.5	0.46	
45	44		P135	〃	12.7	11.8	7.0	1.12	片面中央凹んでいる。周囲叩いている。
46			P184	〃	15.1	11.7	7.8	1.26	
47			P139	〃	15.0	13.3	7.0	1.35	両端を叩いており一部欠損
48			P157	〃	14.4	12.8	8.3	1.46	周囲叩いており一部欠損
49			P223	〃	14.0	11.6	6.7	0.98	
50			P243	〃	11.0	9.2	4.6	0.32	
51	45	〃	P243	砂岩	16.2	12.0	5.8	0.84	火をうけて黒ずんでいる。
52			〃	安山岩	13.9	11.5	6.8	0.98	周囲の一部叩いており欠損
53			〃	〃	16.0	14.6	8.2	1.91	
54			表土層	〃	16.7	13.3	7.7	1.26	周囲叩いている。片側の一部欠損。
55	46		〃	〃	23.0	11.7	9.0	2.50	
56			〃	〃	12.9	11.7	7.4	1.02	片側の一部叩いている。
57			〃	〃	16.0	14.0	7.8	1.89	両面の中央凹む。
58			〃	〃	17.2	12.6	6.2	1.36	両面の中央凹む。周囲叩いている。
59			〃	〃	12.3	11.2	6.4	0.79	周囲（特に両端）を叩いている。
60	47		〃	〃	12.1	10.1	6.3	0.68	両面の中央凹む。
61			〃	安山岩？	14.3	11.5	4.5	0.70	
62			〃	安山岩	14.1	10.8	5.9	0.84	
63			〃	〃	11.3	8.7	8.0	0.44	
64			〃	〃	11.7	9.1	5.8	0.50	
65			〃	〃	10.1	8.5	5.4	0.36	
66			〃	〃	7.5	6.1	3.4	0.09	
67			〃	〃	10.3	7.9	3.9	0.20	
68			〃	〃	7.2	6.9	3.8	0.10	
69			〃	〃	9.5	5.8	3.7	0.1	
70			〃	〃	8.9	6.8	4.3	0.16	
71			〃	〃	9.3	7.7	4.7	0.22	
72			SK038	〃	9.8	4.1	2.2	0.14	両面を磨っている。
73	49	PL・12	SK048	玄武岩	14.0	4.6	3.1	0.36	両端を叩いている。両面を磨っている。
74	50	〃	SK057	安山岩	8.0	3.5	2.7	0.12	両端を叩いている。
75	51	〃	SK039－061	玄武岩	18.9	4.5	3.7	0.49	両端を叩いている。両面を磨っている。
76	52	〃	表土層	〃	7.6	2.4	2.2	0.09	
77	53	〃	〃	安山岩	4.0	2.9	2.2	0.04	

Tab 7　押川遺跡出土石鏃計測表

注）233～246はサヌカイト製他は黒曜石製

番号	挿図番号	図版番号	分類	長(cm)	幅(cm)	重(cm)	重(g)	出土地	番号	挿図番号	図版番号	分類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	出土地
1	66	PL·11	A	2.6	1.3	0.30	0.7	表　土	67			C	1.9	1.5	0.30	0.7	表　土
2	67	〃		2.5	2.1	0.40	1.8	S B 083	68				1.9	1.8	0.40	1.2	〃
4	68	〃	B	2.1	2.1	0.29	0.8	S B 037	69				2.2	1.6	0.50	1.6	〃
5				1.9	2.1	0.32	1.0	S K 051	70				1.9	1.4	0.50	1.4	〃
6				1.9	1.5	0.30	0.7	S K 052	71				2.1	1.8	0.60	1.9	〃
7				1.6	1.8	0.30	0.6	S K 055	72				2.3	1.6	0.30	1.0	〃
8				2.4	1.8	0.29	0.7	S K 058	73				1.9	1.4	0.30	0.9	〃
9	69	〃		2.1	2.1	0.40	1.1	S K 059	74				1.8	1.5	0.40	0.8	〃
10				2.5	2.2	0.50	2.0	S K 065	75				1.6	1.4	0.40	0.9	〃
11				1.8	1.7	0.30	0.6	S K 067	76				1.6	1.4	0.25	0.5	〃
12	70	〃		1.9	1.6	0.21	0.4	S K 069	77				1.4	1.2	0.20	0.4	〃
13				2.1	1.8	0.30	0.8	S K 071	78				1.6	1.4	0.30	0.5	〃
14				1.9	1.8	0.45	0.8	S B 083	79				1.7	1.9	0.30	0.8	〃
15				2.3	2.2	0.50	1.7	S B 085	80				2.3	1.2	0.35	0.9	〃
16				2.2	1.8	0.40	1.0	表　土	81				2.2	1.9	0.60	2.7	〃
17				2.2	1.8	0.35	0.8	〃	82				2.4	1.7	0.35	1.3	〃
18				2.0	2.3	0.35	0.9	〃	83				2.4	2.0	0.30	0.9	〃
19				2.1	1.9	0.35	0.7	〃	84				2.4	1.9	0.50	1.5	〃
20				1.5	1.8	0.35	0.6	〃	85				2.5	1.7	0.25	1.0	〃
21	71	〃		2.5	2.1	0.30	0.9	〃	86				1.8	2.0	0.40	1.0	〃
22				2.5	2.1	0.30	1.4	〃	87				2.2	1.5	0.40	1.0	〃
23				2.5	1.8	0.40	1.2	〃	88				3.2	2.8	0.60	2.7	〃
24				1.7	2.2	0.30	0.9	〃	89				1.8	2.0	0.30	0.9	〃
25			C	2.2	1.6	0.50	1.1	S K 011	90				1.9	2.8	0.70	4.2	〃
26				2.3	2.1	0.50	1.6	P 130	91				2.2	2.7	0.40	1.5	〃
27				2.2	1.8	0.50	1.6	P 169	92				2.1	1.0	0.50	1.5	〃
28	72	〃		1.3	1.5	0.20	0.3	P 215	93	76	〃		2.5	1.2	0.35	1.4	〃
29				1.7	1.5	0.20	0.4	P 56	94				2.8	2.0	0.50	2.0	S B 085
30				1.4	1.9	0.40	0.8	P 224	95				3.0	1.5	0.40	1.4	表　土
31	73	〃		2.2	2.9	0.40	1.4	P 250	96	77	〃		3.1	2.8	0.50	0.6	〃
32				2.1	2.0	0.60	1.6	P 250	97				2.0	1.7	0.50	1.3	〃
33				2.8	2.0	0.45	1.1	P 015	98			D	1.8	1.8	0.25	0.6	P 8
34				1.8	1.9	0.45	0.9	P 029	99	79	〃		2.2	1.7	0.30	1.1	P 35
35				2.2	1.2	0.30	0.7	S K 040	100				1.8	1.4	0.20	0.5	P 44
36									101	78	〃		2.7	2.0	0.30	1.4	P 44
37				2.4	1.6	0.40	0.8	S K 040	102								
38				1.8	1.4	0.30	0.6	S K 046	103				2.2	2.1	0.60	2.1	P 120
39				2.3	1.4	0.40	0.9	S K 048	104				2.2	2.0	0.35	1.2	P 129
40				1.6	1.2	0.30	0.5	S K 050	105				2.4	1.8	0.40	1.6	P 25
41				2.3	1.4	0.30	0.9	S K 050	106				2.8	2.0	0.65	2.6	P 215
42				1.8	1.8	0.25	0.7	S K 053	107				2.2	1.8	0.40	1.1	P 186
43	74	〃		2.1	1.8	0.40	0.9	S K 060	108				1.8	1.4	0.30	0.7	S K 028
44				1.9	1.9	0.30	0.9	S K 063	109				1.6	1.7	0.25	0.5	S K 028
45				2.4	2.0	0.40	1.8	S K 067	110				2.4	2.4	0.55	2.5	S B 035
46				2.0	1.8	0.30	0.9	S K 075	111				2.4	1.9	0.40	1.4	S K 036
47				2.1	1.4	0.40	1.1	S K 075	112				1.9	1.6	0.25	0.6	S K 037
48				2.4	1.7	0.45	1.5	S K 075	113				2.6	1.5	0.25	0.8	S K 040
49				2.8	2.1	0.56	2.8	S B 083	114				1.5	1.5	0.25	0.5	S K 041
50				2.1	2.0	0.30	0.9	S B 073	115				2.3	1.9	0.50	1.6	S K 045
51				2.0	1.6	0.30	0.9	S B 083	116				1.9	1.6	0.35	1.0	S K 045
52									117				2.2	1.9	0.50	1.5	S K 051
53				2.4	1.9	0.60	1.6	S B 085	118				2.0	1.7	0.30	1.0	S K 051
54				2.0	1.5	0.50	1.2	S B 085	119				1.5	1.6	0.50	1.1	S K 052
55				2.2	1.8	0.40	0.8	S B 085	120				2.1	1.5	0.30	0.7	S K 054
56				1.9	1.8	0.30	0.7	表　土	121				2.1	1.7	0.30	1.1	S K 055
57				1.6	1.5	0.30	0.6	〃	122				3.1	1.9	0.50	2.4	S K 055
58				2.1	1.2	0.35	0.9	〃	123								
59									124				3.4	1.7	0.40	2.9	S K 055
60				1.7	1.4	0.30	0.7	〃	125	80	〃		2.6	2.0	0.45	1.9	S K 056
61				1.8	1.4	0.25	0.5	〃	126				1.9	1.4	0.25	0.6	S K 059
62				1.7	1.3	0.30	0.6	〃	127				2.0	1.5	0.50	1.2	S K 070
63				2.1	1.5	0.35	0.8	〃	128				3.2	2.1	0.60	3.8	表　土
64				2.	1.7	0.40	1.0	〃	129				3.0	2.2	0.60	3.6	S K 055
65				1.8	2.0	0.30	0.8	〃	130				2.5	1.5	0.40	1.3	S K 071
66				2.3	2.0	0.45	1.3	〃	131				1.5	1.6	0.30	0.5	S K 071

番号	図版番号	写真番号	分類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	出土地
132			D	1.8	1.5	0.30	0.9	S B 081
133	81	PL-11		2.0	1.9	0.40	1.0	S B 081
134	82	〃		2.8	1.6	0.45	1.9	S B 083
135				3.0	1.8	0.55	2.2	S B 083
136				2.8	2.5	0.60	3.0	S B 083
137				3.2	2.2	0.40	3.6	S B 083
138				1.8	1.5	0.40	0.9	S K 084
139				2.5	1.9	0.20	1.6	S K 084
140	83	〃		2.5	1.9	0.50	0.9	S B 085
141				2.5	1.5	0.40	1.2	S B 085
142				2.8	2.0	0.60	1.9	S B 085
143				2.5	2.4	0.40	2.8	S B 085
144				1.5	1.7	0.20	1.0	表　土
145				1.2	1.2	0.25	0.3	〃
146				1.2	1.4	0.25	0.4	〃
147				1.9	1.1	0.20	0.5	〃
148				1.2	1.5	0.20	0.1	〃
149				1.8	1.4	0.20	0.5	〃
150				2.0	1.9	0.40	1.2	〃
151				2.3	1.6	0.45	1.4	〃
152				1.9	1.7	0.25	0.5	〃
153				1.8	1.8	0.30	0.9	〃
154				1.8	1.9	0.35	1.1	〃
155				2.0	1.9	0.35	1.0	〃
156				1.8	1.8	0.40	1.2	〃
157				2.1	1.4	0.30	0.9	〃
158				1.9	1.4	0.25	0.6	〃
159				2.0	1.6	0.30	0.9	〃
160				1.8	1.3	0.30	0.8	〃
161				1.6	1.8	0.30	0.7	〃
162				2.2	1.4	0.35	0.8	〃
163				2.5	1.8	0.40	1.4	〃
164				2.0	1.8	0.40	1.3	〃
165				2.8	1.5	0.40	1.8	〃
166				2.4	1.7	0.35	1.4	〃
167				2.3	2.0	0.20	0.8	〃
168				2.6	1.9	0.30	1.3	〃
169				2.6	1.8	0.40	2.0	〃
170				1.4	1.5	0.30	0.6	〃
171				1.6	1.5	0.40	1.5	〃
172				2.0	1.9	0.35	1.1	〃
173				1.8	1.5	0.40	1.2	〃
174				2.2	2.1	0.75	1.6	〃
175				2.0	2.0	0.40	1.5	〃
176				2.5	2.0	0.30	1.2	〃
177				2.7	1.8	0.40	1.8	〃
178				1.8	1.5	0.30	0.7	〃
179				2.1	1.8	0.30	1.0	〃
180				2.2	2.0	0.50	1.8	〃
181				2.7	2.0	0.60	2.5	〃
182				2.6	1.9	0.40	1.8	〃
183				2.0	2.1	0.55	2.2	〃
184				2.1	2.1	0.90	3.5	〃
185				2.2	1.8	0.30	1.0	〃
186				2.3	1.6	0.40	1.3	〃
187				2.2	1.9	0.40	1.5	〃
188				2.3	2.3	0.40	1.9	〃
189				2.0	1.8	0.50	1.7	〃

番号	図版番号	写真番号	分類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	出土地
190			D	2.4	2.2	0.55	2.3	表　土
191				2.4	1.7	0.40	1.5	〃
192				2.5	1.8	0.60	2.0	〃
193				2.5	1.6	0.50	2.1	〃
194				2.4	2.2	0.70	2.9	〃
195				2.6	1.6	0.40	2.4	〃
196				2.8	1.8	0.50	2.4	〃
197				2.3	2.2	0.60	3.1	〃
198				2.7	2.0	0.70	3.4	〃
199				2.4	2.0	0.60	2.5	〃
200				2.5	2.3	0.60	3.4	〃
201				2.4	1.9	0.40	1.7	〃
202				3.0	2.5	0.80	4.2	〃
203				2.2	2.2	0.40	2.0	〃
204				2.4	2.2	0.60	3.2	〃
205				2.8	1.9	0.70	2.7	〃
206				1.8	1.2	0.20	0.4	S K 062
207				1.3	1.2	0.20	0.5	表　土
208	84	PL-11		2.0	1.2	0.25	0.6	〃
209			E	1.8	1.3	0.25	0.6	〃
210				1.6	1.9	0.20	0.5	〃
211	85	〃		2.0	1.2	0.20	0.4	S B 085
212	86	〃		1.9	1.5	0.30	0.7	S K 052
213				1.3	1.5	0.20	0.3	P 215
214				2.5	1.7	0.35	0.9	S K 038
215				2.0	1.7	0.35	0.8	S B 083
216				1.8	1.3	0.40	0.9	表　土
217			F	3.8	2.7	0.90	8.7	P 44
218	87	〃		3.5	2.4	0.90	5.2	S K 058
219				3.8	2.5	0.60	4.6	表　土
220				3.5	2.4	0.70	3.7	S K 075
221				3.8	2.6	0.90	5.4	S K 065
222				3.2	2.8	0.90	5.8	表　土
223	88	〃		3.3	2.8	0.90	5.5	〃
224				3.5	2.3	0.60	3.6	P 281
225				3.9	2.5	0.90	7.3	表　土
226				3.3	2.3	1.10	6.0	S K 084
227				3.4	3.0	0.90	6.8	表　土
228	89	〃	G	3.2	1.3	0.50	1.5	S K 013
229				2.4	1.6	0.30	1.1	表　土
230	90	〃		3.0	1.3	0.50	1.8	S B 083
231				3.4	1.8	0.70	3.7	表　土
232				2.2	1.9	0.60	3.0	〃
233	92	〃		3.1	1.6	0.45	2.3	P 182
234				3.9	1.7	0.60	2.8	表　土
235				2.2	1.7	0.60	2.4	〃
236				2.4	2.4	0.75	4.7	〃
237				4.8	1.7	1.00	7.0	P 181
238	93	〃		4.2	1.9	0.80	6.2	P 182
239				3.7	1.8	0.90	5.1	S K 040
240				4.2	2.0	1.30	10	S K 040
241	91	〃		5.6	1.5	0.65	4.7	S K 041
242				2.0	1.8	0.50	1.9	表　土
243				3.3	1.6	0.60	3.0	〃
244				3.6	1.9	0.90	5.2	〃
245				3.9	2.1	0.60	5.1	〃

5．総　括

遺　構

押川遺跡は、丘陵の南側から南東部斜面にかけ東西約 250ｍ、南北約30ｍ～80ｍの約12,000㎡の範囲に広がる遺跡である。今回調査を行なったのは、標高95ｍから97ｍにかけての舌状に突出した部分で、遺跡の中央部にあたる。

検出した遺構は、住居跡・貯蔵穴・柱穴群・甕棺墓で、みな上部が削平されており、残存状態は良くない。時期は縄文時代晩期末から弥生時代中期初頭で、それ以降のものはみられず、限られた期間に営まれた遺跡である。

住居跡は８基検出した。この他に、調査区中央部から南東部にかけて多数の柱穴が集中している部分などに、さらに何基かの住居跡の存在が考えられるが、調査では明らかにできなかった。住居跡のうち、北東部の２基（ＳＢ087・088）は周囲の地山を整形し、斜面を水平にした痕跡が認められ注目される。住居跡は長さ3.5ｍ～4.2ｍとみな小型である。柱穴はＳＢ081が、やや規則的に配置している以外、みな不規則である。時期は、SB084が縄文時代晩期末～弥生時代前期、SB082・083・085が弥生時代前期、SB081・086～088が弥生時代前期末～中期初頭である。

貯蔵穴は約70基検出した。平面形は円形・楕円形・隅丸方形のものがみられる。長さ0.8ｍ～2.4ｍ、幅0.7ｍ～1.6ｍで、長さ1.5ｍ前後のものが多い。壁の立ち上がりが傾斜するものがほとんどで、断面が袋状になるものはＳＫ011・ＳＫ064のみである。遺物の多くは埋土からの出で、貯蔵穴の廃絶直後か、ある程度埋没したときに投げ込まれたり、流れ込んだものである。時期は出土土器から推定して、SK011・040・050・051・054・055・060が縄文時代晩期末、ＳＫ012・013・032～034・052・059・062・064が弥生時代前期、SK016・017・029・035・037・039・045・049・065・068が中期初頭、SKO18・020～023・026・027・036・038・041・047・053・057・061・063・066・067・070・071・073・075が弥生時代前期～中期初頭である。

甕棺墓は７基検出し、みな小児用である。甕棺墓以外の埋葬遺構は検出していない。墓域の西端を調査したことになり、墓域は調査区の北東部へ広がると考えられる。甕棺は複式棺と単棺がみられた。複式棺はみな覆口式である。ＳＪ002は複式棺であるが、やや埋葬法が異なる。他の２基が棺を斜めに埋置しているのに対し、SJ 002はほぼ水平に置いた下甕に上甕を斜めに覆せたものである。下甕の壺は口縁だけでなく胴部上半まで打ち欠いたか、あるいは欠失したものを用いていたと考えられる。単棺のものは完形の壺を用いており、棺は斜めに埋置しているが、傾斜角度が複式棺のＳＪ004・007に比べて小さい。またＳＪ006の棺に用いた壺は頸部を広くしてあり、甕棺用に作られたものである。時期はみな弥生時代でSJ 006が前期後葉で「伯玄式[1]」に相当する。SJ 002・SJ 005は前期末で、SJ 002上甕は「金海式[2]」に相当する。SJ 005は口縁部、肩部、底部の特徴に古い様相がみられる。SJ 001・003・004・007は中期初頭で「城ノ

越式[3]」に相当する。

時期別に遺構の広がりをみると、縄文時代晩期末の遺構は、調査区中央部から西側にかけて散在する。弥生時代前期になると南東部に住居跡と貯蔵穴、中央部に貯蔵穴が広がり、前期後葉に北東部に墓地が営まれ始める。前期末から中期初頭にかけて遺構は最も多く、南東部・中央部に継続して住居跡・貯蔵穴が営まれる一方、北東部へも広がってゆき、甕棺も引き続いて営まれている。中期初頭以降は遺構が全くなく、この丘陵の利用が急に終っている。

遺　物

土器は縄文時代晩期から弥生時代中期初頭までのものがある。甕が多く、壺は少ない。高杯は破片が3点みられるのみである。甕A・鉢B・壺底部AⅠは縄文時代晩期末で夜臼式に相当する。甕Aには甕AⅡや甕AⅢのように如意形口縁への発達を思わせるものがみられ、興味深い。特に⑤は器形が弥生前期の甕に非常に類似した形態をしている[4]。鉢Aはやや古い特徴をもっており、縄文晩期後葉に位置づけられる。甕B・甕底部B・壺A・壺B・壺底部AⅡ・壺底部Bは弥生時代前期のものである。甕BⅠ・壺A・壺BⅠ・壺底部AⅡは前期前半で、甕BⅠと壺BⅠは板付Ⅰ式の特徴をもっている。甕BⅡ・BⅢ・BⅣ・壺BⅡ、壺底部Bは板付Ⅱ式に相当し、甕BⅡ・壺BⅡは前期後半、甕BⅢ・BⅣ・甕Eは前期末に位置づけられる。甕BⅢに分類した㊼は外反する口縁部の内側に粘土を貼りつけ肥厚させており、甕Dへの発達が考えられる。興味深い土器である。壺BⅡに貝殻腹縁による羽状文を施文したものがみられ注目される。甕C・Dは中期初頭で「城ノ越式」に相当する。

石器は旧石器、磨製石器、打製石器がある。旧石器は主に調査区中央部から北東部の表土層や遺構内からかなりの量が出土したが、包含[5]層は確認できなかった。

磨製石器は弥生時代のものと考えられる。片刃石斧の多さが目立つ。磨製石斧のうち9本が今山産のものであった。

打製石器は石鏃の一部などに古い形態のものがみられる以外、みな縄文時代晩期末～弥生時代のものである。掻器は大型品がサヌカイト、小型品が黒曜石を素材としており、石材の選定がみられる。石鏃Fや石鏃Gの大型品は石銛としての円途が考えられる。

石器で特筆すべきことは、石皿・磨石・石鏃・掻器・石核の出土量の多さである。これらの石器はほとんどが縄文晩期末～弥生にかけてのもので、しかも大半は弥生時代のものと考えられる。これら多量の石器の出土は、農耕が行なわれる一方で、盛んに狩猟・漁業・採集が行なわれていたことを物語っており、狩猟・漁撈・採集に大きな比重をかけた、この地域の農耕社会のありかたがうかがえる。石包丁の出土が1点のみということや、貯蔵用の器である壺の少なさも、このことを裏づけている。

ま と め

最近、板付遺[6]跡や菜畑遺[7]跡の調査などで、縄文晩期に水田耕作が行なわれていたことが確実

となっている。押川遺跡では、遺跡の周囲の湿地帯を利用しての水田耕作が考えられるが、多量の石器の出土から、弥生時代においても生活を狩猟・漁撈・採集に頼っていたと考えられ、平野部とは違った様相がみられる。上場地区において、現在の段階で、縄文晩期、弥生時代の遺跡の調査例は少なく、女山遺跡や中野遺跡から住居跡や土壙が調査されている程度である。

現在、上場地区の農業基盤整備事業に伴う発掘調査が行なわれており、調査により新たな資料の増加することは確実である。今後の課題として、上場地区における農耕社会のあり方をとらえ、平野部と比較、研究してゆくことが必要であろう。

註

(1) 森編年による。高島編年の「II式」、橋口編年の「KIa」に相当する。

(2) 高島編年の「III式」、橋口編年の「KIc」に相当する。

(3) 高島編年の「IV式」、橋口編年の「KIIa」に相当する。

(4) この甕A IIIに類似したものは東宇木遺跡、萬麓遺跡から出土している。
佐賀県教育委員会「佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財確認調査報告書」佐賀県文化財調査報告書第37集　1977
佐賀県教育委員会「萬麓・寺ノ下遺跡」佐賀県文化財調査報告書第29集　1974

(5) 遺構の調査終了後、旧石器の包含層の有無を確かめるため、調査区北東部に1m×3mのトレンチを設定して地山の赤褐色土を掘り下げたが、包含層は確認できなかった。

(6) 福岡市教育委員会「板付遺跡調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第49集　1979

(7) 昭和55年度唐津市教委が発掘調査を行なった。

(8) 鏡山猛「4．唐津市女山遺跡」九州考古学10　1960

(9) 佐賀県教育委員会「牟田辻・中野遺跡」佐賀県文化財調査報告書第45集　1979

参考文献

○森貞次郎「弥生時代における細形銅剣の流入について」『日本民族と南方文化』1968
○高島忠平「甕棺の編年」『立岩』　1977
○橋口達也「甕棺の編年的研究」九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XXXI　1979

なお、旧石器については別府大学橘昌信助教授の御教示を得た。記して感謝したい。

II．座主遺跡・前田原遺跡

遺　跡　名：座主遺跡（略号ＺＡＳ）
遺跡所在地：東松浦郡北波多村大字山彦字座主

遺　跡　名：前田原遺跡（略号ＭＤＢ）
遺跡所在地：東松浦郡北波多村大字山彦字前田原

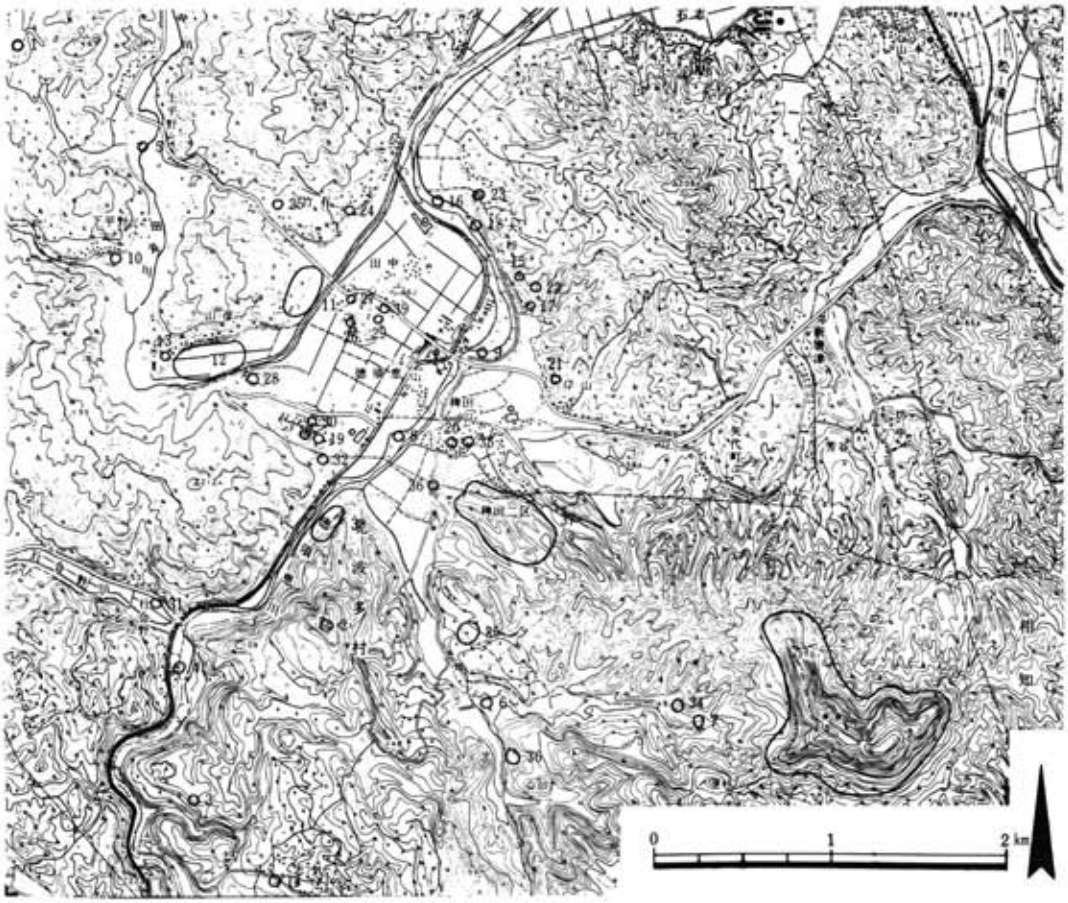


Fig41　座主遺跡・前田原遺跡周辺の地形と主な遺跡

1	下千田遺跡	旧石器・縄文時代	21	桜木遺跡	古墳時代
2	甲城遺跡	縄文時代	22	立山古墳群	円墳、竪穴式・横穴式石室
3	中の瀬遺跡	〃	23	庚申山古墳	
4	土元遺跡	〃	24	屋敷谷古墳	円墳、横穴式石室
5	倉谷遺跡	〃	25	山川窯跡	須恵器窯跡
6	山犬原遺跡	〃	26	親王塚古墳	円墳、竪穴式石室
7	稗田遺跡	〃	27	薬師堂古墳	円墳、横穴式石室
8	馬場の川遺跡	縄文・弥生時代	28	峰の辻古墳群	前方後円墳、円墳
9	徳須恵支石墓	弥生時代、甕棺墓群	29	島古墳群	円墳、横穴式石室
10	前田遺跡	縄文・弥生・平安時代	30	千草野古墳群	〃　〃
11	**座主遺跡**	縄文・弥生～室町時代	31	谷口遺跡	古墳～奈良時代
12	**前田原遺跡**	古墳～奈良時代	32	立園古墳群	円墳
13	桑原遺跡	弥生時代、甕棺墓	33	岸岳城跡	中世山城跡
14	志気遺跡	縄文・弥生・古墳・鎌倉時代	34	鈑洞甕窯跡群	初期唐津焼窯跡
15	立山遺跡	弥生・古墳時代	35	皿屋窯跡	〃
16	びわのくび遺跡	〃	36	帆柱窯跡	〃
17	正福寺遺跡	古墳時代、石棺墓	37	波多城跡	中世山城跡
18	溝添遺跡	弥生・古墳時代	38	佐々木城跡	〃
19	立園遺跡	弥生時代、甕棺墓群	39	島村城跡	中世館跡
20	帆柱遺跡	弥生・古墳時代			

1．発掘調査の経過

(1) 調査に至る経過

座主遺跡・前田原遺跡は、多量の弥生土器・青磁片の出土する遺跡として知られていた。昭和55年度上場地区農業基盤整備事業の工事施工区域に、座主遺跡・前田原遺跡が含まれることになり、工事に先立って佐賀県教育委員会文化課は、昭和54年度に遺跡の範囲、遺構の有無確認のための予備調査を実施した。その結果、工事区域内で、座主遺跡約14,000㎡、前田原遺跡約15,000㎡の遺跡の範囲を確認した。県教育委員会が県唐津農林事務所、北波多村建設課開発係と協議した結果、水路により掘削される部分、座主遺跡1,200㎡、前田原遺跡700㎡を発掘調査することになった。

調査は7月16日に始まり9月30日に終了した。梅雨期の水田部の調査で、しかも夏の長雨のため、調査区への侵水が多く、作業は困難であったが、北波多村住民課水道係と建設課開発係の協力により無事終了した。調査と併行して出土遺物の水洗・選別作業を唐津市鏡公民館で行ない、調査終了後、一部の選別作業、復元作業を県文化課神埼発掘事務所で行なった。遺物の復元、実測図作成は佐賀県文化財資料室で行なった。

(2) 調査の組織

調査主体　佐賀県教育委員会

調査担当

事務局	佐賀県教育庁文化課		
調査責任者	木下　巧	文化課文化財調査第二係係長	
調査員	堀川　義英	〃　〃	指導主事
（予備調査）	岩永　政博	〃　〃	〃
（担当）	森田　孝志	〃　〃	嘱託
調査補助	石崎　俊治	北波多村文化財保護審議委員 北波多村郷土史研究会	
	寺田　和正	文化課文化財調査第二係調査準補助員	

発掘作業員

小島シゲノ・森田ヒサノ・石崎テイコ・川添ミヨコ・川添ハツミ・川添ナヲエ・川添　春義・川添タミ子・脇山ミヨ子・脇山　知彦・佐々木カネヨ・原口　絹江・松尾千代喜・井手マツ子・三好ハツエ・山岸キク子

協力　佐賀県唐津農林事務所・北波多村教育委員会・同建設課開発係・同住民課水道係・北波多村郷土史研究会、㈱松尾建設

(3) 調査日誌

7月16日　本日より調査を開始する。ユンボにより座主遺跡・前田原遺跡の表土剥ぎを行なう。
7月18日　座主遺跡1区・2区・3区の遺構検出を始める。
7月18日　2区の遺構検出終了。柱穴・土壙を約80ヶ所確認、遺構を東側より掘り始める。
8月1日　2区北側の遺構掘り下げを終了。青磁・土師器が出土、南側の遺構掘り下げを始める。
8月5日　2区、SK002・003土壙の掘り下げ、須恵器杯が出土。
8月6日　SK002・003土壙の写真撮影。4区の発掘を開始する。
8月8日　4区より墨書土器、木製高杯が出土。
8月11日　6区の遺構検出を始める。
8月19日～23日　2区の遺構実測
8月26日　前田原遺跡の遺構検出を始める。調査区北側には全く遺構がない。
8月28日～9月6日　肥前町の予備調査のため発掘調査を中断する。
9月9日　前田原遺跡調査区南側から遺構を検出。
9月13日　前田原遺跡、遺構の掘り下げ
9月17日　前田原遺跡遺構実測を始める。座主遺跡5・6区東側の遺物包含層を掘り始める。
9月18日　前田原遺跡写真撮影。5・6区の掘り下げ。
9月25日　5・6区の掘り下げ終了。
9月26日　4区土層図作成、写真撮影
9月30日　座主遺跡全景写真撮影。器材かたづけ、本日で座主遺跡、前田原遺跡の調査を終了。

2．遺跡の概要

座主遺跡・前田原遺跡は東松浦郡北波多村大字山彦に所在する。北波多村は佐賀県の北西、東松浦郡の南西部に位置する。村は南北に長く、北側が唐津市、東側が相知町、西側および南側が伊万里市と接している。北に遠見岳・水の元山、東に岸岳、西に日岳と周囲をほとんど山に囲まれており、平野は少い。北側に徳須恵盆地があり、この盆地の中央を松浦川の支流で伊万里に発する徳須恵川が流れている。

遺跡は徳須恵川流域に多く存在し、特に徳須恵盆地周辺に密集している。

旧石器時代の遺跡は、ナイフ形石器や細石器の採集された下千田遺跡が知られているのみである。

縄文時代の遺跡は、前田遺跡、稗田遺跡などが山麓や丘陵部に確認されており、石鏃・石匙・石斧・土器片が採集されている。村の北側の徳須恵川流域や田中川流域には河川の侵食による岩陰が多く、ここに岩陰遺跡が存在する可能性が強い。

弥生時代になると遺跡の数も増加し、支石墓を伴う甕棺墓地で、狭鋒銅鉾が発見された徳須恵遺跡[1]、多数の土器・石器が出土した馬場川遺跡、弥生後期の甕棺が出土した桑原遺跡がある。

古墳時代では、内部主体に竪穴式石室をもち、白銅鏡・鉄刀・鉄鏃が出土した親王塚古墳、前方後円墳を含む峯の辻古墳群など多くの古墳がみられるが、その大半は、ミカン畑や宅地の造成によって破壊されている。須恵器の窯跡も1ヶ所確認されている。

歴史時代の遺跡は、鎌倉時代・室町時代のものが多く、山城跡・館跡・石塔婆・窯跡がある。山城跡のうち松浦党波多氏の居城であった岸岳城は、石垣・曲輪・堀切り・井戸が残っており県内でも最も残存状態の良好な山城である。館跡も多く、波多氏関係の武士の館跡と推定され

る場所が各所にある。石塔婆は五輪塔・宝篋印塔などが各所に散在する。特に波多氏の菩提寺であった瑞巌寺跡には多数密集している。また、この地は唐津焼の創始地であり、室町時代に創始されたと考えられる飯洞甕窯跡や帆柱窯跡は唐津焼の窯跡として最も築窯年代のさかのぼるものである。これらの窯跡は昭和31年に発掘調査が行なわれ[2]、出土した陶器は岸岳系古唐津として唐津焼の研究に重要な資料となっている。

座主遺跡・前田原遺跡は徳須恵盆地の東側に位置する。鎌倉岳の東側山麓から水田部にかけてが座主遺跡で、北に竹有古墳・山川窯跡、東に親王塚古墳がある。鎌倉岳南側の水田部が前田原遺跡で西に桑原遺跡がある。

(註)

(1) 吉村茂三郎「徳須恵の甕棺地帯について」佐賀県史跡名勝天然記念物調査報告書第四輯 1940

(2) 佐賀県教育委員会「岸岳古窯の発掘記」新郷土昭和31年5月号 1956

参考文献

○北波多村史編纂委員会『北波多村史』 1963

○佐賀県教育委員会『佐賀県の遺跡』

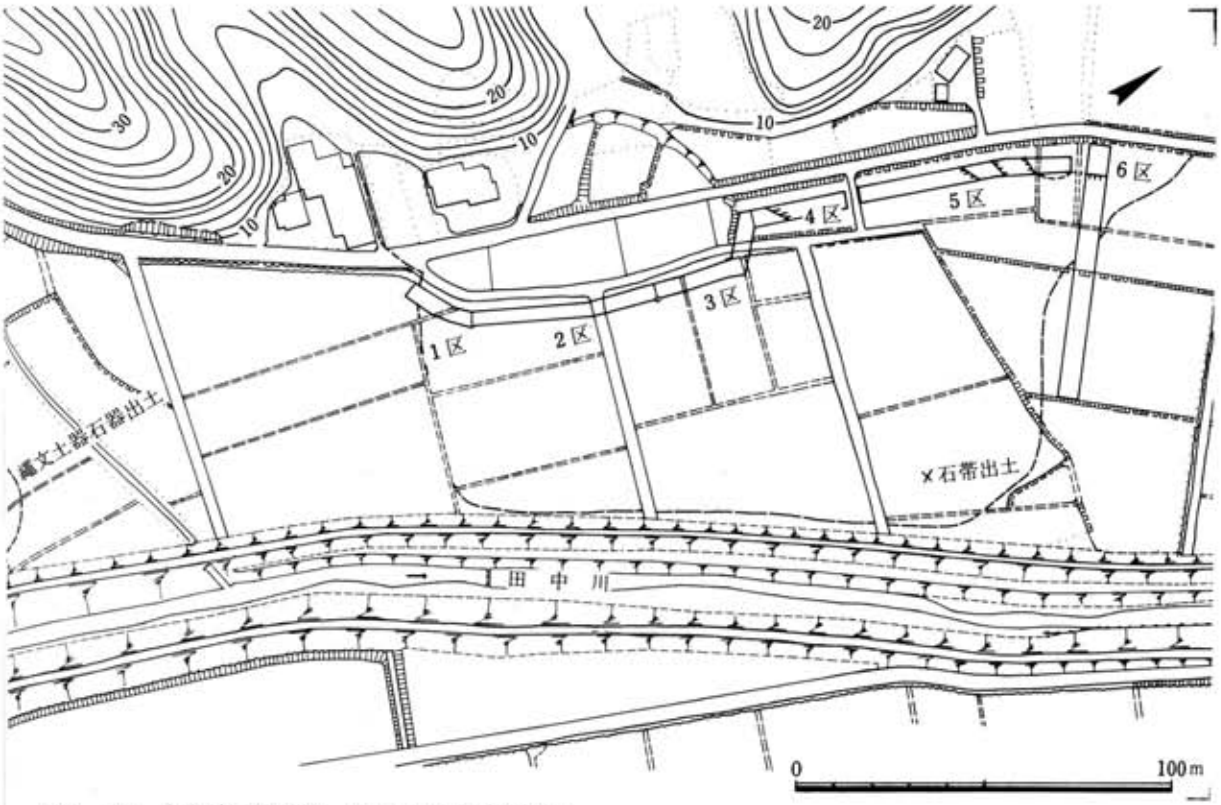


Fig. 42 座主遺跡地形図（点線は遺跡の予想範囲）

3．遺　構

座主遺跡は、南北に走る水路予定地を、南から１区、２区、３区、４区、５区とし、東西に走る水路予定地を６区とした。１区および３区からは遺構・遺物は全く検出されず、２区から奈良時代の土壙と古墳時代～室町時代の柱穴群・溝状遺構を検出した。４区、５区、６区からは弥生時代・古墳時代・奈良時代の遺物包含層が確認された。６区の西端からは古墳時代・鎌倉時代の柱穴群を検出した。前田原遺跡からは、南北に走る水路予定地の南側から古墳時代の柱穴群を検出した。また調査区域外で、工事によりユンボが表土を剝いだ際に、座主遺跡４区東側から石帯、１区南側から縄文晩期土器と多数の石器が出土した。

(1)　座主遺跡２区の遺構

座主遺跡２区から検出された遺構は、土壙・溝状遺構・柱穴である。遺構は、西側の山麓部、および東側の水田部へと広がっている。

土壙は３基検出された。ＳＫ002土壙は２区のほぼ中央に位置する。平面形は楕円形で、主軸をほぼ東西にとる。上部はほとんど削平され、残存部で長さ1.5ｍ、幅0.7ｍ、深さ0.1ｍで、床面はほぼ水平である。埋土は暗灰色粘質土で、遺物は床面直上から須恵器杯が、口縁を上にして出土した。ＳＫ003土壙は２区のほぼ中央部、ＳＫ002土壙の東側に位置する。土壙の東側は調査区域外のため明らかでないが平面形は楕円形になるであろう。主軸をほ

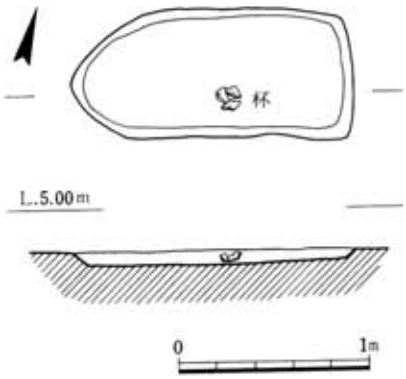


Fig. 43　２区SK002土壙実測図

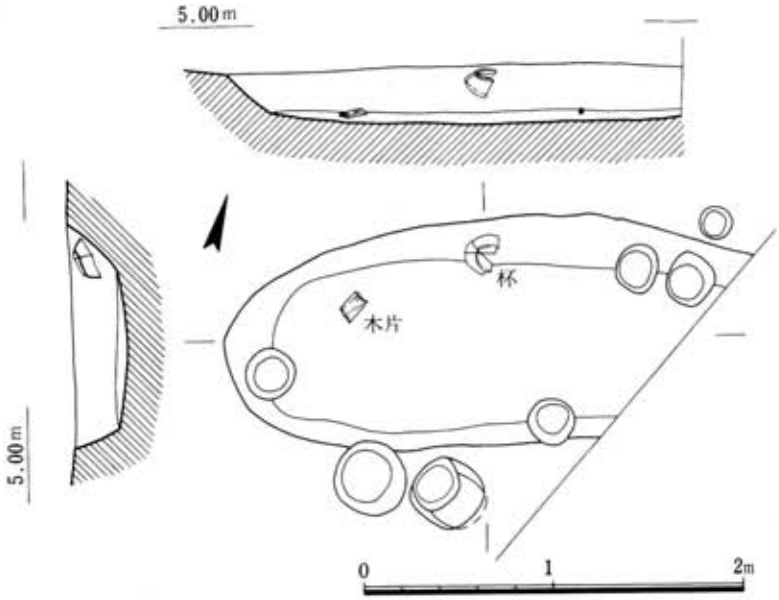


Fig. 44　２区SK003土壙実測図

ぼ東西にとる。上部を削平されており、東側は柱穴が切っている。残存部で、長さ3.45m、幅1.2m、深さ0.35mで、壁は傾斜しており床面はほぼ水平である。埋土は暗灰色粘質土で、遺物は床面北西隅から木片、北側肩部から須恵器杯が口縁部を下にして出土した。 ＳＫ002土壙とＳＫ003土壙は土壙墓の可能性がある。ＳＫ004土壙は、ＳＫ002土壙とＳＫ003土壙の間に位置する。平面形は円形に近い楕円形で、長さ1.4m、幅1.2m、深さ0.1mである。埋土は暗灰色粘質土で遺物は出土していない。

溝状遺構は１基（ＳＤ001)で、２区中央部のやや北側にあり、ほぼ東西に走る。東側を柱穴が切っている。上部は削平され、幅0.6～0.4m、深さ0.05～0.2mで、断面は逆台形である。埋土は暗灰色土で、遺物は埋土から土器の細片が出土したのみである。

柱穴は約150ヶ所確認された。調査区の範囲が狭いため、柱穴の並び、建物の配列は明らかにできない。柱根の残っているＰ－23、Ｐ－26、Ｐ－25など１つの建物になる可能性があり、またＰ－３、Ｐ－８、Ｐ－17、Ｐ－18は、ほぼ一直線に並んでおり、柵列の可能性もある。柱穴の平面形は、ほとんどが円形であるが、隅丸方形のものもみられる。直径は15cmから40cmのものがあるが、直径30cm前後のものが多い。柱穴内は二段掘りになっているものや、柱根の残っているもの、柱穴底に、拳大～20cm程の礫を数個置き礎石としているものがあった。柱根には側面を六面に面取りしているものがみられる。埋土は暗褐色のものと暗灰色・灰黒色のものがあり、前者からは古墳時代の土師器が出土し、後者からは、奈良時代～室町時代の須恵器・糸切底をもつ土師器小皿・青磁・白磁片が出土した。

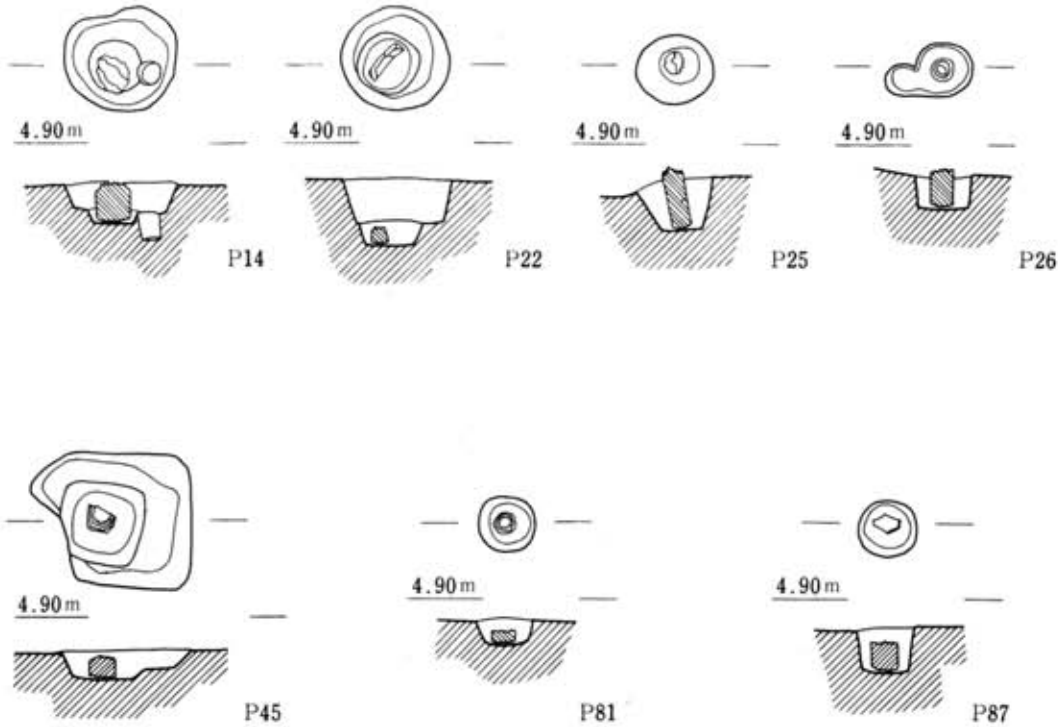


Fig. 45　２区柱根のある柱穴実測図

(2) 座主遺跡6区の遺構

座主遺跡6区から検出された遺構は柱穴で、約50ヶ所確認された。調査区の西端が、丘陵の先端部にあたり、その部分に柱穴が集中している。東側は低湿地になっており遺構はなく、遺構は西側へ広がっている。

柱穴は、2区の柱穴と同じく、埋土が暗褐色のものと、黒灰色のものがあり、前者は古墳時代の土師器を含み西側に多く、後者は糸切底の土師器小皿や青磁片を含み東側に多い、この黒灰色の埋土の柱穴は、後述する包含層の上面で検出されており、包含層の堆積後に掘りこまれたものである。6区の南東側は低湿地で、ここに古墳時代の土師器を含む暗褐色の遺物包含層が堆積していた(PL15)。この包含層は5区北側の遺物包含層につながっている。

(3) 座主遺跡4区・5区の包含層

座主遺跡4区から5区にかけて、狭い谷状の低湿地があり(Fig 42) 、ここに砂質土や有機物を多量に含んだ褐色土が堆積していた。堆積土は厚さ1m～1.5m程で、大きく8層に分けられる。(Fig 47) このうち第3層と第4層に遺物が包含されていた。

第3層は灰色の粘質の強い土で、厚さ10cm～15cmである。主に奈良時代の須恵器を包含している。須恵器は皿・杯・鉢・甕があり、このうち皿と杯の底部に墨書・ヘラ文字のあるものがみられた。

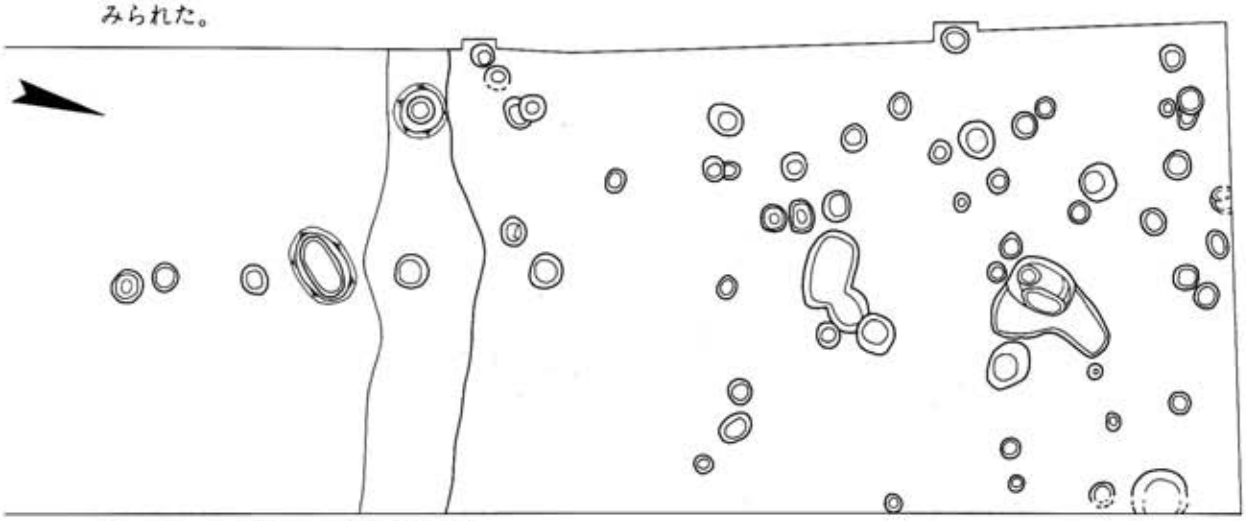


Fig. 46 座主遺跡6区遺構配置図

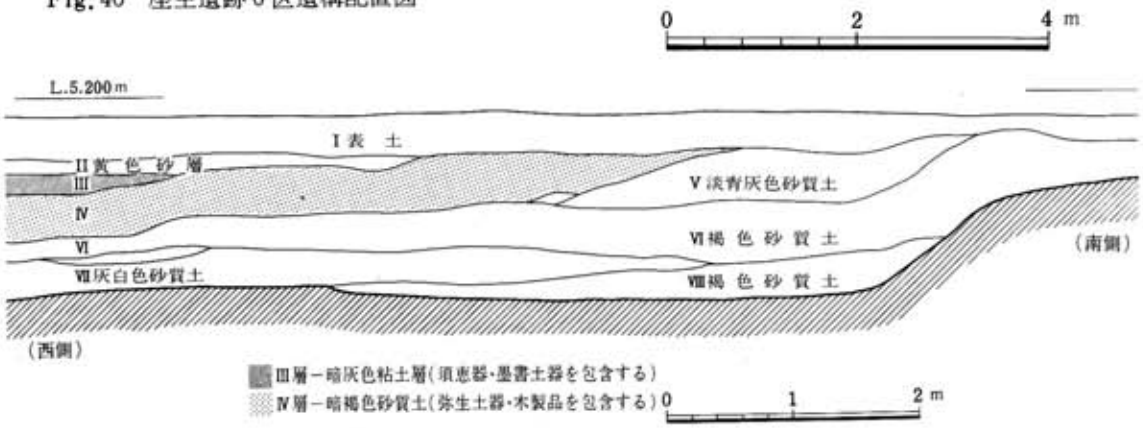


Fig. 47 座主遺跡4区東壁土層図

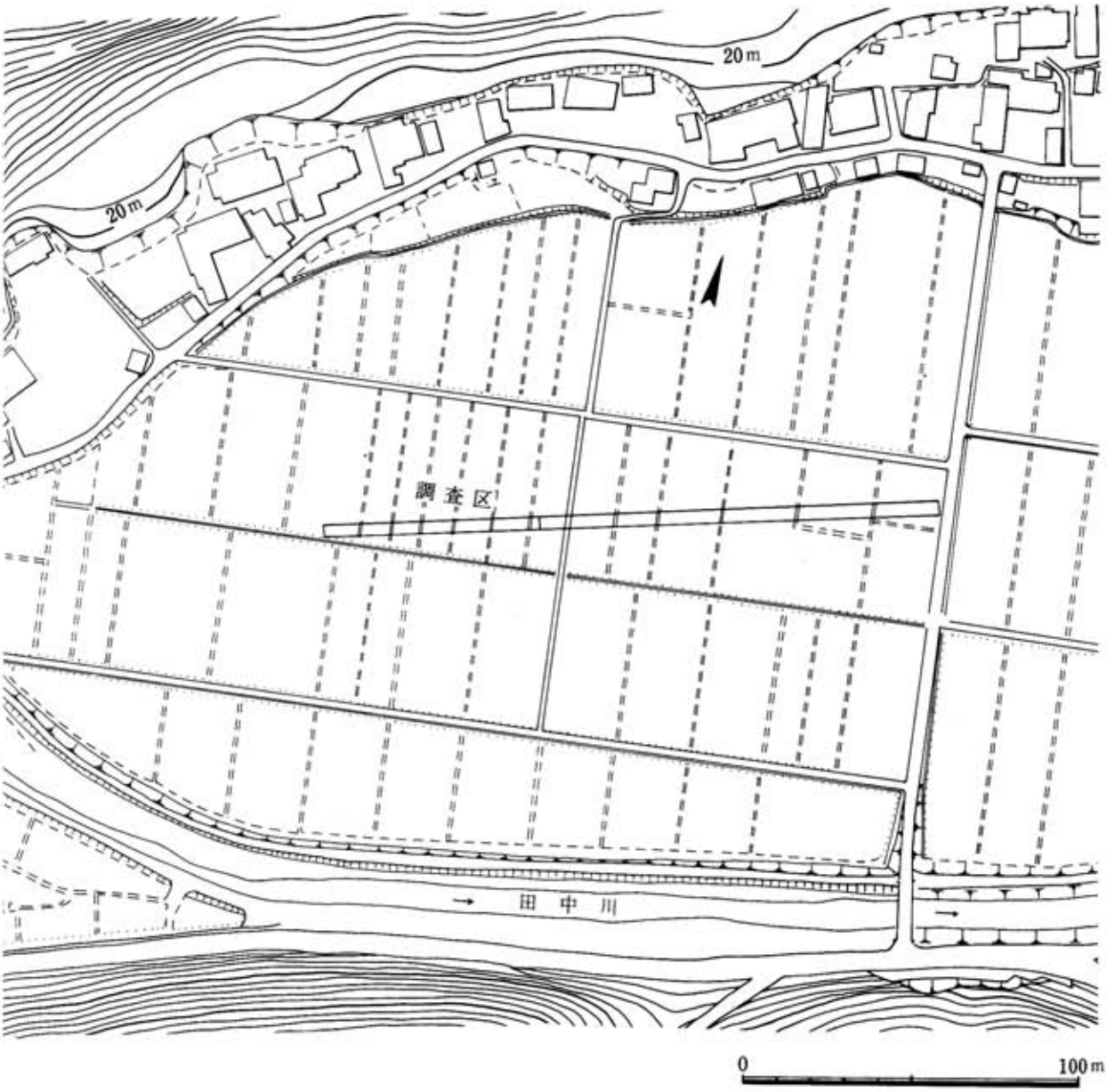


Fig. 48　前田原遺跡地形図

第4層は木の葉、枝、種子を多量に含んだ褐色の砂質土で、厚さ約40cmである。この層には多量の弥生中期～後期の土器と石器、木製品、杭が包含されていた。

5区の北側にも、6区東側の包含層につながる暗褐色の包含層があり、土師器壺・器台が出土した。

(4)　前田原遺跡の遺構

前田原遺跡から検出された遺構は、柱穴と土壙である。遺構は調査区西側から検出され、みな上部を削平されており、残存状態は悪い。土壙は平面が不定形で、遺物は土師器小片が出土したのみで性格は明らかでない。柱穴は埋土が暗褐色土で、遺物は少なく、須恵器杯。土師器小片が出土したのみである。他に表土層から須恵器杯と勾玉が1個出土した。

4．遺　物

A　座主遺跡出土の遺物

出土した遺物は、土器、陶磁器、木製品、石器などである。土器は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器があり、陶磁器は輸入品で青磁・白磁、褐釉陶器などがある。

(1)　土　器

a．縄文土器（Fig 49）

1区南側の調査区域外から数点出土した。①は、晩期初頭の鉢である。肩部が屈曲する。色調は黒褐色で、内外面とも、よく研磨している。

b．弥生土器（Fig 49～52、PL18）

②③⑩は1区南側から出土したもので、他はすべて4区第4層から出土した。器形は甕・壺・鉢・高杯・器台がある。個々の土器については一覧表にした。

甕（Fig 49・50・52、PL18）

甕は、A・B・C・Dに分類できる。甕A(③)は口縁部がゆるく外反し、口縁端部に刻目を施したもので、口縁部下に段がつく。甕B(⑪)は口縁部が、断面三角形のもので、口縁部上面は、ほぼ水平である。

甕Cは、CⅠ・CⅡ・CⅢに細分でき、CⅠ(⑫⑱)は口縁部が、直角に外反し逆L字状になるもの。CⅡ(⑫～⑰⑲)は口縁部の内側に粘土を貼りつけて、T字状にしたもので、口縁部外面がやや垂れ下がるものもある。CⅠ・CⅡは肩部があまり張らず、口縁部下に断面三角形の貼付突帯をめぐらすものと突帯をもたないものがみられる。CⅢ(㉚)は大型の甕で口縁部はT字状で、胴が張り、断面台形の貼付突帯をめぐらす。器面はCⅠ・CⅡが外面にハケ目調整、CⅢはナデ調整が行なわれている。甕Dは、口縁部がく字状に外反するもので、口縁部内側に薄い粘土を貼りつけ補強しており、端部は丸い。器面は外面に、荒いハケ目調整が行なわれている。甕底部は、厚い上げ底で裾が開くもの(㉓)と、平底もしくはゆるい上げ底で、そのまま胴部へ立ち上がるもの(㉒㉔～㉗㉙)、薄手で大きな平底のもの(㉘)がみられる。器面はハケ目調整が行なわれている。

壺（Fig 49、PL18）

壺は、A・B・C・Dに分類できる。壺A(②)は大型の壺で、肩部のみの破片であり、1条の浅い沈線をめぐらしている。外面にヘラ磨きをしており、内面に指頭圧痕が顕著に残っている。壺B(④)は口縁部が外反し、口縁端部近くがわずかに肥厚する。口縁端部は凹んでいる。口縁部から頸部の外面に、縦方向に暗文がみられる。壺C(⑥⑦)は鋤形口縁をもつもので、肩が張り、1条の断面三角形の貼付突帯をめぐらしている。底部はわずかに上げ底になる。器面はヘラ磨きしている。壺D(⑧⑨⑩)は口縁部が外反し、端部近くで内湾する袋状口縁をもつもので、口縁部外側に稜がつく。口縁端部はやや丸味をおびる。⑩は頸部と肩部との境に断面三角形の貼付突帯をめぐらしている。壺Eには口縁がほぼ直立するもの(㉟)、やや外反するもの(㊱㊲)、強く外反するもの(㉜)がある。口縁端部がわずかにくぼむ。頸部と肩部との境に断面三角形の貼付突帯をめぐらすもの(㊳)や貼付突帯に格子状の文様を施したもの(㉝)もみられる。器面はハケ目調整を行なっている。

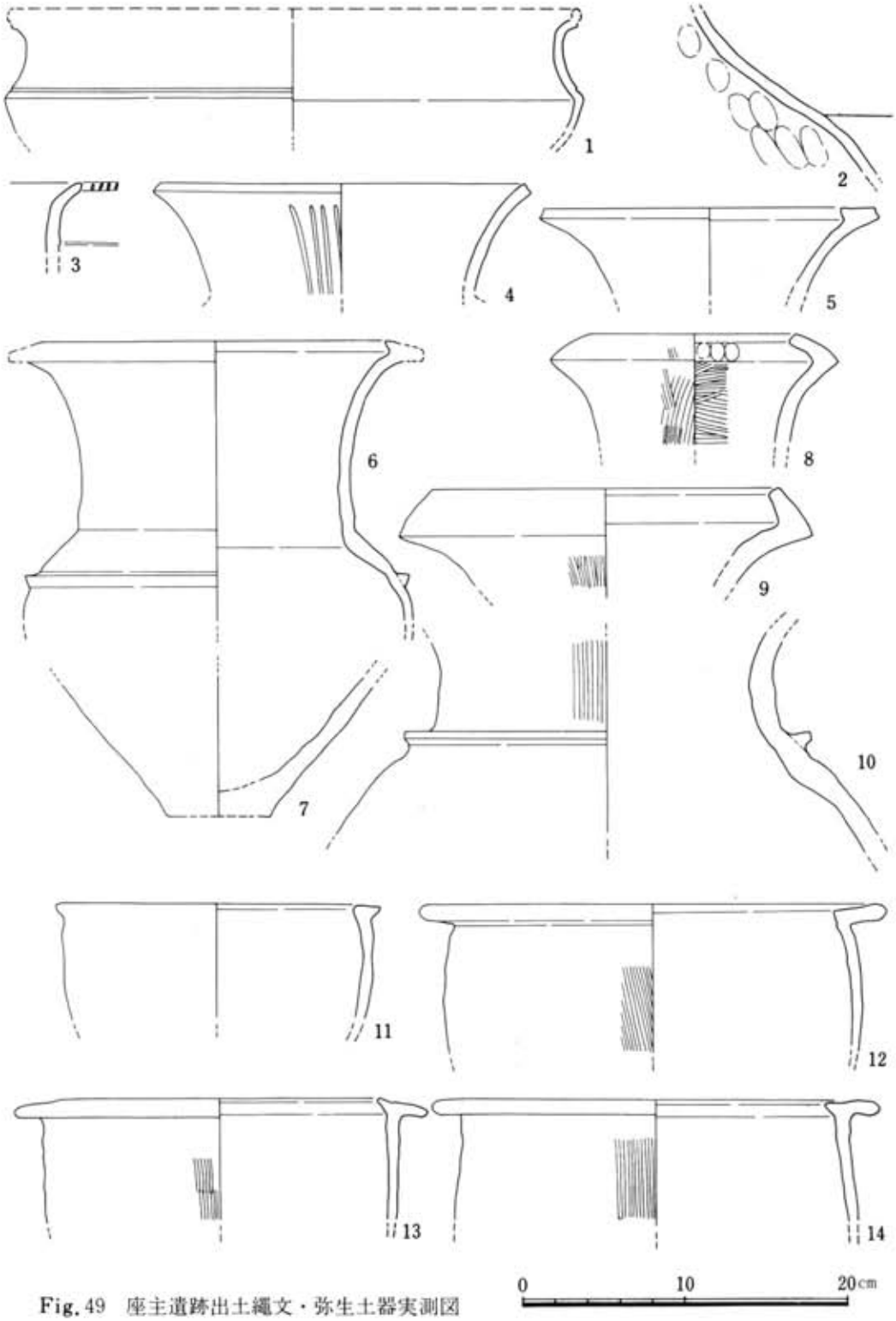


Fig. 49　座主遺跡出土縄文・弥生土器実測図

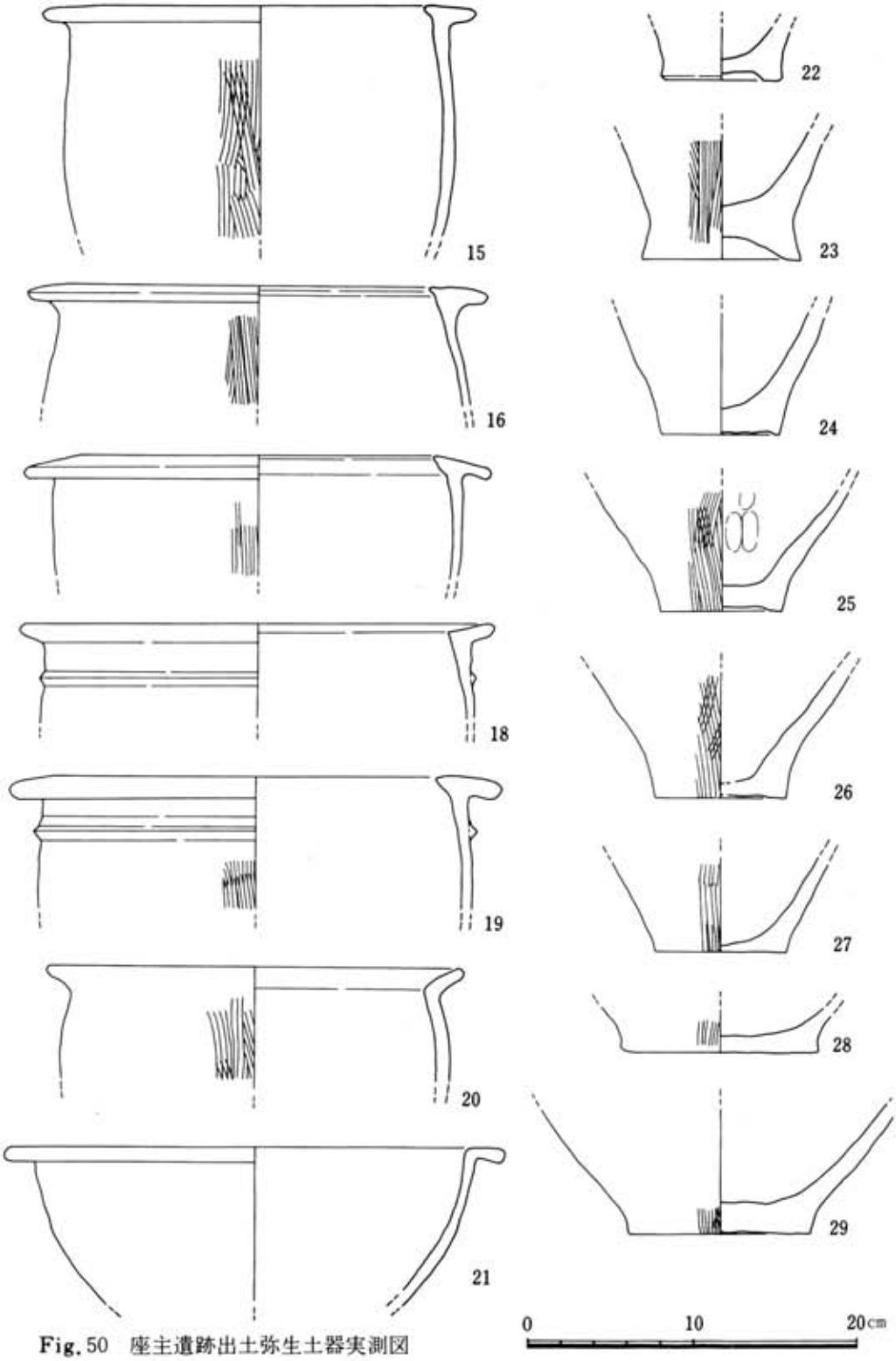


Fig. 50　座主遺跡出土弥生土器実測図

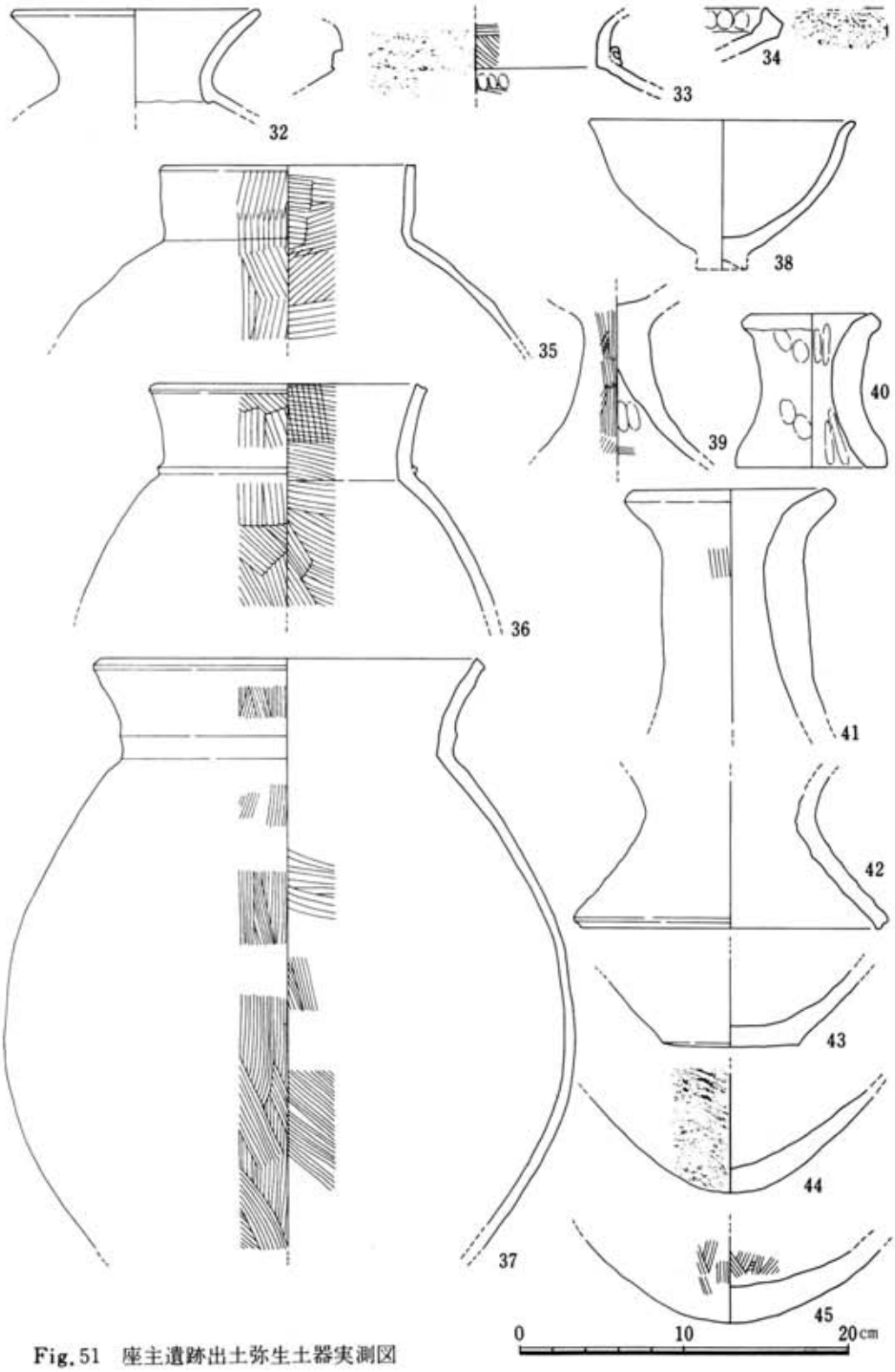


Fig. 51　座主遺跡出土弥生土器実測図

鉢（Fig 50・51）

鉢は鉢A・鉢Bに分類できる。鉢Aは逆L字状に外反する口縁をもつもので、口縁端部は厚い。鉢Bは口縁部がゆるく外反し、小さな上げ底状の底部がつくものである。

高　杯（Fig 51）

㉞は口縁部で、内面に粘土を貼りつけ肥厚させ、外面に櫛目波状文を施している。㊴は脚部で、裾が強く開く。器面はハケ目調整が行なわれている。

器　台（Fig 51　PL18）

㊵㊶は厚手で、筒状の体部から、口縁部・裾部がゆるく開く。㊷は薄手で、鼓形で体部が強くくびれる。

底　部（Fig 51）

壺・甕の底部で、㊸は丸味をおびた平底、㊹㊺は丸底である。㊹は叩きの後ハケ目調整が、㊺はハケ目調整が行なわれている。

C．土師器（Fig 53　PL18）

土師器は主に、2区、6区、および5区・6区の包含層から出土した。器形は、壺・甕・小型丸底壺・高杯・小皿・杯がある。

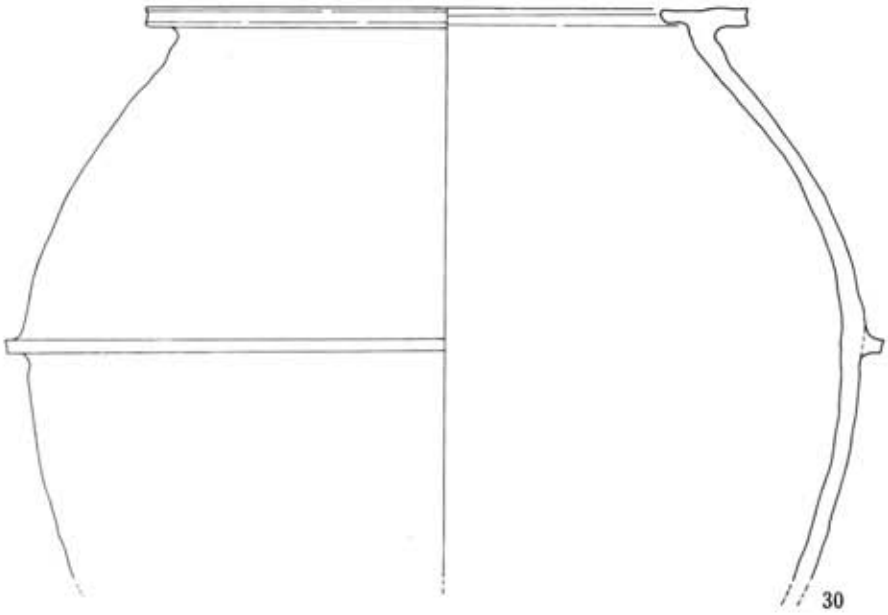


Fig. 52　座主遺跡出土弥生土器・木製品実測図　0　10　20cm

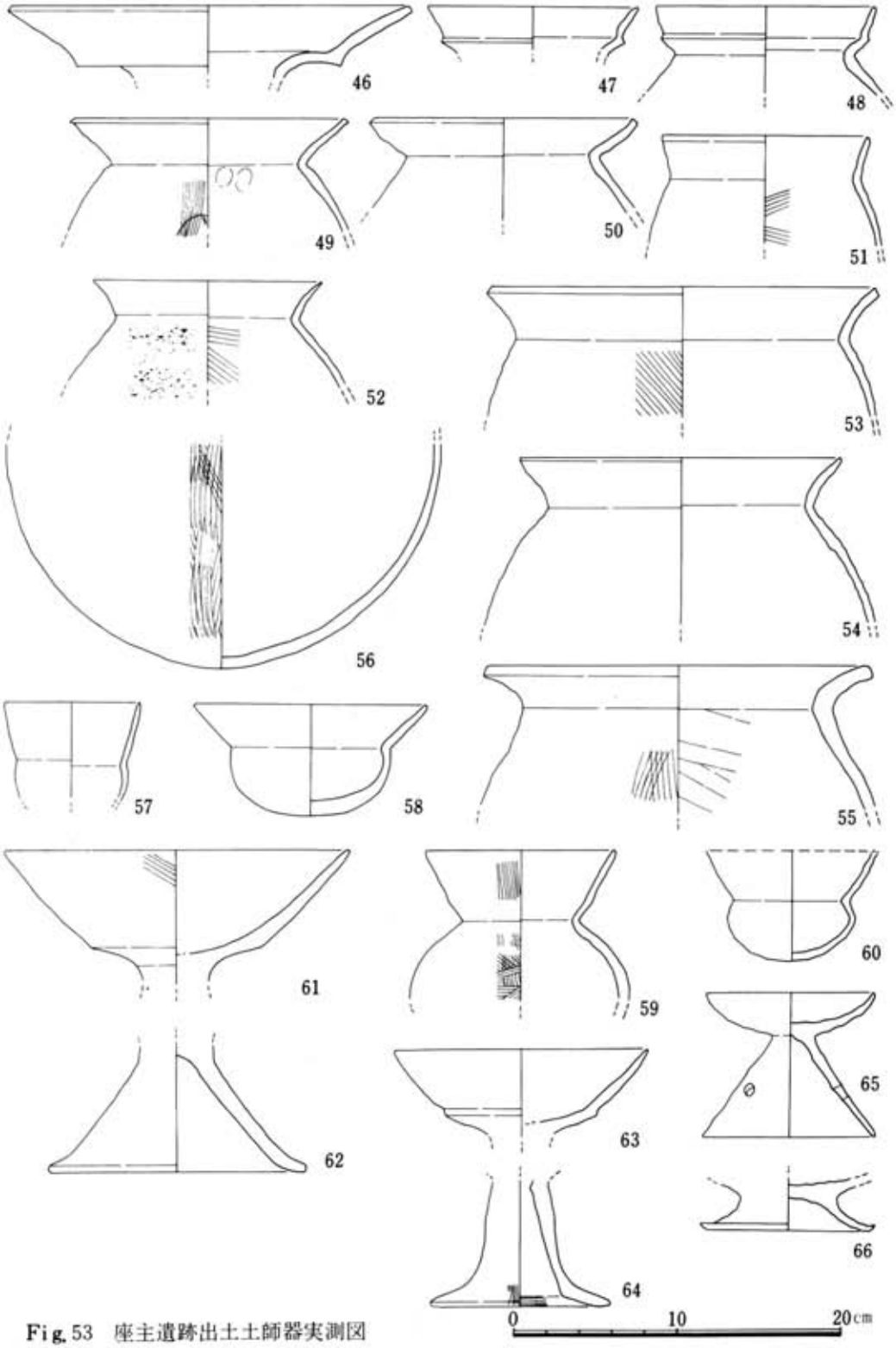


Fig. 53　座主遺跡出土土師器実測図

壺（Fig 53、PL18）

二重口縁をもつ壺で、㊻は口縁部が強く外反し、頸部が強くくびれ筒状になる。㊼㊽は頸部のくびれはゆるく、そのまま肩部へ移る。器面はヨコナデ調整が行なわれている。

甕（Fig 53）

口縁部が外反し、これに卵形の胴部がつく。㊾㊿は口縁が内湾しつつ外反し、端部が肥厚する。(51)(52)(54)は口縁端部がやや尖る。器面は外面がハケ目、叩き調整、内面はヘラケズリ、ナデ・ハケ目調整が行なわれている。

小型丸底壺（Fig 53　PL18）

口縁部が内湾ぎみに外反する。小型で胴部径が口縁部径より小さいものと、やや大型で胴部径が口縁部径を上まわるものがある。器面はハケ目調整・ヨコナデ・ナデ調整が行なわれている。

高　杯（Fig 53）

杯部は屈曲し、稜をもち、口縁端部は丸い。脚部は脚裾近くでく字状に屈曲する。器面はナデ調整。

器　台（Fig 53　PL18）

杯部は中ふくらみで内湾ぎみに外反する。脚部はくびれ部からわずかに内湾ぎみに開き、裾端部は尖る。脚部の３ヶ所に穿孔がある。

小　皿（Fig 56　PL21）

すべて糸切り底で、(133)(134)は底部が厚く、(136)は上げ底である。口径8.6cm～12.0cmで器面はヨコナデ調整。

杯（Fig56　PL21）

平底で、口縁はやや内湾しながら開く。口径13.2cm、器面はヨコナデ調整。

ｄ．須恵器（Fig 54　PL19）

須恵器は２区、４区、５区の包含層から出土した。蓋・皿・杯・平瓶・鉢・甕・鼎・高杯がある。皿・杯の底部に墨書ヘラ文字のあるものがみられた。

蓋

(67)～(75)は蓋Ａ・蓋Ｂ・蓋Ｃに分類できる。蓋Ａは天井部と口縁部の境に段がつくもので、口縁部がまっすぐ下にのび、口縁端部がわずかに外側に開く。蓋Ｂは低い天井部をもち、口縁部の内側にかえりがつく。宝珠様のつまみがつくが欠失している。蓋Ｃは低い天井部に先端が下方に屈曲する短い口縁部がつき、口縁端部が丸い。天井部に宝珠様のつまみがつく。蓋Ｃには天井部が丸味をもち、口縁部近くでくびれるもの(68)～(71)(74)と天井部と口縁部が水平に近いもの(72)(73)がみられる。蓋Ｄは天井部がほぼ水平で、口縁部はほぼ直下へ直角にのびる。天井部に丸味をおびたつまみがつく。蓋の器面はヨコナデ・ナデ調整。

皿

(76)～(81)・(98)・(103)は、ほぼ水平な底部にゆるく外反する口縁部がつき、口縁端部は丸い。口径14cm程のものと16cm～18cmの大型のものがみられる。器面はヨコナデ調整。

杯

(82)～(90)・(100)～(102)・(104)・(106)は杯Ａ・杯Ｂ・杯Ｃ・杯Ｄに分類でできる。杯Ａは高台をもたないもので、底部はほぼ平らで、これにゆるく外反する口縁部がつき、口縁端部は尖り気味である。杯Ｂは高台をもち、口縁部がゆるく外反し、端部は尖り気味で丸い。高台は小さく、底部と体部の境より内側につき、断面は中央がややくぼんだ四角形である。杯Ｃは大型で裾の広がる高高をもつ。口縁部は強く外反し、端部は丸い。高台は底部と体部の境につく。杯Ｄは長め

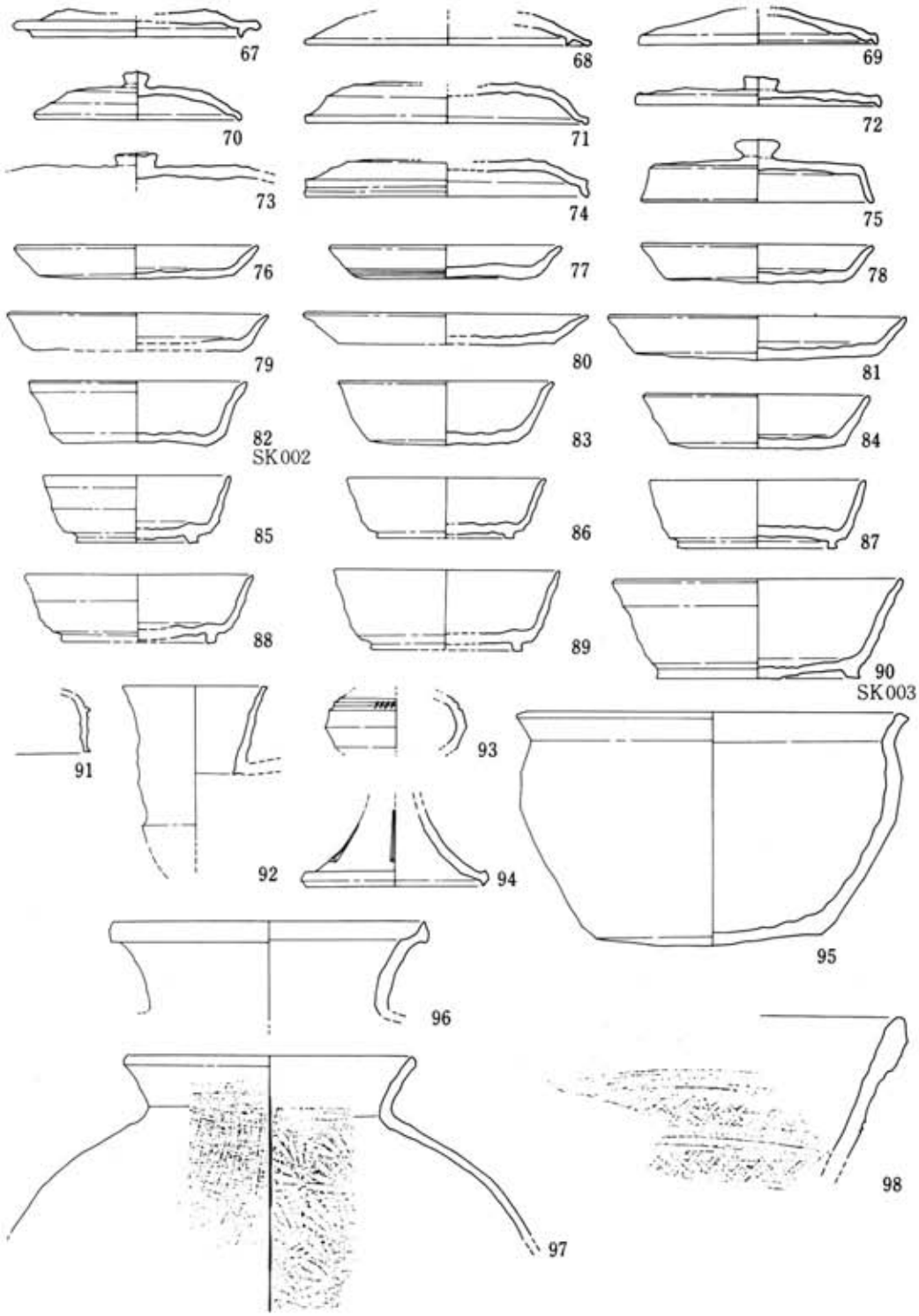


Fig 54　座主遺跡出土須恵器実測図

の高台がつくもので小破片のため全体の形は不明である。杯の器面はヨコナデ・ナデ調整。

平瓶(㊷)は口縁部と体部の一部分で、口縁部がゆるく外反し、端部がわずかに肥厚し、中央がくぼむ。体部は稜がつく。器面はヨコナデ調整。

甕(㊻～㊽)は口縁部から肩部にかけての破片で、内傾する頸部に外反する口縁部がつき、端部が肥厚する。器面はヨコナデ調整で、㊼は胴部の内外面に叩きが残る。

瓮(㊸)は体部の一部分で、肩部に沈線とヘラによる刺突文様が施されている。器面はヘラケズリとヨコナデ調整。

高杯(㊹)は脚の一部分で、裾が強く開き、裾端部が肥厚し尖る。四方透しがはいる。器面はヨコナデ調整。

e．墨書・ヘラ文字のある須恵器（Fig 55　PL20）

先述の須恵器のうち、皿および杯の底部外面に墨書のあるもの15点、杯の体部にヘラ文字のあるもの1点がみられる。これらはみな座主遺跡4区・5区の包含層(第3層)からの出土である。墨書は「廣」、「大」、「坂本」、「六」が読みとれ、⑩⑨、⑩⑥は不明である。⑩⑦は文字よりも絵か記号の可能性がある。字体は最後を強くはね上げる特徴がある。⑩⑧は杯の体部にヘラで「大」の文字がみられる。

f．土師質土器（Fig 56）

⑫⑥は羽釜である。肩部のみの破片で、半円形の紐の部分になる。色調は暗褐色で外面に煤が付着している。座主遺跡2区表土層出土。

(2)陶磁器（Fig 55　PL21）

陶磁器は座主遺跡2区・6区から出土した。白磁・青磁・青白磁・褐釉陶器・黒釉陶器がある。白磁は碗で、青磁には碗A・碗B・碗C・碗D・碗E・皿がある、青白磁には合子がある。褐釉は四耳壺、黒釉は天目茶碗でどちらも小破片であり図示しなかった。

青磁碗A(⑫④)　越州窯系青磁で、幅の広い蛇の目高台を削り出したものである。高台は畳付部の内側が上がっており、高台内側は盛り上がって厚くなっている。釉は黄色味をおびた緑色で、内外面全面に施釉している。

青磁碗B(⑫⑤)　高麗青磁で、幅の狭い小さな断面四角形の高台がつく。内外面に白土の象嵌がある。色調は灰緑色で、釉は底部を除き施釉している。

青磁碗C(⑪⑧～⑫⑩)　龍泉窯系の青磁である。厚手の底部にやや丸味をおびた高台を削り出している。体部は内湾しつつ立ち上がる。⑪⑧・⑪⑨は内面に草花文がみられ、⑫⑩は2本の沈線により内面を分割している。色調は深緑色で、釉は薄く、体部のみ施釉している.

青磁碗D(⑫①～⑫③)　同安窯系の青磁である。厚手の底部に、角ばった高台を削り出している。内面の見込みと体部との境に段がつく。内面に櫛状の施文具による花文がみられる。⑫②は外面に細い櫛目がある。また図示してないが、体部外面にヘラ状施文具による沈線を入れたものも

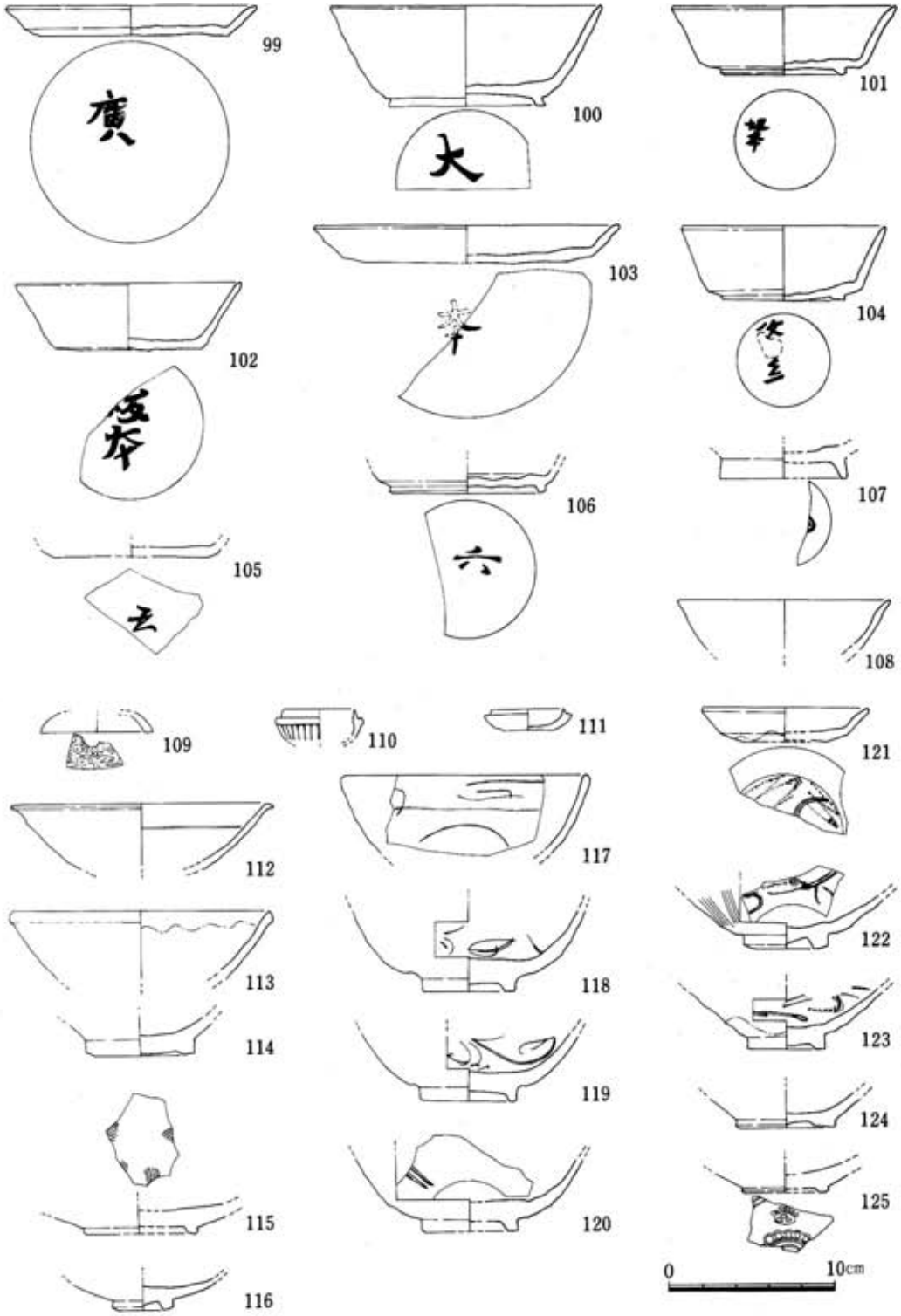


Fig 55　座主遺跡出土須恵器・磁器実測図

みられる。釉は薄く、体部のみに施釉している。

青磁碗E(⑰)　内湾しつつ外反する体部をもち、口縁端部が丸い。外面の口縁部下に乱れた雷文がみられる。色調は黄緑色で、釉は厚い。

青磁皿(⑫)　同安窯系の青磁で、体部中央で屈曲する。内面の体部と見込みの境に段がつく。内面にヘラによる片彫りと櫛によるジグザグ文様がみられる。釉は外面体部上半まで施釉している。

白磁碗(⑫～⑯)　口縁部が玉縁状のものとゆるく外反するものがある。底部は厚手で、低い高台がつく。⑮は内面に櫛による文様がみられる。釉は灰白色で、⑯は空色に近い。底部近くまで施釉しているもの(⑫⑯)と体部上半までしか施釉していないもの(⑬～⑮)がみられる。

青白磁合子(⑨～⑪)　平型の合子で型押しにより作っている。無文のものと花文の入ったものがみられる。

(3)石器（Fig 57）

石器は座主遺跡1区南側・4区第4層から出土した。1区南側からは石鏃・つまみ形石器・多数の縦長剥片・石核が出土し、4区第4層からは図示してないが、敲石、石皿が出土した。

石鏃(①、②)は剥片鏃で、縦長剥片を素材として作成したもので、黒曜石製である。つまみ形石器は黒曜石製で打面側の部分である。石匙④はサヌカイト製で、横長の剥片を素材とし、両面から剥離を加え刃部を作成している。縦長剥片(⑤～⑧)は、石核から剥ぎ取ったもので、黒曜石製。長さ2cm程の小型のものから6cmの大型のものがある。打面側を折り取ったものもみられる。石核(⑨、⑩)は黒曜石の角礫を利用し、上下から縦長剥片を剥ぎ取っている。

(4)石製品・土製品その他の遺物

a．石帯（Fig 56　PL21）

腰帯に用いられた銙の巡方とよばれるもので長辺が3.5cm、短辺が3.1cm、厚さ0.65cmである。色調は黒色で、表面および側面はていねいに磨かれ光沢を放っている。裏面は周囲が磨かれ、面取りされ、内側は荒く磨かれたままで擦痕が残っている。裏面に装着のためのかがり穴が4ヶ所に2個ずつ彫り込まれている。1区南側出土。

b．石鍋（Fig 56　PL21）

口縁部と底部の一部分で滑石製である。口縁部下に鍔がまわる。鍔は⑫・⑫は断面台形で、⑬は三角形である。外面にノミの痕が残っている。2区および6区包含層出土。

c．瓦（Fig 56　PL21）

2点あるが、どちらも磨滅が激しい。⑬は丸瓦で内面に布痕がみられる。⑬は平瓦で外面に縄目、内面に布痕がみられる。4区包含層出土。

d．銭（Fig 56　PL21）

北宋銭の「皇宋通宝」(初鋳1039)で、直径2.4cm重さ3.4gである。2区表土層出土。

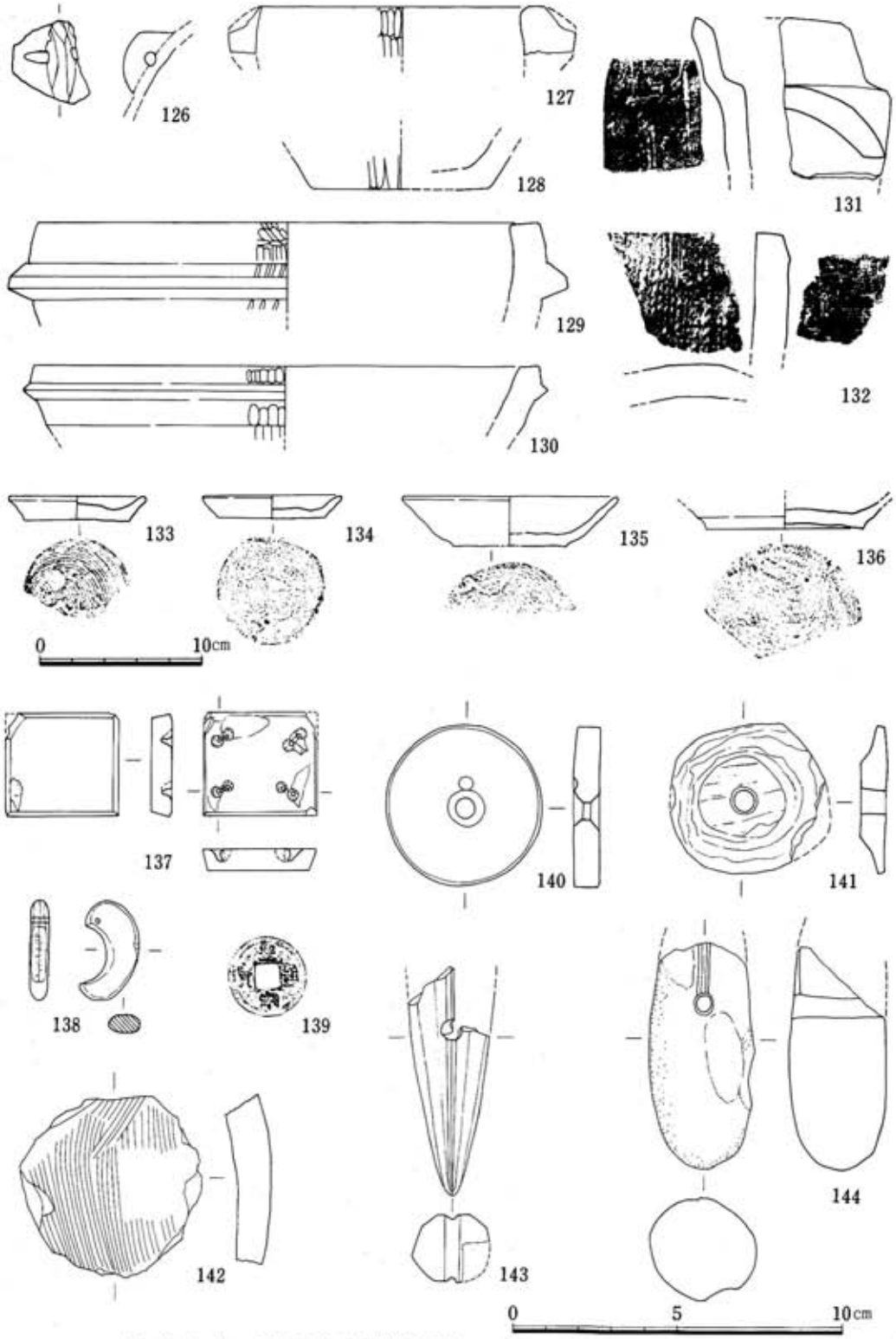


Fig. 56　座主遺跡・前田原遺跡出土遺物実測図

e．紡錘車（Fig 56　PL21）

2点あり、⑩は円形で直径4.8cm、厚さ0.8cm。中央に1ヶ所の穿孔がある。この穿孔の横にもう1ヶ所途中まで穿孔しかけた痕がみられる。砂岩製。⑭は隅丸方形で、断面は台形になる。長さ4.8cm、幅4.4cm、厚さ0.6cmである。結晶片岩製。⑩は4区第4層出土、⑭は2区表採。

f．土錘（Fig 56　PL21）

⑭は楕円形で暗褐色の土製。上部に穿孔があり、紐かけのための溝がある。5区包含層出土。⑭は青灰色粘土製で、穿孔と縦にめぐる溝がある。6区東側包含層出土。⑩は弥生土器の甕の破片を利用したもので、周囲を打ち欠き円形にしており、錘としての用途が考えられる。4区第4層出土。

g．木製品（Fig 52　PL21）

㉛は木製高杯の脚の一部分で、四方透しが入ると思われる。ろくろを利用して削り加工している。復元裾部径㊱cm。4区第4層出土。

B．前田原遺跡出土の遺物

須恵器（Fig 58）

①・④は蓋で①口径12.6cm、器高4.4cm。天井部が丸くなる。調整は天部の外面がヘラケズリ、内面がナデ

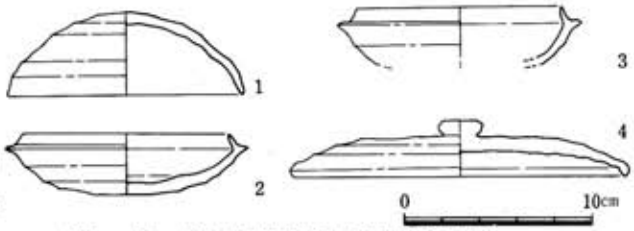


Fig. 58　前田原遺跡出土須恵器実測図

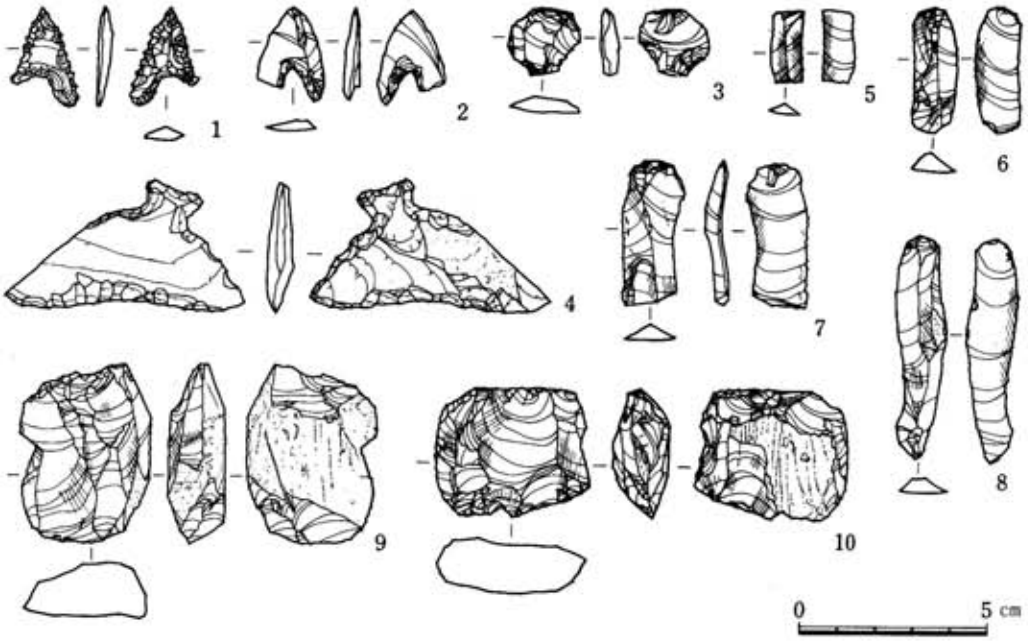


Fig. 57　座主遺跡出土石器実測図

で他はヨコナデである。④は口径18.2cm、器高3cm。天井部につまみをもつ。調整は天井部外面がヘラケズリ、内面がナデで他はヨコナデである。②③は杯で立ち上がりを有する。口径109cm～11cm、器高3.2cm。調整は底部外面がヘラケズリ、内面がナデで他はヨコナデである。

勾玉（Fig.56　PL21）

黒灰色の滑石製の勾玉である。長さ3cmで両面を平に面取りしている。

Tab 8　座主遺跡出土縄文・弥生土器一覧表※①口径　②器高　③胴部最大径　④底部径　（ ）内は推定値

番号	図版番号	器種	出土地	色調	法量	形態の特徴	手法の特徴
1		鉢	1区南側	黒褐色	①(35.2)	肩部が肥曲し、沈線をめぐらす。	内・外面とも入念なヘラ磨き
2		壺A	〃	明黄褐色		肩部に浅い沈線をめぐらす。	外面ヘラ磨き。内面に指頭圧痕が残る。
3		甕A	〃	暗褐色		口縁がゆるく外反し刻目を施す口縁下に段がつく。	
4		壺B	4区第4層	黄褐色	①23.6	口縁が外反し、端部が若干肥厚する。	内・外面ともヘラ磨き
5		壺C	〃	暗黄褐色	①20.4	口縁が外反し、端部内面が肥厚する。	口縁部付近ヨコナデ
6	PL・18	〃		黄褐色	①26 ③24	鍵形口縁をもち、肩部に一条の突帯をめぐらす。	口縁部付近ヨコナデ、他はナデ
7		〃	〃	暗黄褐色	④6.5	底部から強く開き胴部へ移る。	外面縦方向のヘラ磨き、内面ナデ
8		壺D	〃	暗褐色	①12.6	口縁部が袋状で外側に稜がつく	口縁部内面に指頭圧痕、内外面ハケ目。
9		〃	〃	黄褐色	①20.1	〃	外面ハケ目、内面ナデ
10		〃	1区南側	〃		頸部に断面三角形の貼付突帯をめぐらす。	頸部外面ハケ目
11		甕B	4区第4層	黒褐色	①20.4	断面三角形の口縁部をもつ。	口縁部付近ヨコナデ
12		甕C Ⅰ	〃	〃	①29	口縁部がほぼ直角に外反	口縁部付近ヨコナデ、外面ハケ目内面ヨコナデ
13		甕C Ⅱ	〃	暗黄褐色	①26	T字状の口縁部をもつ、胴部はほぼ直角に立つ。	〃
14		〃	〃	〃	①27.8	〃	〃
15	PL・18	〃	〃	〃	①26.4	〃	〃　外面あらいハケ目
16		〃	〃	〃	①27.8	T字状の口縁部がや・外側にたれる。	〃　外面ハケ目内面ナデ
17		〃	〃	〃	①28.2	〃	〃
						口縁部が直角に外反し、口縁部	
18		〃	〃	〃	①29	下に断面三角形の貼付突帯をめぐらす。	〃
19		〃	〃	〃	①29.8	T字状の口縁部をもち、口縁部下に断面三角形の貼付突帯をめぐらす。	〃
20		甕D	〃	〃	①24.6	口縁部が「く」の字状に外反し、肩部がや・張る。	外面や・あらいハケ目、内面ナデ
21		鉢	〃	黄褐色	①30.2	口縁部がほぼ直角に外反する。	外面ナデ、内面研磨
22		甕（底部）	〃	暗褐色	④8	上げ底	外面ハケ目、内面ナデ
23		〃	〃	〃	④9.8	上げ底で裾がや・開く。	〃

番号	図版番号	器種	出土地	色調	法量	形態の特徴	手法の特徴
24		甕（底部）	4区第4層	暗黄色	④ 7.2	平面で、底面は凸凹している。	底部付近ヨコナゲ、外面ナデ、内面ナデ
25		〃	〃	黒褐色	④ 7.4	ゆるい上げ底	外面ハケ目、内面ナデ、内面に指頭圧痕が残る。
26		〃	〃	〃	④	〃	
27		〃	〃	黄褐色	④ 8	平底で薄い	外面あらいハケ目、内面ナデ
28		〃	1区南側	〃	④12	大きな平底で薄い	
29		〃	4区第4層	〃	①11	〃	外面ハケ目
30		〃	〃	暗黄褐色	①33	T字状の口縁部を持ち、胴が強く張る胴部に断面台形の貼付突帯をめぐらす。	外面ハケ目のあとナデ、内面ナデ
32		〃	〃	黄褐色	①14.6	口縁部が強く外反する	体部上半外面ヨコナデ、下半外面縦方向のナデ
33		壺E	〃	〃		頸部に貼付突帯をめぐらし、格子目を施す。	内・外面ヨコナデ
34		高杯	〃	〃		口縁部内面に粘土帯を貼りつけ肥厚させこれに波状文が入る	内面に指頭圧痕
35		壺E	4区第4層	黒褐色	①15.9	口縁部が直立し、口縁端部がわずかに凹む卵形の胴部をもつ	内・外面あらいハケ目
36		〃	〃	〃	①17.2	口縁部がわずかに外反する頸部に断面三角形の貼付突帯をめぐらす。	口縁部、頸部外面ヨコナデ、内外面ハケ目
37		〃	〃	暗褐色	①24.2	口径部がゆるく外反する	口縁部内面ヨコナデ、外面ハケ目
38		鉢	〃	暗灰褐色		口縁部がわずかに外反し、小さな底部がつく。	
39		高杯	〃	赤褐色		脚部がラッパ状に開く	外面ハケ目、内面ナデ、内面に指頭圧痕が残る。
40	PL・18	器台	2区表採	黄褐色	① 8.5 ② 9.2	筒状の体部に外反する口縁部と裾部がつく。	内・外面に指頭圧痕が明瞭に残る。
41		〃	4区第4層	黒褐色	①13	〃	口縁部付近、ヨコナデ、外面ハケ目
42		〃	6区包含層	灰褐色	①13	裾部が強く開く	外面上部ハケ目
43		底部	〃	灰黒色	④19.4	丸底に近い平底	
44		〃	4区第4層	暗黄褐色	④ 8.4	丸底	外面叩き後ハケ目、内面ナデ
45		〃	〃	〃		〃	外面ハケ目、内面あらいハケ目

Tab 9　座主遺跡出土土師器一覧表

番号	図版番号	器種	出土地	色調	法量	形態の特徴	手法の特徴
46		壺	6区包含層	明黄褐色	①27.0	二重口縁が強く外反、頸部がしまる。	外面ヨコナデ
47		〃	〃	暗褐色	①12.9	二重口縁がゆるく外反	内・外面ヨコナデ
48		〃	〃	黄褐色	①13.6	〃	〃
49		甕	〃	暗黄褐色	①17.2	口縁部が強く外反、端部肥厚、体部に文様あり	口縁部内外面ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ
50		〃	〃	〃	①16.4	口縁部が内傾しつつ外反	外面、口縁部内外面ヨコナデ体部内面ヘラケズリ
51		〃	〃		①12.8	口縁部がわずかに外反、口縁端部が尖る。	体部内面ハケ目、外面調整不明
52		〃	〃		①14.2	口縁端部が尖る。	口縁部内外面ハケ目、体部外面叩き、内面あらいハケ目
53		〃	〃	黄褐色	①24.2	口縁端部が若干凹む	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハケ目
54		〃	〃	淡褐色	①19.8	口縁端部が尖る	口縁部内外面ヨコナデ
55		〃	〃	黄褐色	①24.0	口縁部が厚く、強く外反	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハケ目、体部内面ヘラケズリ
56		甕（底部）	2区	褐色		底部わずかに尖りぎみの丸底	外面ハケ目、内面ヘラケズリ
57		小型丸底壺	〃	淡灰色	① 8.6	口縁部ゆるく外反頸部のくびれ小。	調整不明

番号	図版番号	器種	出土地	色調	法量	形態の特徴	手法の特徴
58	PL・18	小型丸底壺	6区包含層	明黄褐色	①14.4 ② 6.7	口縁部が強く外反する。	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハケ目 内面ヘラケズリ後ナデ
59		〃	〃	暗黄褐色	①21.6	〃	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ナデ
60	PL・18	〃	〃	褐色	④16.0	杯部は下部でゆるく屈曲する。	外面ハケ目の後ナデ、内面ナデ
61		高杯	〃	赤褐色		杯部下部に段がつく。	内外面ナデ
62			〃	明黄褐色	④11.2	脚部がラッパ状に開く	内外面ナデ、ハケ目の後ナデ
63			〃	灰黄色	①11.8	脚部下部で屈曲する。	
64			〃	明黄褐色	①(10.5) ②(6.6)		外面内面ナデ裾部内面外面ハケ目が残る
65	PL・18	器台	6区包含層	淡褐色	①10.4 ② 8.7	脚部が強く開く。3ケ所に穿孔、うち1ケ所未通	外面、皿部、内面研磨脚部内面ナデ
66		台付鉢	〃	黄白色	④10.6 ④10.8	脚部は短かく、強く開く。	内外面ナデ

Tab 10　座主遺跡出土須恵器一覧表

番号	図版	器種	出土地	色調	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
67		蓋B	4区第3層	灰色	①15.0	天井部が平坦、口縁部内側にかえりをもつ	外面ー天井部ヘラケズリ 他はヨコナデ 内面ーヨコナデ、ナデ	宝珠様のつまみがつくと思われるが欠失している
68		〃	〃	灰黒色	①17.2	口縁部内側にかえりをもつ	内外面ーヨコナデ	
69		蓋C	〃	灰色	①14.1 ② 2.1	低い天井部に先端が下方に屈曲する長い口縁部がつく	外面ー天井部ナデ他はヨコナデ 内面ーナデ	
70	PL・18	〃	〃	暗灰色	①12.3 ② 2.8	宝珠様つまみをもち、天井部が丸味をおびる	外面ー天井部ヘラケズリ 他はヨコナデ、内面ーナデ	内面煤が真黒に付着
71		〃	〃	暗灰色	①17.0		〃	
72		〃	〃	灰色	①14.8 ② 1.7	宝珠様つまみをもち、天井部はほぼ水平	〃	
73		〃	〃	黄白色			〃	
74		〃	〃	暗灰色	①17.1	天井部が丸味をおびる	〃	
75	PL・18	蓋D	〃	灰白色	①14.0 ② 3.7	丸いつまみをもち、天井部が水平	外面ーヨコナデ、内面ーナデ	
76		皿	〃	灰色	①15.0 ② 2.0	口縁部が強く外反し、端部が丸い	外面ー底部ナデ、他はヨコナデ 内面ーナデ	
77		〃	〃	黄灰色	①14.0 ② 2.0	口縁部が強く外反する。外面底部近くに沈線がめぐる	〃	
78		〃	〃	灰色	①13.9 ② 2.3		〃	
79		〃	〃	灰白色	①15.7 ② 1.7	〃	〃	
80		〃	〃	灰色	①16.9 ② 1.8	〃	〃	
81		〃	〃	灰白色	①17.7 ② 2.4	〃	〃	
82	PL・18	杯身	〃	暗灰色	①13.0 ② 3.6	口縁部がゆるく外反する。底部は高台をもたない	外面ー底部ナデ他はヨコナデ 内面ー底部ナデ	
83		〃	〃	〃	①12.8 ② 3.8		〃	
84		杯A	〃	〃	①13.4 ② 3.2	〃	〃	
85		杯B	〃	〃	①11.4 ② 4.9	底部に高台がつく	外面ー底部ナデ、他はヨコナデ 内面ーヨコナデ、ナデ	
86		〃	〃	〃	①11.8 ② 3.4	口縁部がわずかに外反する。	〃	
87		〃	〃	〃	①12.9 ② 4.0	〃	〃	

番号	図版	器種	出土地	色調	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
88		杯B	4区第3層	暗灰色	①13.8 ② 4.0	口縁端部がわずかに外反し端部がや・尖る。	外面ー底部ナデ、他はヨコナデ 内面ーヨコナデ	
89		〃	〃	〃	①13.4 ② 4.7	〃	〃	
90		杯C	〃	〃	①17.4 ② 5.8	底部に幅の広がった高台がつく 体部から口縁部にかけてや・強く外反する。	〃	
91		蓋A	〃	〃		天井部と体部の境に段がつき、口縁端部がわずかに外に開く。	外面ー天井部ヘラケズリ 内面ーヨコナデ	
92		平瓶	〃	〃	① 8.8	口縁部が外反し、端部がや・肥厚する。体部に稜がつく。	内外面ヨコナデ	
93		鐘	〃	〃	③ 8.5	体部は丸く肩部に2条の沈線をめぐらす。	外面ー上半ヨコナデ 下半ヘラケズリ	
94		高杯	〃	〃	④11.2	裾部から強く開く。端が肥厚し尖る。四方透しがはいる。	内外面ヨコナデ	底部にヘラ記号あり
95	PL・18	鉢	〃	〃	①23.5 ②13.8	口縁部がゆるく外反し端部が肥厚する。	外面ー口縁部ヨコナデ底部近くヘラケズリ内面ーヨコナデ、ナデ	
96		甕	〃	〃	①18.8	口縁部がゆるく外反し端部がわずかに肥厚する。	内外面ヨコナデ	
97	PL・18	〃	〃	〃	①17.4	口縁端部が幅広く肥厚する。	外面ー口縁部ヨコナデ体部タタキ 内面ー口縁部ヨコナデ体部タタキ	
98		〃	〃	〃		口縁部が幅広く肥厚する。	内外面ヨコナデ	
99		皿	〃	〃	①15.4 ② 1.8	完成品、口縁部が強く外反する。	外面ー口縁部、ヨコナデ底部ナデ 内面ーヨコナデ	底部外面「廣」の墨書
100		杯C	〃	〃	①16.5 ② 6.0	底部に幅の広がった高台がつく 体部から口縁にかけや・強く外反する。	外面ー体部ヨコナデ 内面ーヨコナデ、ナデ	底部外面「大」の墨書
101		杯B	〃	灰色	①13.6 ② 4.1	体部から口縁部にかけや・強く外反する。	〃	底部外面に「坂本」の墨書
102		杯A	〃	暗灰色	①13.8 ② 4.0	底部に高台がつかない。口縁端部が尖り気味	外面ー底部ナデ他はヨコナデ 内面ーヨコナデ	〃
103		皿	〃	淡灰色	①18.7 ② 2 3	口縁部が強く外反する。	外面ー底部ナデ他はヨコナデ 内面ーヨコナデ、ナデ	底部外面に墨書
104		杯B	〃	暗灰色	①12.4 ② 4.5	底部に短い高台がつく	外面ー底部ヘラケズリ高台部・体部ヨコナデ 内面ーヨコナデ、ナデ	〃
105		杯A	〃	暗灰色		底部の小破片	内外面ナデ	〃
106		杯B	〃	〃		底部に高台がつく	外面ー底部ナデ他はヨコナデ 内面ーヨコナデ、ナデ	底部外面に「六」の墨表
107		杯D	〃	灰色		底部に長い高台がつく	内外面ーヨコナデ	底部外面に墨書あり
108		杯	〃	淡灰色	①12.8			体部外面に「大」のヘラ文字あり

総　括

遺　構

座主遺跡は鎌倉岳の東側山麓から水田部にかけて南北約180ｍ、100ｍ以上の範囲に広がる遺跡である。

縄文時代・弥生時代の遺構は検出していない。ただ４区に弥生時代の遺物包含層が認められた。この包含層は谷状の低湿地に遺物が流れ込んで推積したもので、調査区西側の丘陵地帯に弥生時代の遺構の存在が考えられる。

古墳時代の遺構は２区・６区から柱穴が検出されたが、数が少なく性格も明らかでない。遺構の主体は調査区の西側の丘陵にあると考えられる。

奈良時代以降の遺構は２区・６区に土壙、溝状遺構、多数の柱穴群がみられる。遺構は調査区西側の山麓から水田部へと広範囲に広がっている。土壙のうちＳＫ002・003は土壙墓の可能性が強く、奈良時代（８世紀前半）に位置づけられる。多数の柱穴は堀立柱建物跡の存在を予想させるが　調査区が狭いため、その配列は明らかでない。柱穴群の時期は、出土遺物から奈良時代から室町時代と考えられる。また調査区西側や北西の山麓や山腹に多数の石塔姿群[1]がみられ、この遺跡との関係が注目される。

前田原遺跡は主に古墳時代の柱穴が検出され、住居跡の存在が考えられる。

遺物

縄文時代の遺物は１区南側から出土した。土器は鉢で、晩期初頭に位置づけられる。石器は石鏃・つまみ形土器・多数の縦長剥片・石核があり、縦長剥片は鈴桶技法[2]により作成されたもので、石鏃はその縦長剥片から作られた剥片鏃である。これらの石器も土器と同じ時期と考えられる。

弥生時代の遺物は１区南側から出土した数点の土器を除いて、すべて４区第４層から出土したものである。土器は甕Ａ・壺Ａが弥生前期、甕Ｂが中期初頭、甕Ｃ・壺Ｂ・壺Ｃ・鉢Ａが中期前半、甕Ｄ・壺Ｄが後期初頭、壺Ｅ・鉢Ｂ・高杯・器台が弥生後期後半に位置づけられる。
また木製高杯も弥生時代の所産と考えられる。脚の破片だけで全体の器形は明らかでないが、長崎県里田原遺跡出土の木製高杯[3]や、木製ではないが、武雄市都遺跡[4]や佐賀市琵琶原遺跡[5]から出土した透し入り器台に類似している。

古墳時代の遺物は主に土師器で、２区・６区から出土した数点を除いて、ほとんどが５区・６区包含層出土のものである。時期は４世紀末から５世紀前半に位置づけられる。

奈良時代以降の遺物は須恵器・土師器・陶磁器・瓦などがある。須恵器はほとんどが奈良時代のもので、８世紀前半に位置づけられる。陶磁器は主に10世紀後半から13世紀にかけての時期が考えられる。なかでも高麗青磁と越州窯青磁は佐賀県では数少ない資料であり注目される。土師器は糸切底で小皿と杯がみられ、13世紀に位置づけられる。

特筆すべき遺物として、多数の墨書土器・ヘラ文字のある土器・石帯がある。墨書土器が15点、ヘラ文字のある土器が１点[6]みられる。墨書・ヘラ文字がみられるのはみな須恵器で、時期は先述した須恵器と同じである。杯と皿の底部外面に墨書が、杯の体部外面にヘラ文字がみられ、文字は「坂本」「廣」「大」「六」が読める。地名か名前を書いたものと考えられる。石帯は調査区外の出土のため時期は明確にできないが、出土した土の色調やすぐ近くから糸切り底の土師小皿が出土していることから、鎌倉時代の所産である可能性が強い。石帯は九州では太宰府、およびその近隣遺跡、国府関係、寺院跡関係の遺跡から出土しており、官人の生活と関係の深い遺物である。佐賀県での出土例として、久留間遺跡[7]から出土した「丸銙」が１例あり、座主

遺跡出土例はこれに次いで2例目の出土になり、貴重な遺物である。

遺跡の性格

座主遺跡から縄文時代、弥生時代の遺構は検出されておらず、古墳時代もわずかに柱穴がみられる程度である。これらの時期は、調査区西側の丘陵部に住居跡などの遺構が営まれたと予想される。奈良時代以降は、この遺跡の主体となる時期である。多数の墨書土器や石帯の出土から郡衙など官衙的な色彩が強く感じられる。座主遺跡西側には「寺屋敷」「御手水」「寺の池」という地名が残っており寺院跡も考えられる。また古代において徳須恵盆地は松浦潟の入江となっており、河川を利用した水上交通の船泊としての性格が考えられ、石志周辺にあったと推定される駅家[8]との関係が考えられる。その他に、条里関係や荘園関係の遺跡、松浦党関係の武士団の館跡も考えられる。

座主遺跡・前田原遺跡一帯は、途中断絶があるものの、縄文時代から鎌倉、室町時代にかけて継続して営まれた広範囲の遺跡である。今回の調査では、その性格を明らかにすることができなかったが、多数の墨書土器や石帯の出土した遺跡として貴重な遺跡であり、今後、その性格を解明してゆくことが課題となるであろう。

(註)

(1) かつては100基以上あったが、持ち去られたものが多く、現在、数10基存在する。

(2) 茨沢長介・戸沢充則・横田義章「九州における特殊な刃器技法」『考古学雑誌』51　1961

(3) 長崎県教育委員会「里田原遺跡」長崎県文化財調査報告書第25号　1976

(4) 武雄市教育委員会が昭和54・55年度調査した。

(5) 佐賀市教育委員会が昭和55年度調査した。

(6) 報告書作成中、さらに墨書土器2点、ヘラ文字のある須恵器1点が北波多村石崎俊治氏により採集された。墨書は杯の底部外面に「哥」と書かれ、ヘラ文字は杯の底部内面に「大」とある。

(7) 松尾禎作・七田忠志「久留間遺跡調査概報」佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第十輯　1951

(8) 米倉二郎「郡郷と条里制」『佐賀県史』上　佐賀県教育委員会　1968

参考文献

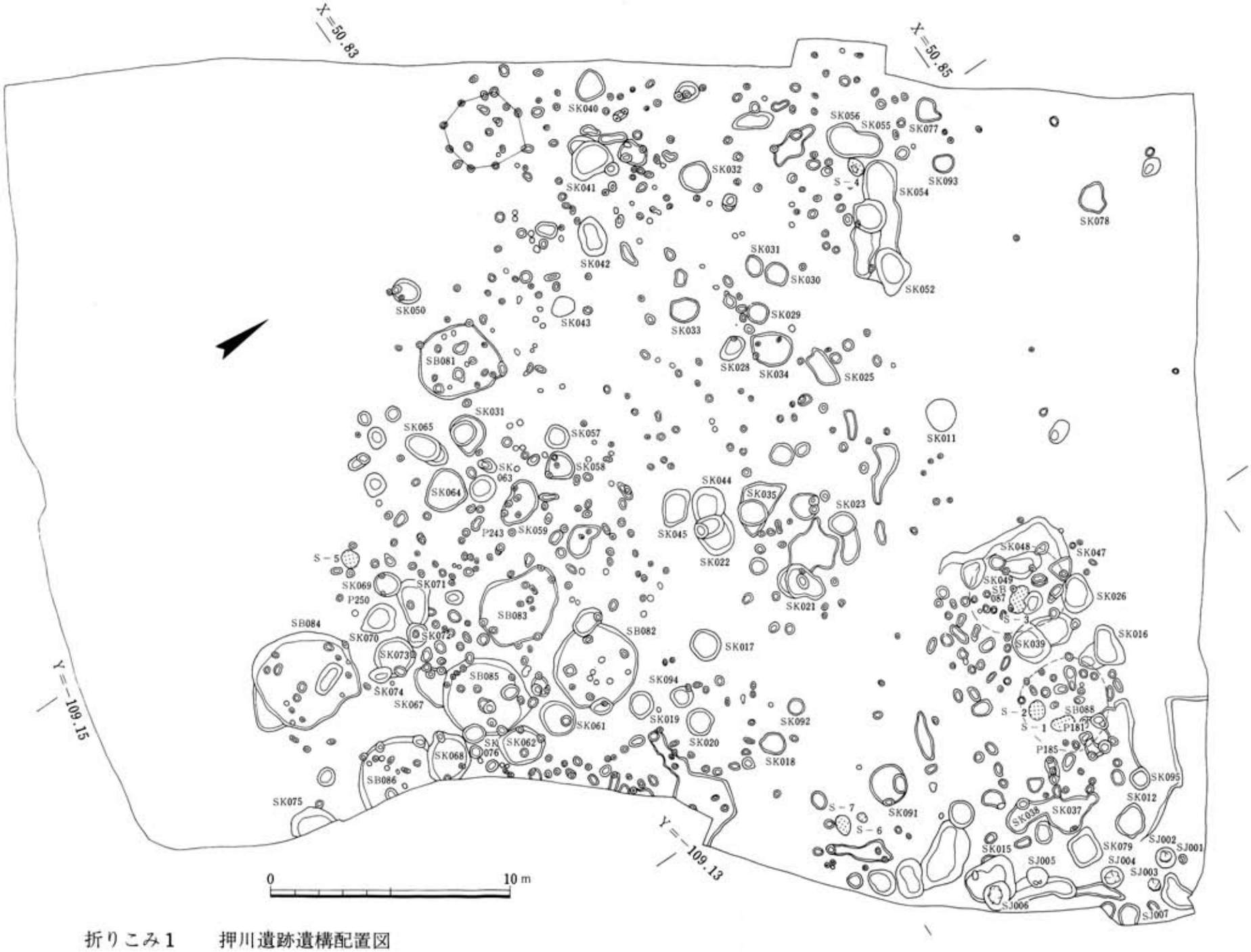
○北波多村史編委員会『北波多村史』1963

○佐賀県教育委員会『佐賀県の遺跡』

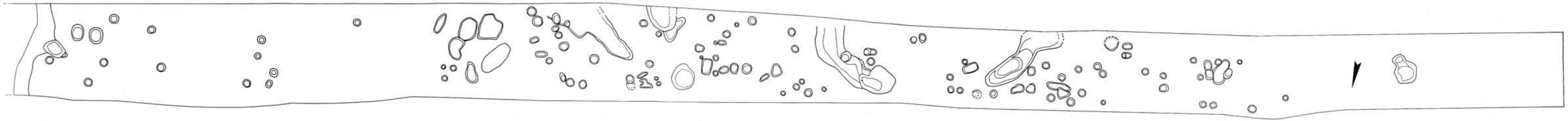
○横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4　1978

○山崎猛夫『岸岳城盛衰記』上巻　1980

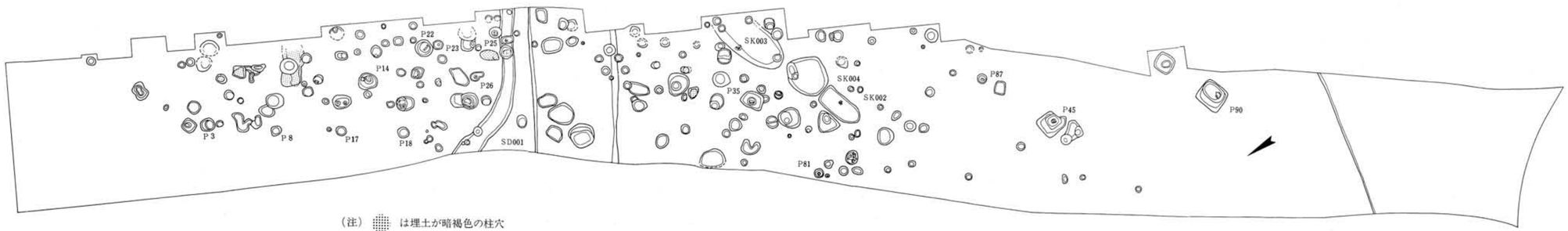
なお墨書土器の墨書文字については九州歴史資料館の倉住靖彦、石丸洋両氏より御教示を得た。記して感謝したい。



折りこみ1　　押川遺跡遺構配置図



前田原遺跡遺構配置図

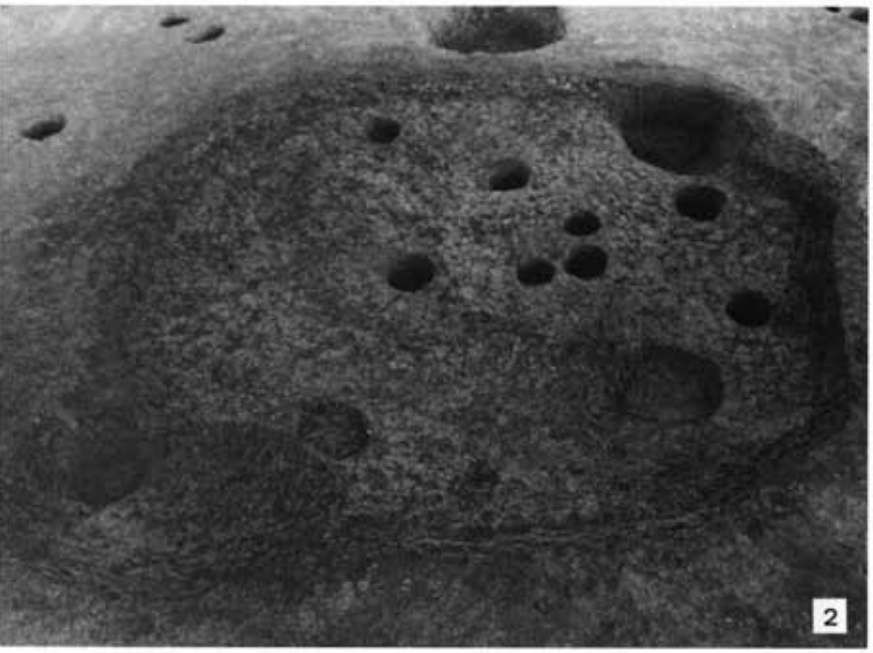


（注）▦ は埋土が暗褐色の柱穴

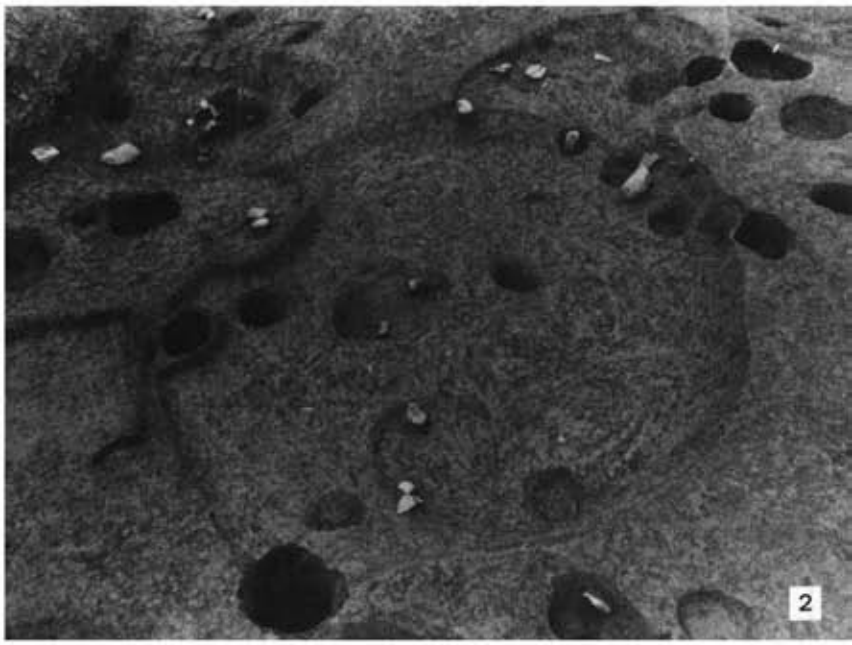
折りこみ2　座主遺跡2区遺構配置図

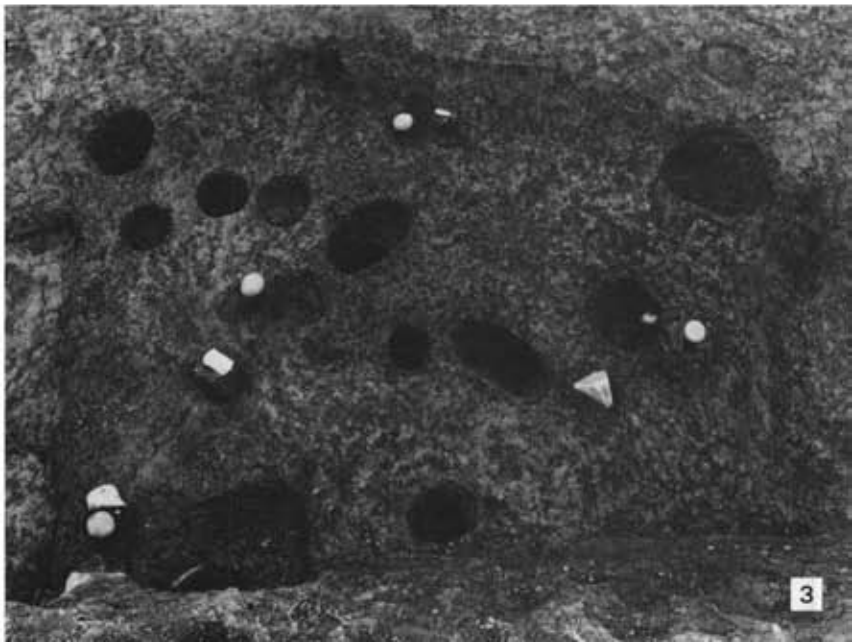
図　版　I

1. 押川遺跡遠景（東から）
2. 押川遺跡調査区全景（北から）
3. 押川遺跡調査区北東部遺構（SB087・088）



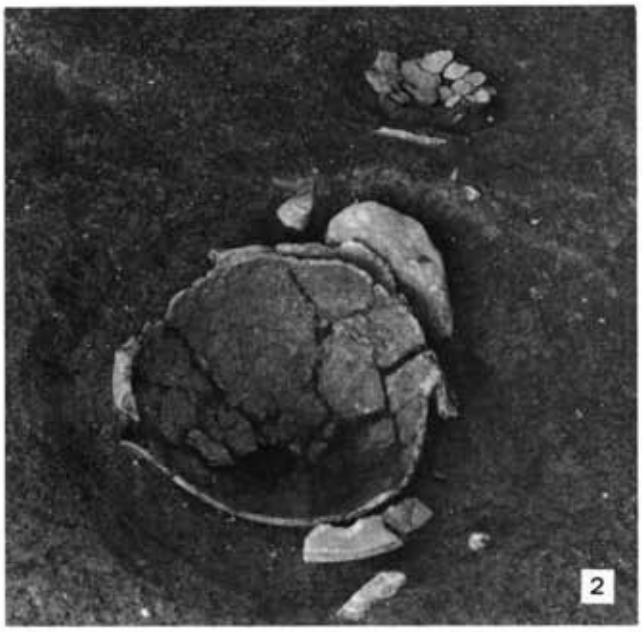
1. SB081 住居跡（西から）
2. SB082 住居跡（西から）
3. SB083 住居跡（西から）

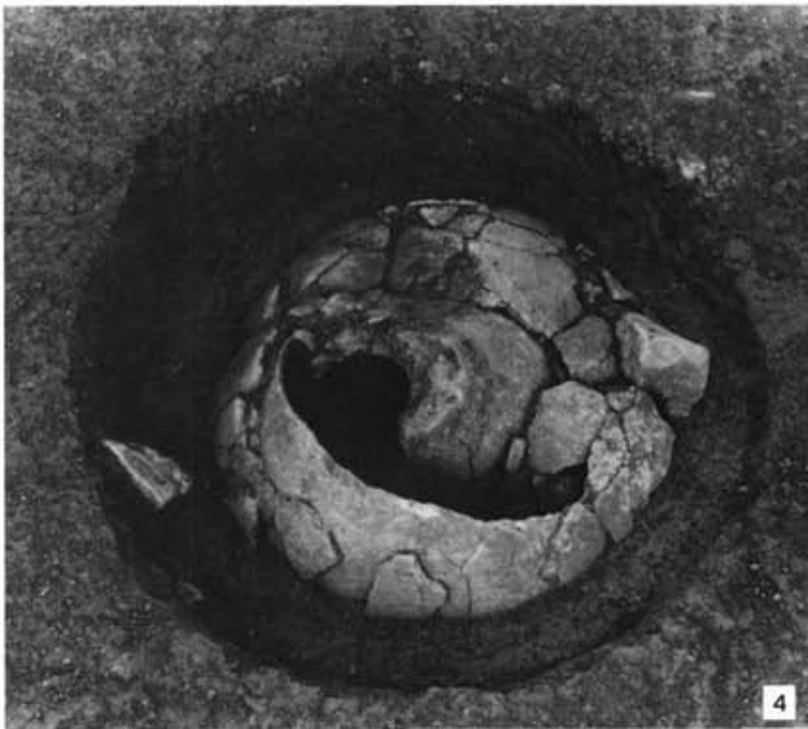




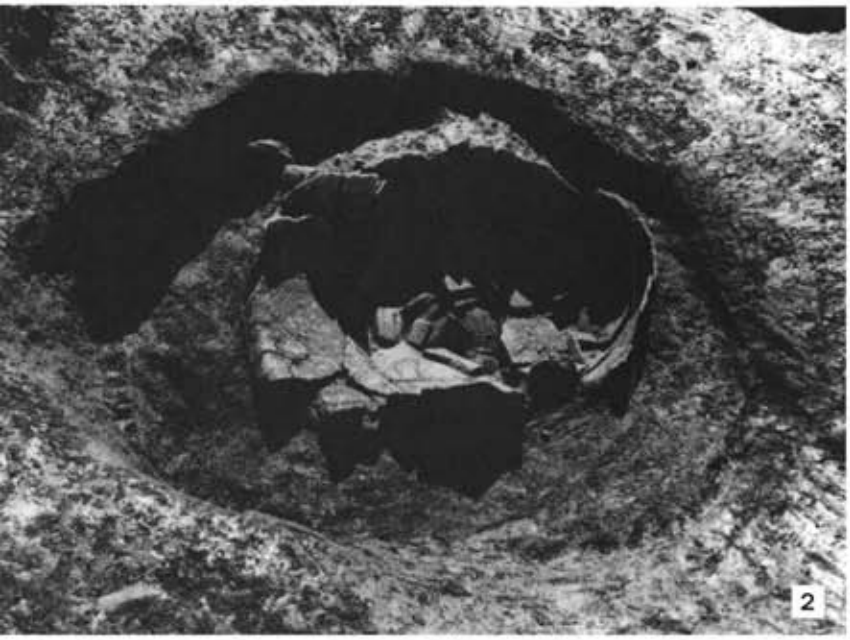
1. SB084 住居跡（西から）
2. SB085 住居跡（北から）
3. SB086 住居跡（東から）

1. SK011 貯蔵穴（南から）
2. SK015 貯蔵穴（東から）
3. SK016 貯蔵穴（北から）
4. SK017 貯蔵穴（南から）
5. SK026 貯蔵穴（南から）
6. SK033 貯蔵穴（東から）
7. SK035 貯蔵穴（西から）
8. P250 柱穴石包丁出土状況（北から

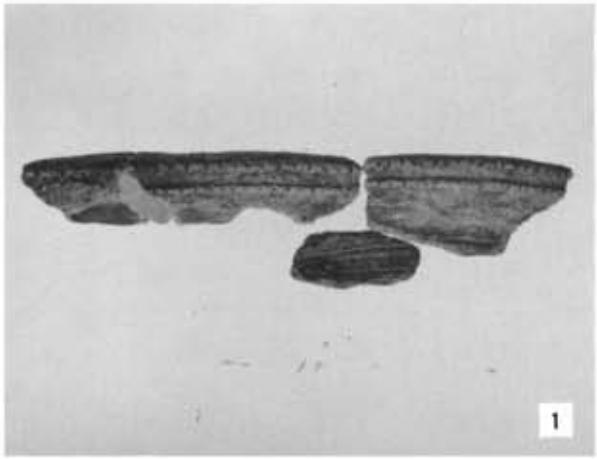


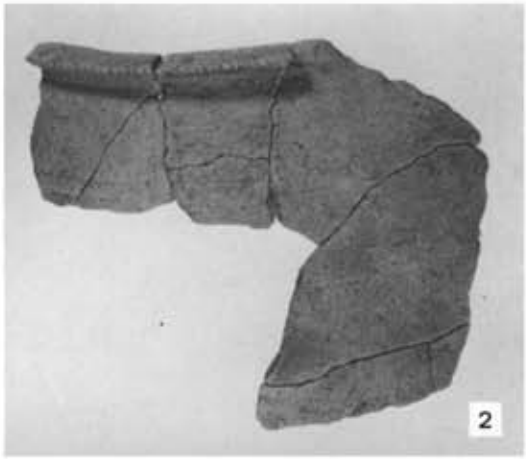


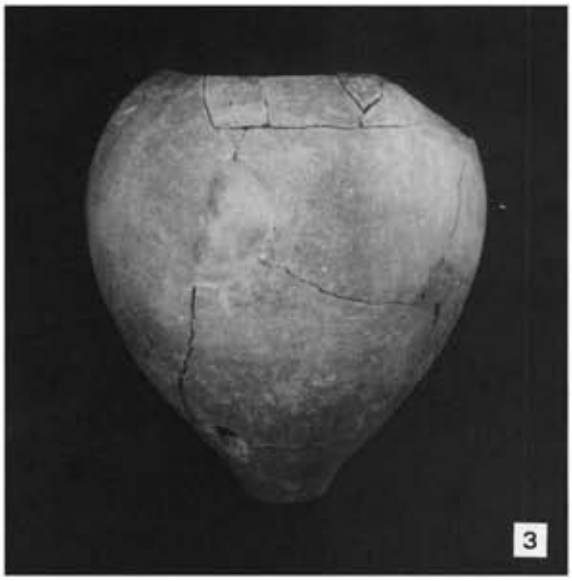
1．押川遺跡甕棺墓群全景（西から）
2．SJ001･002 甕棺墓（南から）
3．SJ003 甕棺墓（南から）
4．SJ004 甕棺墓（南から）

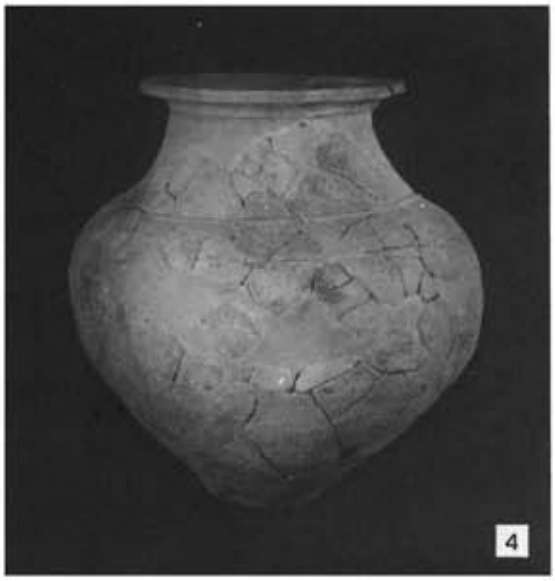


1. SJ005 甕棺墓（北から）
2. SJ006 甕棺墓（北から）
3. SJ007 甕棺墓（南から）

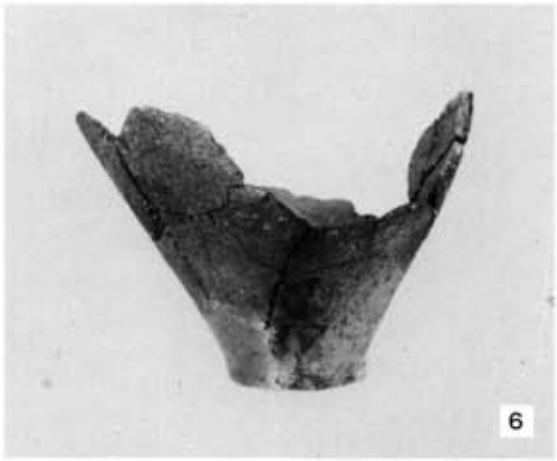




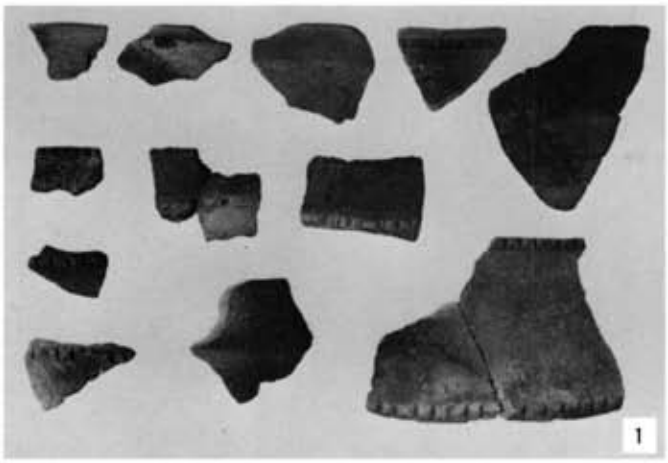


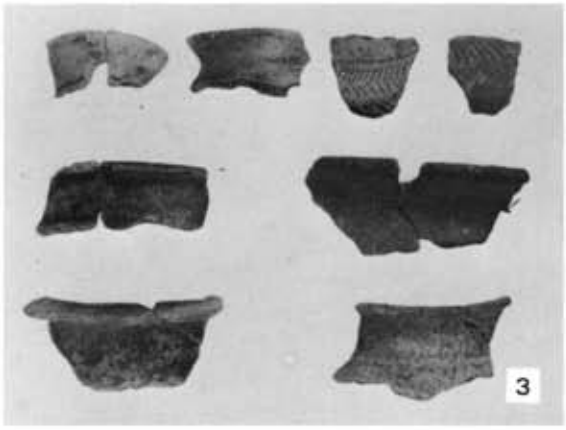


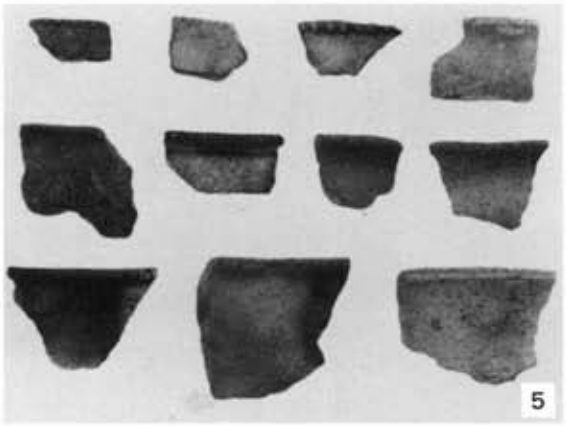
1．SJ002 甕棺（上甕）
2．SJ007 甕棺（上甕）
3．SJ004 甕棺（下甕）
4．SJ005 甕棺
5．SJ006 甕棺
6．SJ007 甕棺（下甕）

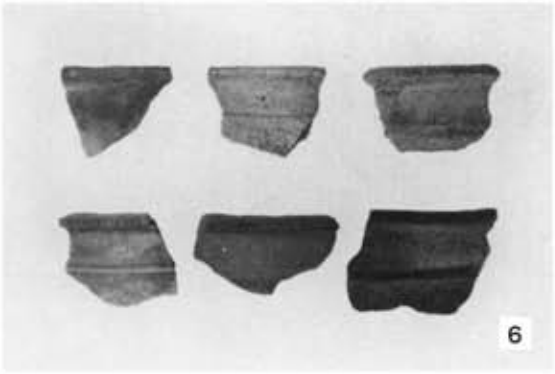


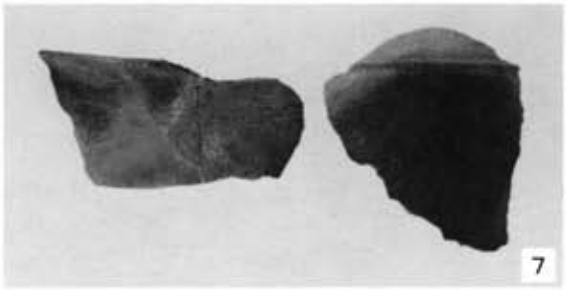
1. SK034 出土
2. SB084 出土
3. P183 出土
4. SB088(P181) 出土
5. SK016 出土
6. P211 出土

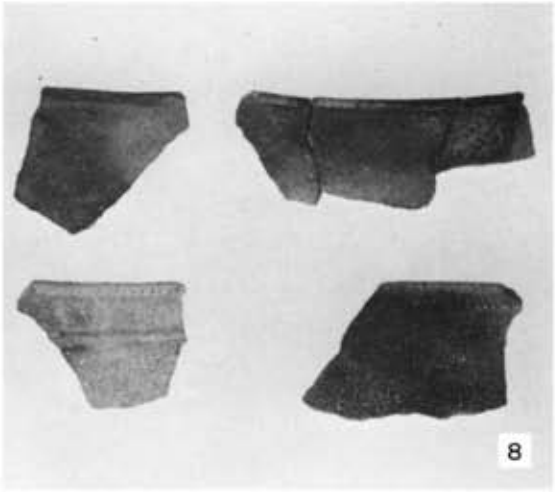




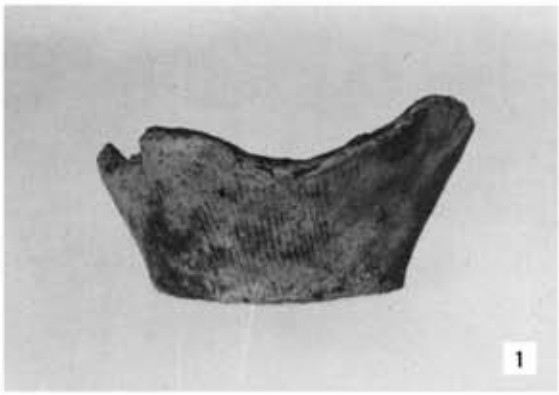




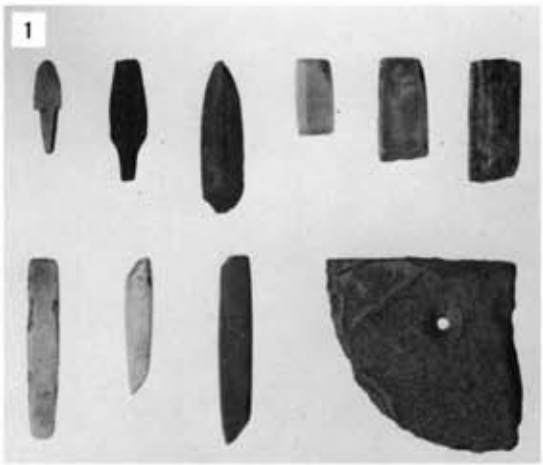


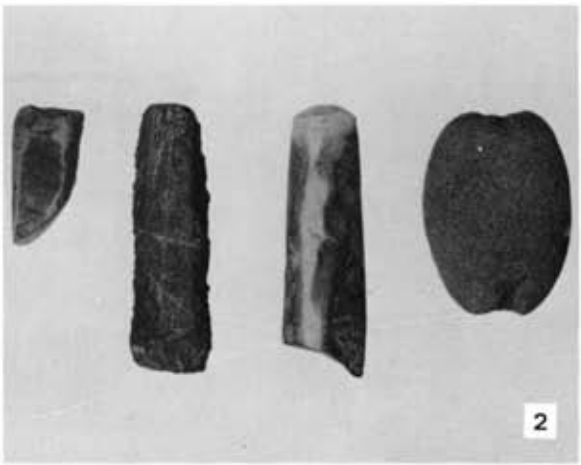


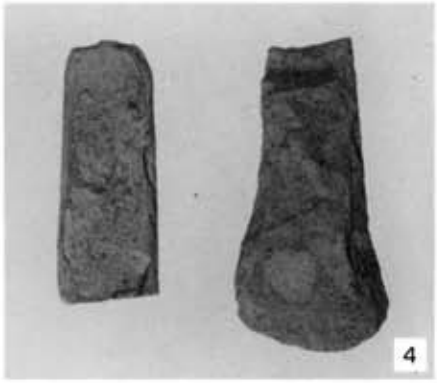
1. 甕A，鉢A・B
2. 甕底部A
3. 壺A・B・C
4. 壺底部A・B・C
5. 甕BⅠ・BⅡ・BⅢ
6. 甕C・D
7. 甕BⅡ・D
8. 甕BⅣ・C

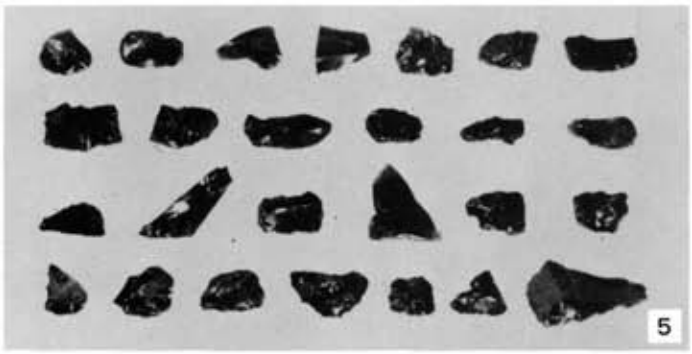


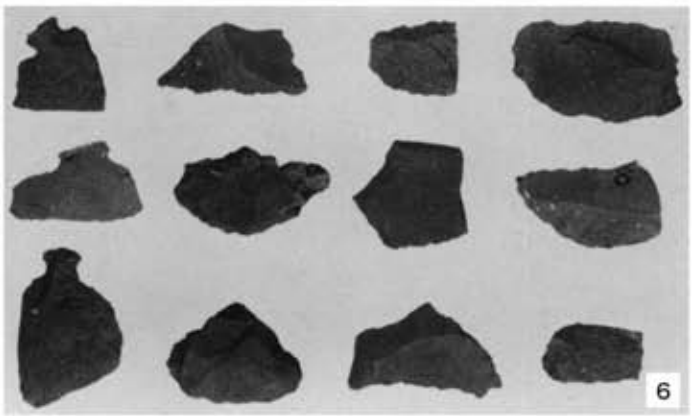
1. SB083 出土　2. SK061 出土
3. SK035 出土　4. SK027 出土
5. SK035 出土　6. SK033 出土
7. SK041 出土　8. SK041 出土
9. SK027 出土

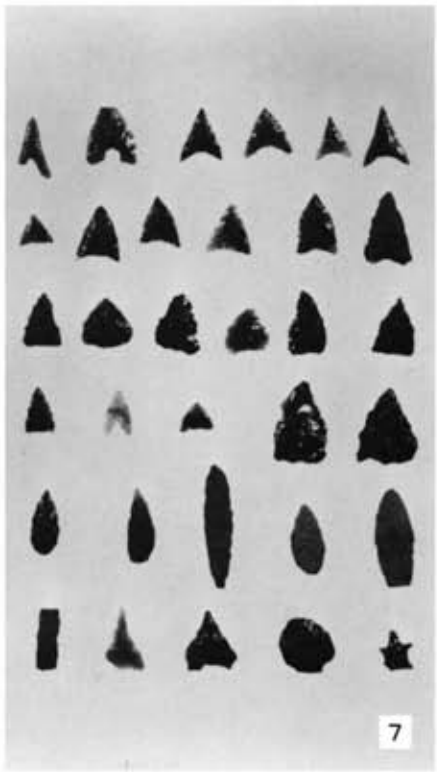




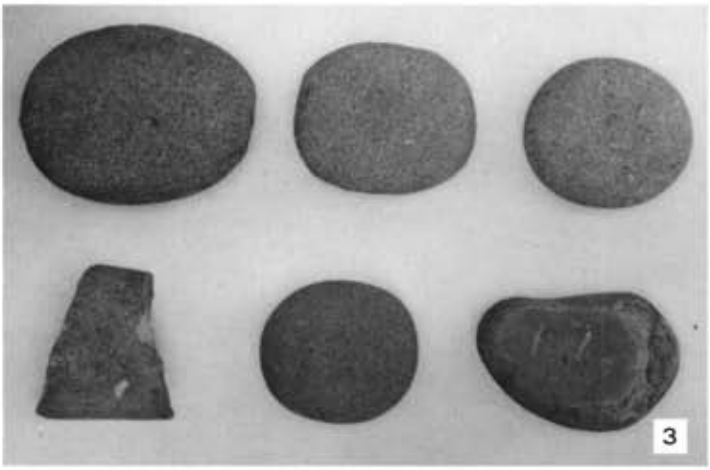


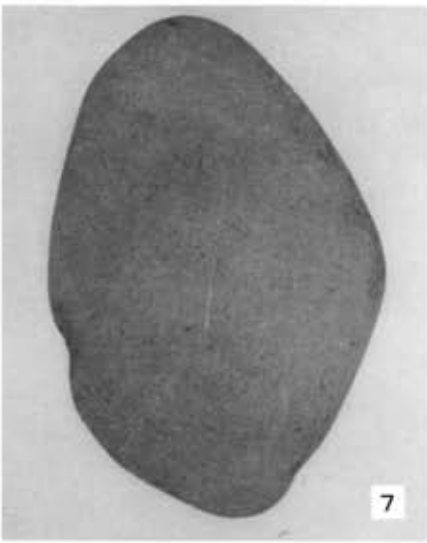






1．磨製石鏃・片刃石斧・石包丁
2．抉入片刃石斧・石錘
3．磨製石斧
4．磨製石斧・打製石斧
5．掻器（黒曜石）
6．掻器・石匙
7．石鏃・サイドブレイド・石錐・つまみ形石器・異形石器



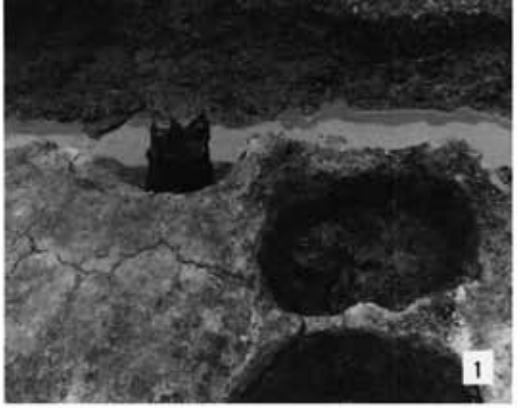


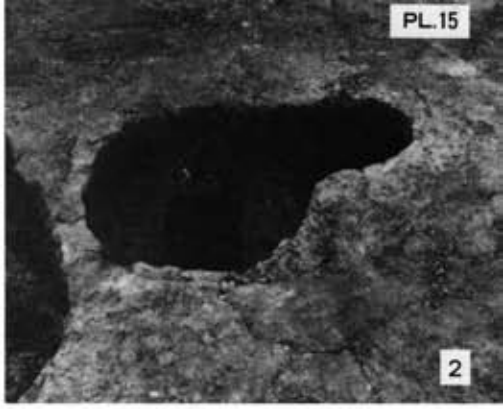
1. 旧石器
2. 石核
3. 磨石
4. 磨石・敲石
5. 石皿・砥石（SK022・表土出土）
6. 石皿（SB084・086 出土）
7. 石皿（SK015 出土）

図　版　II

1．座主遺跡全景（南西から）
2．座主遺跡全景（東から）
3．座主遺跡２区 北側遺構

1．座主遺跡２区 南側遺構
2．２区 SK002 土壙
3．２区 SK003 土壙



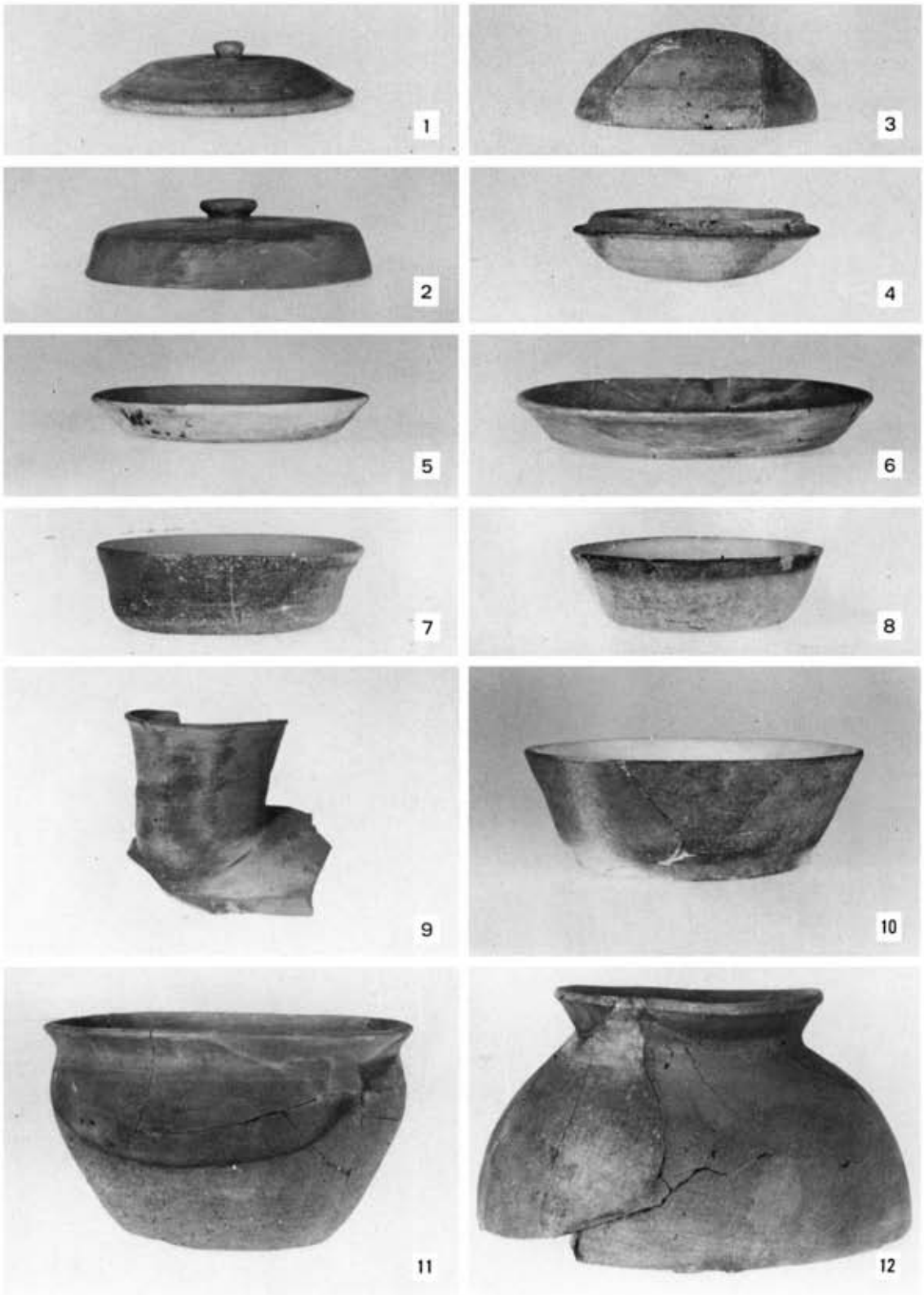


1．2区 P25・P29 柱穴
2．2区 P26 柱穴
3．座主遺跡6区 遺構（西から）
4．座主遺跡6区 南壁土層

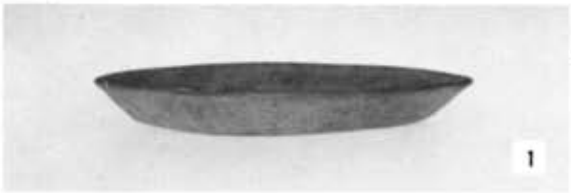
1．座主遺跡４区 全景
（堆積層掘り上げ後一南から）
2．座主遺跡４区 東壁土層
3．４区 第４層木製高杯出土状況
4．４区 第４層弥生土器出土状況
5．４区 第３層墨書土器（須恵器）出土状況
6．４区 第３層墨書土器（須恵器）出土状況

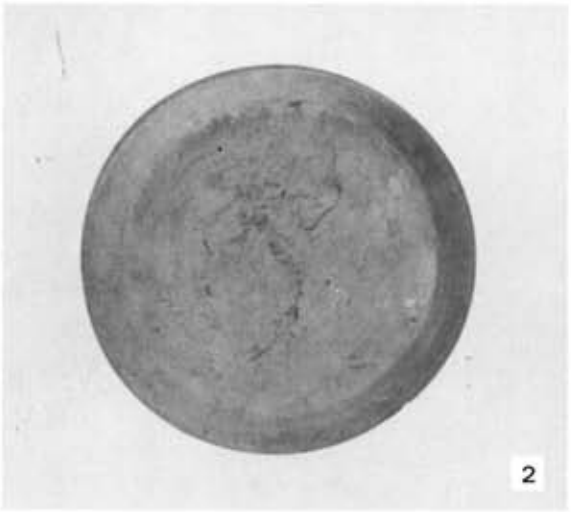
1．前田原遺跡全景（南西から）
2．前田原遺跡調査区全景（北から）
3．前田原遺跡調査区全景（南から）

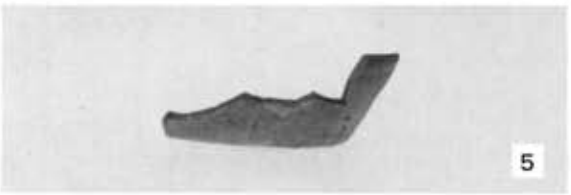
1～4．座主遺跡4区第4層出土
5～8．座主遺跡5・6区包含層出土

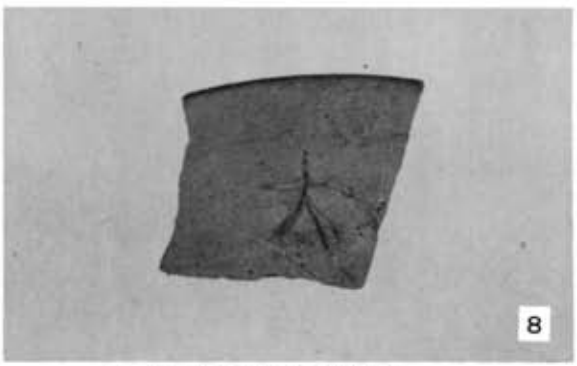


1・2. 座主遺跡4区第3層出土
3・4. 前田原遺跡出土
5・6・8・9～12. 座主遺跡4区第3層出土
7. 座主遺跡2区 SK002 出土
10. 座主遺跡2区 SK003 出土

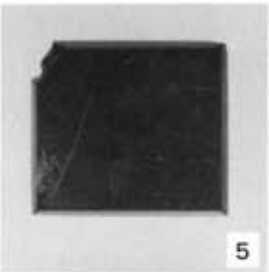


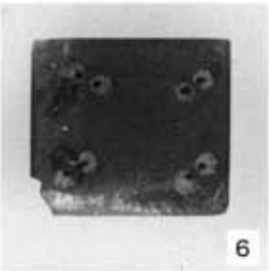


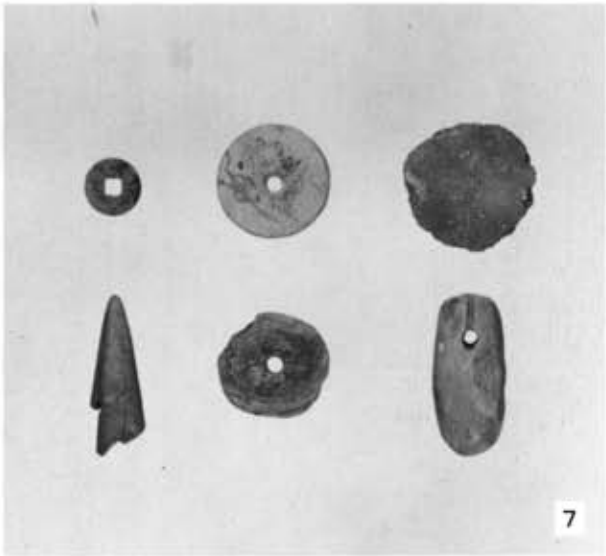




1・2. 4区第3層出土須恵器皿
3・4. 4区第3層出土須恵器杯
5・6. 4区第3層出土須恵器杯
7. 4区第3層出土須恵器杯
8. 4区第3層出土須恵器杯
9. 2区表土層出土合子







1．土師器小皿
2．土師器杯
3．白磁・青磁
4．石鍋
5．石帯（表）
6．石帯（裏）
7．銭・紡錘車・土錘
8．勾玉（前田原遺跡出土）
9．木製高杯

佐賀県文化財調査報告書第60集

押　川　遺　跡

座主遺跡・前田原遺跡

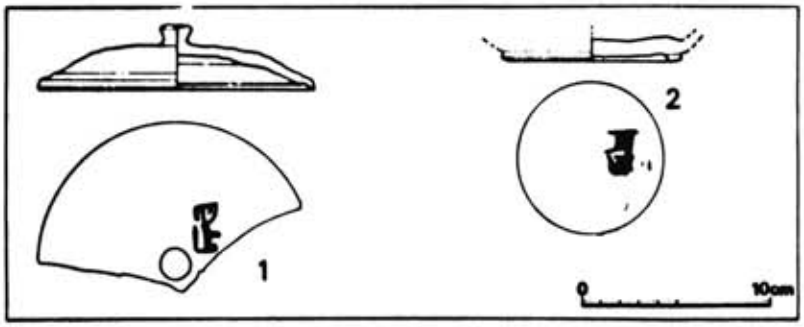
昭和56年３月20日印刷
昭和56年３月31日発行

発行　佐賀県教育委員会
佐賀市城内１丁目

印刷　鹿島印刷株式会社

佐賀県文化財調査報告書第60集

「押川遺跡　座主遺跡・前田原遺跡」佐賀県教育委員会　1981

追記

本報告書校正中、座主遺跡４・５区周辺より墨書のある須恵器が２点採集されたので紹介する。１は蓋で、口径14.4cm 器高３.４cm。天井部の外面に墨書がある。２は杯で、高台径９.６cm。底部外面に墨書がある。